

弥生文化  
博物館  
研究報告  
第9集

**A REPORT OF RESEARCH**

**VOL.9 Mar. 2026**



# 序

大阪府立弥生文化博物館館長

禰宜田佳男

大阪府立弥生文化博物館は、1991年2月2日に開館した。本書が刊行されるのは2026年3月末なので、35年を過ぎたことになる。この間、館は多くのことを経験した。存廃問題、指定管理者制度の導入、指定管理者の変更などである。最後の点だが、令和5(2023)年度からは3つの民間企業による共同事業体が、大阪府から管理運営を任されることになった。民間企業が主体となったことにより、毎月の館会議では入館者数や入館料収入が報告され、それを一層、意識するようになった。計画に対する現状が把握でき、翌月以降の「頑張り」にもつながる。入館者の新規開拓を目指し旅行会社との連携企画も試みている。

また、若干でも予算に余裕が出てきた時には、設備の充実に予算を充当するようになった。講演会でホールに入りきれない方々はサロンで参加することになるのだが、そこに映しだされるパワポ画面が「小さい」とアンケートで指摘されていた。モニターを新たに購入し、この点は改善された。図書購入費に充てられることもあり、蔵書の充実には目を見張るものがある。私自身、民間企業に属することは初めてだが、「民間のノウハウ」と言うのであろうか、これまでとは違い、それがいい方向に進んでいると感じている。今年度で3年間の指定管理期間は終わるが、令和8(2026)年度からの5年間は引き続き現体制で館の運営に当たることになっている。

もちろん、変わっていないこともある。その最たるものが学芸員の仕事ぶりである。学芸員は「雑芸員」とも言われるが、当館学芸員もそうである。展示解説、問い合わせへの対応、図録執筆、館蔵資料貸出対応、機器メンテはもとより、館事業に関する目に見えない諸業務が多々ある。「働き方改革」路線とは一線を画しているようにも思えるが、結果としてこれが弥生文化博物館の多様な面での「質」を担保していることになる。そんななか、令和6(2024)年度からは若手学芸員が講師となる「木曜大学予科」、令和7(2025)年度からは「弥生文化よもやま話」、外部から講師を招聘する「木曜大学特講」など新たな事業が加わった。ますます業務多忙となっているのである。私もつつい仕事をお願いしてしまい、「業務」を増やしていることがある。学芸員はそうした諸業務に追われながら、各自の研究も続けている。当たり前と言えばそれまでだが、今回の研究報告ではそうした日常の業務に追われるなか、日頃から考えていることや学生時代から進めている研究の一端を掲載している。ご一読いただきたい。

さて、35年経過したということで、1991年の開館前後の出来事をネットで調べてみた。1月13日にはリトアニアにソビエト連邦が軍事介入(血の日曜日事件)、1月17日には多国籍軍のイラク空爆開始による湾岸戦争勃発、2月末には多国籍軍により戦争終結、年末の12月1日にはウクライナ独立、そして12月25日にソビエト連邦消滅といった出来事があったことを確認した。35年前が奇しくも現在の世界情勢につながる出来事が頻発した年だったことになる。当館が、そういう時に開館したことは記憶に留めておきたいと思う。

この間、もちろん国内でもいろいろな出来事があった。それはさておき、開館当時との違いとして触れなければならないことは、日本が人口減少社会となっている点である。当時、誰もが「右肩上がり」の社会

が続くものだと思っていた。しかし、2008年をピークに日本は人口減少に陥った。現在、「限界集落」や「自治体消滅」という言葉を耳にするようになってきた。人口が2割減少する2040年頃を見据えて新聞では「8がけ社会」という特集記事も組まれた。やがて、行政は取捨選択を余儀なくされる。将来を見越して、警鐘を鳴らす書物も多数刊行されている。しかし、政治はそんなことお構いなしで「右肩上がり」の社会と同じ方向に進もうとしている。「積極財政」は最たるものである。こうした施策は言うまでもなく、子の代、孫の代に大きな負債をもたらすことになる。誰もその方向の回避へと舵を切ろうとしない。

英国のウェールズでは2015年、未来世代に対しても責任をもって政策を練るための法律「未来世代のためのウェルビーイング法」（未来世代法）を制定した。この法律の下、高速道路の建設が中止になり、公共交通機関への投資が増えるなど社会は変わってきているという。

次の世代が「痛み」を負うのであるから、現代に生きる人もその「痛み」をシェアしたうえで、次の世代に伝えていくのが筋だと思う。

話は大きくそれてしまった。この人口減少社会のなかで、弥生文化博物館も後の世代につないでいくことが我々の世代の責務である。「弥生以外の話を聞きたい」「若い学芸員の話を知りたい」「世界の遺跡・博物館の話を聞きたい」など入館者の方々の声には、可能な限り答えている。ミュージアムコンサートは今でこそ多くのほかの博物館・美術館で開催されているが、35年前はそうではなかった。おそらく弥生文化博物館は老舗のはずで、この企画により、弥生時代に関心のない方々にも館へ来ていただくきっかけとなっている。取捨選択の時代に入って「捨」とならないよう、今まで以上に館の趣旨である弥生時代の専門館としての役割を果たすとともに、地域の方々に親しみをもってもらえる取組を推進しているところである。

歴史研究で求められることは、課題について研究を深めることは言うまでもなく、それが現代社会とどのようにつながっているのかを示すことである。博物館ではそれがいっそう求められる。そのことによって地域の人々に研究の意義を理解してもらうことになるからである。

いま、「弥生時代とは」「弥生文化とは」ということが問われている。研究の深化により弥生時代概念そのものを再考する見解もある。私は、弥生時代概念は有効だと考えており、それを述べる機会は別に設けたいと思うが、この問題は館の存在意義ともかかわっている。

もう絶版になってしまっているが、開館時に刊行した常設展示の解説書は『弥生文化 日本文化の源流をさぐる』というタイトルである。日本社会の起点となる画期はいくつかあるが、コメ作りが始まり、金属器使用が始まり、争いが始まった弥生時代は、日本の歴史において一つの大きな画期であることは間違いない。現代社会とのかかわりという点で、弥生時代は極めて重要な意味をもっているのである。

人口減少社会は、これまでも戦争や飢饉などにより一過性のものはあった。しかし、これからの人口減少は日本が初めて経験する永続的な社会現象である。コロナ禍の際、博物館など文化施設は「不要不急」ということで臨時休館を余儀なくされた。その間、各館は工夫をしながら活動を続けてきた。「人はパンだけで生きるのではない」のであり、「8がけ社会」でも社会と共生ができるはずである。

弥生文化博物館は今後も幅広く様々な活動を続けていく所存なので、引き続き、関係各位からのご指導ご助言、ご協力をお願いする次第である。

# 目 次

序 ..... 禰宜田佳男

## 目 次

### 論考

東大阪市西岩田遺跡・新家遺跡の弥生時代終末期の木製品群 .. 塚本浩司 ..... 1  
—その出土層と年代に関して—

台形土器と弥生土器の製作技術 ..... 三好 玄 ..... 11  
—岸和田市下池田遺跡出土資料の検討から—

弥生文化博物館所蔵の盤龍座獣帯鏡 ..... 高瀬裕太 ..... 21  
—銭文と銘文を中心とした考察—

馬鍬の形態と地域性 ..... 石束 礼 ..... 31  
—古墳時代から古代の木製資料を対象として—

### 講演録

大阪に渡来した竜 ..... 春成秀爾 ..... 41

執筆者紹介 ..... 59



# 東大阪市西岩田遺跡・新家遺跡の弥生時代終末期の木製品群

—その出土層と年代に関して—

塚本浩司

## 1. はじめに

2022年、大阪府東大阪市西岩田遺跡22-1調査で木製仮面が出土した。穿孔で目と口を、削り残して鼻を表現したスギの板で、層位から弥生時代終末期（庄内式土器段階）に位置づけられる（大阪府文化財センター2025）。

類例は奈良県桜井市纏向遺跡149次調査の井戸と同大福遺跡第28次調査の大溝にそれぞれ1点あり、西岩田遺跡は3例目となった。纏向遺跡は都市的様相をもつ初期ヤマト政権中枢と理解され（寺沢2011・2023など）、最初的大型前方後円墳が築造される、弥生時代から古墳時代移行期の最も注目される場所の一つである。仮面を用いた祭祀の性格はまだ定まるとはいえないが（寺沢2022など）、寺沢薫は首長霊を表したもので、弥生時代から続く農耕儀礼から王権儀礼の誕生を示す画期と評価している（寺沢2011・2023など）。

西岩田遺跡の仮面は仕上げが粗いなどの細部も纏向遺跡のものと共通しており、王権と関わる祭祀具が西岩田遺跡にも存在し、同様の祭祀が実施されていたと考えられている。さらに、纏向遺跡との政治的な強い結びつきを示す証拠ともされ、河内湖南岸に位置した西岩田遺跡は河川を通じて大和とつながっており、ヤマト政権の外港、窓口と想定されている（大阪府文化財センター2025、河本2025）。

西岩田遺跡の仮面は遺跡北部に位置する3区において、現地表面から約2.5m下で発見された。出土層は、弥生時代終末期の断続的な氾濫によって堆積した第7層である。第7層は厚さ1.4m～1.8mに達し、漸移的な地層は15に細分されているが、上部がシルト主体の細粒部分、中部が粗砂まで含まれる粗粒部分、下部がシルト主体の細粒部分に大きく分けられており、中部は速い流れの洪水時の堆積物、下部はほとんど流れのない湿地の堆積物とされる。木製仮面が出土したのは下部から中部へ変化する層位であった。

西岩田遺跡の中央には大規模な西岩田（小阪合）分流路が存在し（大庭編2020、別所1999）、頻繁に大規模な氾濫が発生する、不安定で居住には適さない場所と考えられている（安田1978）。仮面の出土層においても明確な遺構は確認されておらず、土器の出土も少ない。

西岩田遺跡、さらには北の東大阪市新家遺跡ではこれまでの調査で、この包含層前後から多量で多様な木製品群が出土している。南北1km以上におよぶ広い領域に散在するようなあり方で、集中部もいくつか認められる。農具や建築材といった一般的なものだけでなく、祭祀具、また権力にかかわる威儀具とされる特殊なものが複数出土するなどその構成が注目され、『木器集成図録 近畿原始篇』でも多くの資料が取り上げられている（上原編1993）。

纏向遺跡の祭祀は火と水を使うもので、最終的に祭祀具をまとめて水を得るために掘削した「祭祀土坑」に廃棄（埋納）したと想定されている（石野2005、寺沢2011、山崎2022など）。西岩田遺跡は出土状況が異なっているにもかかわらず、遺跡から出土した木製品を全体で見れば、祭祀土坑の祭祀具と共通したものが存在することに意味があるはずである。

これまで筆者は西岩田遺跡・新家遺跡で大量の出土木製品群に対して、同時性があるのか、近辺から投棄されたものか、遠方から流水で運ばれたものか、バラエティーの広さの意味など、性格について疑問を感じていた。纏向遺跡と共通する祭祀を実施した集団や状況に迫る前提として、この木製品群をさらに検証する必要があると感じている。紙幅もあるので、今回は遺跡間の層序を対比することによって、まず時期と堆積環境について考えたい。

## 2. 河内湖南岸の環境変化と流路

河内湖南岸の西岩田遺跡周辺には北に新家遺跡、南に瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡、西に意岐部遺跡、南東に岩田遺跡があり、これまで数多くの調査がおこなわれている（図1）。瓜生堂遺跡・新家遺跡・西岩田遺跡において1970年代から実施された近畿自動車道天理～吹田線（以下、近畿道と略する）建設、また、そのジャンクション建設に伴う発掘は大規模で深度が深くまでおよぶもので、弥生時代前期、一部トレンチでは縄文時代晩期からの堆積層まで到達し、堆積環境の変遷が明らかとなる大きな成果が得られた（大阪府教育委員会・大阪文化財センター1983、大阪文化財センター1980・1984・1987・1993、大阪府文化財調査研究センター1995）。

近年では大阪モノレールの延伸に関連して、西岩田遺跡では瓜生堂車両基地建設に伴う21-1調査（大阪府文化財センター2024）、軌道桁を支える支柱建設に伴う22-1調査が実施された。新家遺跡においてもモノレール建設関連の発掘が始まっている<sup>1)</sup>。

ここは古環境・古地形に関する研究も蓄積されており、全国的にも注目すべき地域となっている。弥生時代から古墳時代にかけての堆積環境と流路についての研究を確認しておくことは、調査間、遺跡間の対比に有効である。主要な成果の一部だけとなるが以下に言及する。

河内湖南岸の遺跡の理解に重要なものは梶山彦太郎・市原実の河内湖の研究である（梶山・市原1972・1986）。堆積層の観察と、放射性炭素年代測定、発掘調査成果も用いて、現在の河内平野には過去に水域があり、河内湾、河内潟、河内湖へと変化していったことを明らかにし、領域を表示した。南岸に関しては、弥生時代前期に新家遺跡が離水して河内湖の潮間帯となり人の活動が始まった。その後河内湖は埋没が進み、縮小して汀線が北に後退していく。

安田喜憲の研究も大きな影響を与えており、これは近畿道に伴う調査での層序理解の元となっていよう。花粉分析と堆積層を組み合わせ、瓜生堂遺跡など今回の対象地の調査成果が用いられ、河内湖南岸の環境の変化についても大きく言及している（安田1978・1980bなど）。

瓜生堂遺跡では弥生時代中期の集落や墓域が中期末に泥炭層に埋没して放棄されることに注目し、この段階に水位が上昇したことで湖沼が拡大し、遺跡が水没したと解釈した（「湖沼の時代」）。水域が縮小していくのではなく、一時的に拡大する局面があったと考えたのである。そして、この泥炭層上部には氾濫堆積物が厚く堆積していることから、後期末から流路の氾濫原となり自然堤防（微高地）が形成され地形が大きく変化するとした（「氾濫原の時代」）。

近畿道に伴う調査では瓜生堂遺跡において後期の遺構面が2面確認され（大阪文化財センター1980）、「沼沢地の時代」は長期に及ぶものではなかったなど修正されていく（安田1980a）。その後も発掘調査での堆積層の詳細な観察は続けられ（別所1999、松田1995など）、古地理の復元研究も進んでいる（趙・松田2003など）。

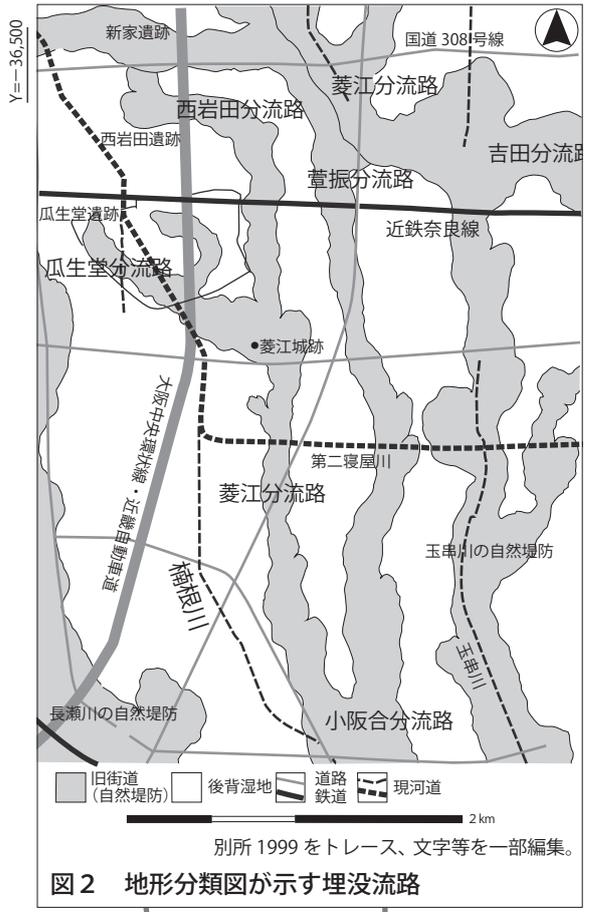
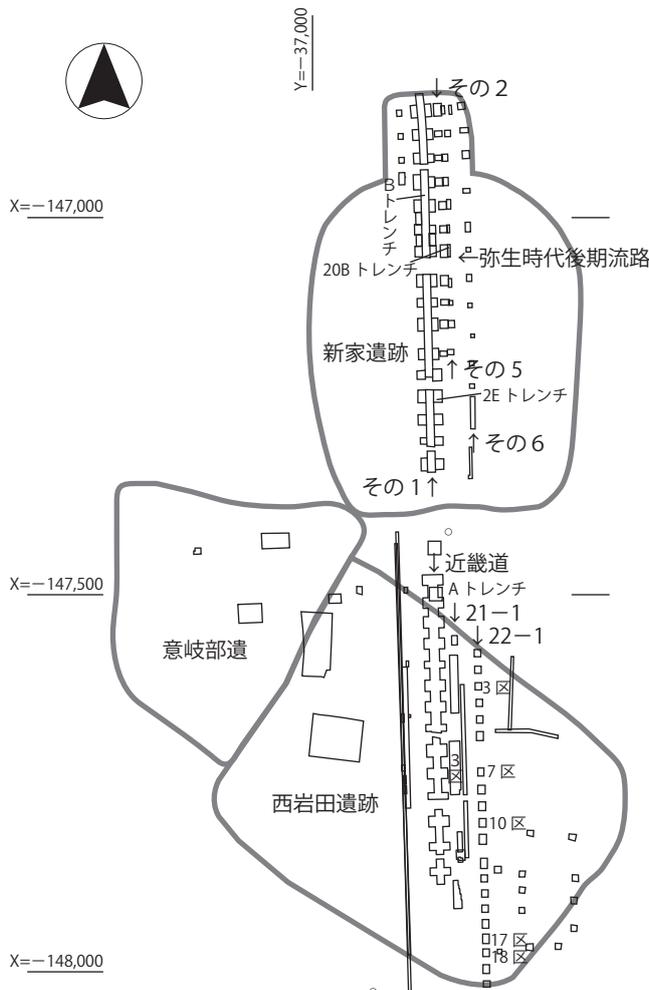
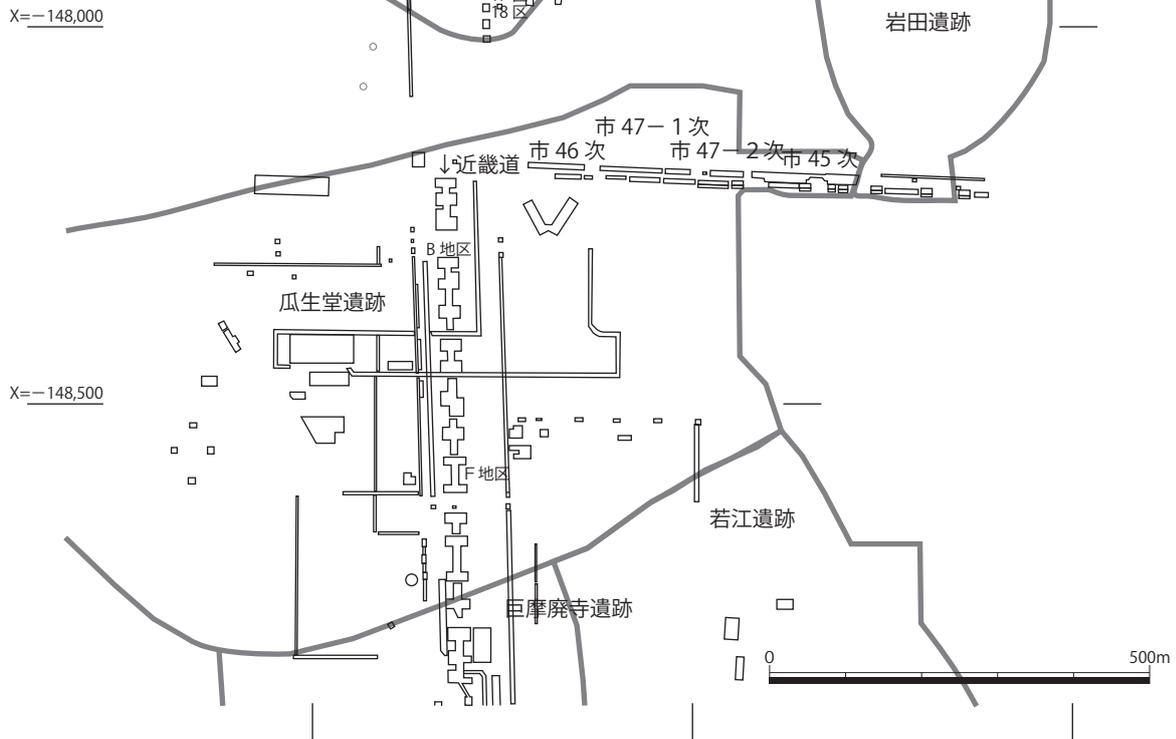


図2 地形分類図が示す埋没流路



言及したもののみ調査地名を表記した。  
 大阪府文化財センター 2024 図3と大阪府文化財センター 2012 第8図を合成して、新家遺跡のデータを追加、編集。

図1 新家遺跡・西岩田遺跡・瓜生堂遺跡の調査区

土砂の供給源となる付近を流れる流路の変遷についても明らかになってきている。別所秀高は、空中写真の判読などにより地形分類図を作成し、埋没流の痕跡である微高地のつらなりを発掘調査成果と合わせて時期を考えた（別所 1999）（図 2）。西岩田遺跡の中央に東西方向の大規模な流路を読み取り、旧大和川水系の西岩田分流路とする。これは南の小阪合分流路（松田 2000）の支流である若江分流路から若江城跡付近で瓜生堂分流路とに分岐したもので、弥生時代後期から古墳時代前期に形成されたと考えた。また、若江分流路－西岩田分流路の東方には南北方向の萱振分流路が存在するが、遅くとも奈良時代には存在していたとする。図 2 をみると西岩田分流路は瓜生堂席東部を南北方向に流れてすぐ大きく屈曲し、西岩田遺跡の中央を東から西に流れ、再び北に屈曲して新家遺跡の西方を流れている。

さらに近年、大庭重信を中心とした研究グループが広く河内平野南部の旧地形と流路の変遷を検討した（大庭編 2020）。そこでは小阪合分流路－若江分流路－西岩田分流路は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての旧大和川の主流路であると評価されている（まとめて小阪合分流路と呼称される）。また、萱振分流路は弥生時代後期前半の主流路と考えられた。

### 3. 遺跡・調査間の層序対比

西岩田遺跡・新家遺跡の層序について特徴的で広域に確認できる 2 枚の地層を鍵に対比した（表 1）。

【鍵層 1：弥生時代中期の泥炭層】ヨシなどの抽水植物が未分解のまま大量に遺存する強く暗色化した泥層である。泥炭層・ピート層などと呼ばれてきたもので、水没した湿地の環境を示す。安田の「沼沢の時代」の堆積層で、おおそ弥生時代中期のものである。層中には植物遺体をほとんど含まない薄層が複数介在する点でも類似するが、この薄層は増水時の懸濁流と考えられる（松田 1995）。

【鍵層 2：弥生時代終末期の「流水堆積砂層」】もう一つの鍵層が、中粒砂から小礫までを主体とし斜交層理が発達する粗粒な堆積物で、層厚が厚く 2 m 以上に及ぶ場所もある。西岩田分流路に由来する断続的で大規模な氾濫を示し、安田の「氾濫原の時代」の堆積層である。西岩田遺跡では、分流路が埋没して微高地となる。

新家遺跡は調査間でおおよそ層序の理解が一致しており<sup>2)</sup>、ここではその 2・5・6 調査での名称を用いる。ただし、第 V 層はその 5・6 調査（以下、調査は省略）のように粗粒部分のみだけとするものと、その 2 のように下部のラミナ構造の発達する漸移的な細粒部分も含める捉え方に分かれる。今回はその 2 の認識を取り、粗粒部分だけの第 V 層上部となる。

西岩田遺跡では最も厚い場所が最終的な流路の中心であり、近畿道建設に伴う調査（以下、近畿道などと省略）A トレンチ、21－1 調査 3 区、22－1 調査 7 区を通過していた。遺跡南部の近畿道 D トレンチには堆積は及ばない。新家遺跡では北部に分布し、西岩田分流路から供給されたものであるが、西岩田遺跡とは違い流路外の破堤堆積物であろう。

【鍵層間の漸移部分：弥生時代後期から終末期の粘土から細砂】特徴的な 2 層にはさまれた泥質から砂質へと少しずつ変化する層である。基本的にラミナ構造がみられ、植物遺体の薄層が顕著な自然堆積層である。微地形による環境の差異を反映しやすく、調査時の名称や分層の違いもあり、対比が困難な段階である。少しくわしく検討したい。

各調査では大きく 2 層に分層しているようだ。下部はシルト主体で植物を多く含み、上部はシルトから細砂へ急速に粗粒化が進み、「流水堆積砂層」に続く。

表1 遺跡間、調査間の層序対比

太文字は木製品がまとめて出土した層

西岩田遺跡			新家遺跡		特徴	およその時期
22-1 (モノレール支柱)	21-1 (モノレール車両基地)	近畿道	その2・5・6 (その7 <sup>4)</sup> での観察も加味)	その1		
第6層	第3a層	第VII a層	存在しない	存在しない	自然堆積層をベースとする包含層。	弥生時代終末期
		第VII b層				
		第VII c層				
第7層上部	第3b層?	青灰色粘土	第V層上部(シルト)	存在しない	微高地の低い所に堆積したシルト。	
第7層中部	第3b層	第VIII層	第V層上部	第VII層	小礫まで含む粗粒な厚い自然堆積層。	弥生時代終末期
第7層下部	第3b-2層	第VIII層下部	第V層下部	第VI-2層	シルトから細砂からなる自然堆積層。	弥生時代後期末から終末期
第8-1・2層		第IX a層	第VI層上部(第VIイ層)			
第9-1層?	第4a層灰色シルト	第IX b層	第VI層下部(第VIハ層)	第IV-1層	植物遺体の薄層を挟むシルト層で、細砂がみられる場所もある。	弥生時代後期前葉から後葉
第9-2層	第4a層	第X層	第VII層	第V層	未分解の植物遺体を多量に含む強く暗色する泥炭層。	弥生時代中期中葉から後葉
第10層	第4a層	第XI層	第VIII層	第IV層	下面が生痕の凹凸の激しい。	弥生時代前期から中期前葉

【鍵層2】

↑  
【漸移部分】  
↑

【鍵層1】

下部は西岩田近畿道第IX a層下部・IX b層、21-1 第4 a層灰色シルト、22-1 第9-1層が相当しよう。新家第VI層下部が対応する。新家遺跡ではこの段階の流路が検出され、この層位で唯一土器が出土しているので、次節で改めて細分の年代を考える。

上部は流路の影響が大きくなり堆積のスピードが速くなり始める。多数の木製品が出土するのはこの層中、とくに上位から上面である。西岩田22-1 第8-1層は細粒であるが、南部の17・18区で層中に細砂から細礫が存在し、流路の存在を示す。

【鍵層1の下層：弥生時代前期の泥層】鍵層の前後にも言及すると、やや暗色化が弱い泥層で、西岩田22-1 第10層などである。新家第VIII層が対応し、その1では上面で建物が検出され、層中からは前期から中期前葉の土器が出土する。

【鍵層2の上層：弥生時代終末期の包含層】粗粒砂の堆積が終了したのちに低い場所にシルトが堆積した。微高地形成後に低く湿地となった場所にたまったものである。この流水堆積層をベースとして西岩田遺跡では微高地上で人の活動が始まり溝などの遺構がある。西岩田近畿道 A トレンチ溝1は庄内式中段階の土器とともに木製品も出土し、威儀具が存在する。新家遺跡では対応する層は存在しない。

【瓜生堂遺跡との対比】南の瓜生堂遺跡は西岩田遺跡と比べて標高がやや高く、堆積の変遷は異なっている。簡単に対比すると、遺跡北部では弥生時代前期で集落が、中期で集落や方形周溝墓の墓域が存在したが、中期末の泥炭層で埋没している。西岩田22-1 第9-2層などの泥炭層上部に対応するのであろう。泥炭層の上に厚い流水堆積層が堆積するが、後期の段階である。ここを流れる流路が供給したもので、図2の瓜生堂分流路の一部をなすのであろう。この結果、続く西岩田分流路の影響を受けない高い場所となった(大阪文化財センター1980)。遺跡東部では市45次調査で北流する西岩田分流路が確認され、古墳時代中期頃まで存在した(別所1999)。

#### 4. 層序と木製品群の時期

西岩田遺跡・新家遺跡で多くの木製品がおおよそ同一と考えられる層位より広い領域から検出されるが、

この段階は土器の出土が少なく、木製品に明確に共伴すると判断された事例はほとんどなかった。これまでの調査では、上層から出土する土器などから弥生時代後期、弥生時代終末期（庄内式期）、また弥生時代後期から終末期と違いがあった。この段階の土器は一定量のまとまりがないと段階を特定することが困難で、担当者により考えの違いが出やすい。さらに、庄内式土器を弥生時代、もしくは古墳時代のどちらにするかの立場の違いもあり、年代的位置付けや年代幅がわかりにくかった。このため、前述の層位の対比を元に、木製品の出土層位と年代を整理する。

【木製品の放射性炭素年代】最初に、西岩田 22 - 1 での仮面が出土した木製品集中部の試料 3 点に対しての放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果をみておこう。その放射性炭素年代と暦年代に較正した年代範囲は、

1850 ± 20BP / 129 - 238 cal AD (95.45%)

1860 ± 20BP / 128 - 232 cal AD (95.45%)

1890 ± 20BP / 83 - 96 cal AD (4.84%) および 114 - 216 cal AD (90.61%)

であり、紀元後 1 世紀後半、2 世紀前半から 3 世紀前半となった。纏向遺跡のこれまでの測定結果（春成他 2011）と比較して、庄内 2 ないし 3 式から布留 0 式期に相当すると報告されている<sup>3)</sup>。今回、土器編年の基準とする森岡秀人・西村歩のものでは庄内式中段階に相当する（森岡・西村 2006）。

西岩田 21 - 1 調査 2 区でも対応する第 3 b - 2 層において包含される植物の放射性炭素年代測定（AMS 法）がおこなわれている。その放射性炭素年代と暦年代に較正した年代範囲は

1885 ± 20BP / 85 - 94 cal AD (2.56%) および 118 - 217 cal AD (92.89%)

で、紀元後 1 世紀後半から 3 世紀前半となり、22 - 1 調査の結果とほぼ一致している。

また、その直下の西岩田 21 - 1 第 4 a 層灰色シルトに包含される植物遺体の放射性炭素年代測定（AMS 法）がおこなわれている。その放射性炭素年代と暦年代に較正した年代範囲は

1875 ± 20BP / 122 - 225 cal AD (95.45%)

であり、上層と逆転する数値となるが大きな違いはない。同じく纏向遺跡の庄内 3 式期（庄内式中段階）に対応する。

【流水堆積砂層の土器】次に、年代の下限を示す上層の流水堆積砂層の出土土器をみる（図 3）。d は粗いタタキ調整かつ平底の甕で弥生時代後期末とされたが、庄内式土器の V 様式系と捉えることも可能であろう。吉備系の才の町 I 式（高橋 9 c 期、（高橋 1988））の鉢（c）は、庄内式古段階から中段階に位置づけられる。これまで指摘されてきたように吉備系の土器の比率が高い。22 - 1 の当該層では布留式の土器も少数であるが存在する。新家遺跡も同じ傾向にあるが、点数は少なく、摩滅した破片が多い。

【流水堆積砂層堆積後の土器】さらに、微高地が形成された後の段階に西岩田遺跡では遺構が検出される。近畿道調査 A トレンチ溝 1 は坏体部が外反する高坏（g）、小さな底部が残る甕（f）、口縁部がやや内傾する吉備系の甕（h）などの存在から庄内式中段階に位置づけられる。

【漸移部分の土器：西岩田遺跡】木製品が包含される細粒部分、また上限を示すその下層から出土した土器をみる。西岩田 22 - 1 では 10 区より南で、仮面が出土した第 7 層下部より下に位置づけられる第 8 層から多数の木製品が出土している。船材や直弧文と水銀朱で飾られた複雑な形状を示す威儀具の可能性が指摘されるものが含まれる構成は、上層と類似する。17・18 区の第 8 - 1 層中に粗粒の堆積物が確認された。西岩田分流路の古い流れの存在を示す。遺跡南部ではこの粗砂の堆積によって高まりが生じ、流れが北に移動した。第 8 - 1 層中からは庄内式土器が出土し、中段階のものだろう（b）。

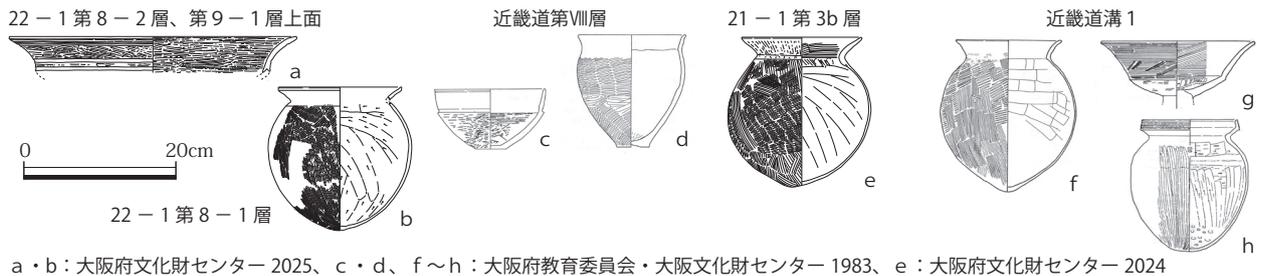


図3 西岩田遺跡出土土器

また、第8-2層下部もしくは第9-1層直上で二重口縁壺の口縁部が出土している（a）。弥生時代後期末、もしくは終末期の時期とされる。

報告書でも指摘されるように、西岩田22-1第8層から第7層の段階は流れの移動や埋没、さらには微高地の形成など大きな地形の変化が短い時間幅で生じた。こうした状況の中、木製品の「投棄」は断続的におこなわれていたことになる。14区などで8層中において打ち込まれた杭や足跡が検出されておりこの場所での人の活動が確認される。

【漸移部分の土器：新家遺跡】新家遺跡中央部では東西方向の流路が第VI層（その1でも同名称である）段階に存在した。周囲から遺存状態の良い弥生時代後期の土器が出土し、木製品の時期を考える際にも重要である。その変遷と土器の対応をみる。

流路は北岸のみの検出となるが、幅は20m前後であろう（図4b）。周囲にシルト、砂を供給して自然堤防を形成しながら、粗粒の堆積物で埋没する。主流路につながる流れと考えられる。北岸から流路に近接して土器が出土するが、遺存状態がよく、土器が等間隔に人為的に置かれたような状況もあることから祭祀に伴う可能性も指摘される（大阪府文化財調査研究センター1995）。流路内からは足跡も検出される。

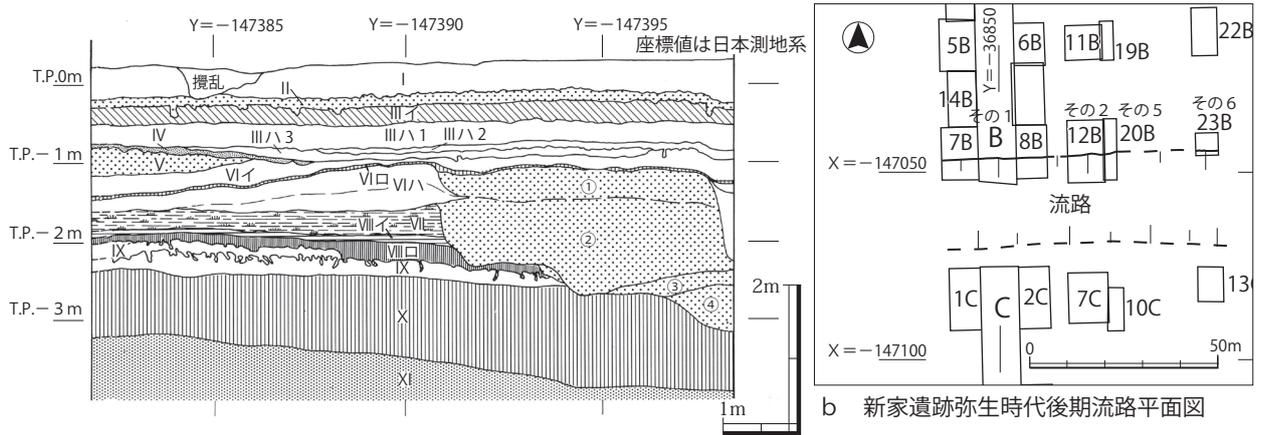
新家その2・5・6は第VI層を上下2層に細分している。下部はその2第VI・B層、その5第VIハ層で、流路が存在した段階に堆積したものである。上部はその2第VI・A層、その5第VIイ層で、流路が埋没した後に形成されたものである。その5ではその間の第VIロ層は未分解の枝や葉が特に密集する特徴的なもので、これまで「植物層」とされる（図4a）。「植物層」は新家第VI層下半で広く確認される。

第VI層下部出土の土器は（図4）、後期前葉のものがあり（c・d）、大部分は中葉から後葉に位置づけられる（e～l）。流路は弥生時代後期後葉に埋没した。第VI層上部からは木製品が多く出土する。土器は少数しか出土しないが、その2ではタタキ調整の甕で、後期末から終末期のV様式系のものがある（m）。

一方で、新家その1では同じ流路が隣接して検出されているが、分層の基準が異なっている。下部の第VI-1層（灰色粘土層）と上部の第VI-2層（灰緑色シルト層）に分けられるが、流路の断面図をみると第IV-2層段階にも流路は存在している。そして、第VI-1層やその上面からは多数の木製品が出土し、船形木製品・琴・威儀具・多数の槽などの特殊なものが含まれる。一方、第VI-2層からは土器が出土し（f～k）、弥生時代後期後葉に位置づけられる。

つまり、新家その1では木製品が多数出土するのは第VI層下部で、上部の出土土器が弥生時代後期後葉であることから、それ以前の年代となる。その2・5・6と比較すると木製品の年代はより古く位置づけられる。木製品の構成は他の調査の新しい段階のものと類似している。

隣り合うトレンチにもかかわらず、土器と木製品との上下関係が逆となっていることは気にかかる。その2では第VI層が明確に細分できるのは流路付近のみとされるが、その1で灰白色粘土上面から木製品が



- 第V層：灰オリーブ色 粗砂  
第VIイ層：暗青灰色 シルト混じり粘土  
第VIロ層：黒褐色 シルト「植物層」  
第VIハ層：暗青灰色 粘土  
①：灰オリーブ色 細砂混じり粗砂 流路堆積層  
②：灰オリーブ色 粗砂 流路堆積層
- ③：暗灰色 粘土 流路堆積層  
④：暗灰オリーブ色 粗砂 流路堆積層
- 第VII層：黒色 シルト 植物層  
第VIII層：オリーブ黒色 シルト 植物層  
第VIIIロ層：黒色 粘土  
(土層の記載は関連するものに限る)

a・l：大阪文化財センター1993一部編集、b：塚本作成、c・d：大阪府文化財調査研究センター1995、e～g、m：大阪文化財センター1984、h～l：大阪文化財センター1987

a 新家遺跡弥生時代後期流路断面図(その5、20B トレンチ)

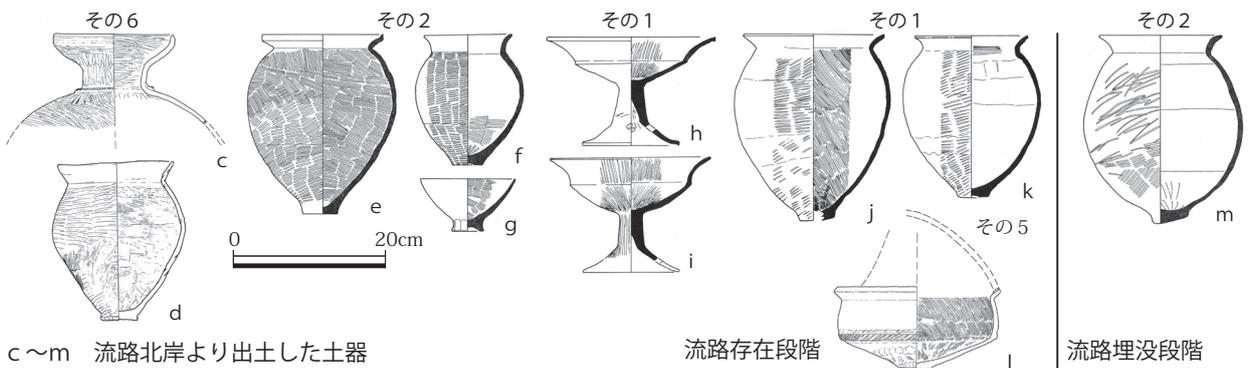


図4 新家遺跡弥生時代後期流路と出土土器

まとめて出土した2E トレンチは流路からやや離れた場所にある。その1で土器が出土した第VI-2層は部分的にしか分布しないと報告される。筆者が担当した新家その7では<sup>4)</sup>、第V層下部から第VI層上部で多数の木製品が出土したが、その第VI層下部からも一定数の木製品が存在したという知見を交えると、両層のものが混在しているのではないかと予想することもできる。ただし、その1の報告では大部分の木製品の出土場所が記されておらず層位の検証ができないのは残念である。

## 5. 木製品群と弥生時代終末期の様相

西岩田遺跡・新家遺跡ではその環境から木製品の遺存状態がよく、弥生時代前期から木製品が検出されている(新家その2では縄文時代晩期のものも存在する)。ここで問題としている弥生時代後期末から終末期(庄内式中段階)の木製品群は、一般的にみられる農具・杭・建築材だけでなく、船形木製品などの祭祀具、槽作りの琴、威儀具と考えられる柄、大型の槽、蓋がある容器、朱彩された精製木製品、類例のない用途不明品など特殊なものを含まれ、その比率が高い。仮面もまさに特殊品に該当する。

今回の検討をまとめると、西岩田遺跡・新家遺跡の木製品は細粒の堆積物中より出土しており、水流の

影響は受けているものの、遠方から洪水の流れにのり一気に流され、広がって埋没したものではないと判断できよう。出土層位と時期は、弥生時代後期後葉の新家その1灰白色シルト出土のまとまり、庄内式土器中段階の西岩田22-1第8-1層のまとまり、そして庄内式中段階の西岩田22-1第7層下部など両遺跡の資料の大部分がふくまれる流水堆積層直下のまとまりがあり、さらに微高地上の中段階溝などからも出土数は少ないが木製品が出土し、威儀具と考えられる特異なものが存在する。木製品群の出土層位は3段階、洪水砂堆積後のものも入れると4段階に分かれる。そのうち3層は庄内式中段階で時期的に近接している。流路の移動や地形の変化が短期間で連続する不安定な環境にもかかわらず、近隣での木製品の製作、使用と投棄が続いたことになる。

木製品の由来はどこにあるのだろうか。流れの上流にある瓜生堂遺跡がまず候補となる。流路を通じた重要な物流ルート上にあるが、これまでの調査で検出された弥生時代後期後葉から弥生時代終末期の遺構や遺物は必ずしも多いとはいえない。西岩田遺跡に近い遺跡北部の近畿道B地区では、庄内式中段階から新段階の溝や土器溜があり、木製品群の年代と合う。F地区以南では水田が検出されており、近くに集落の存在が推測されている。

また、遺跡東部の東大阪市教育委員会による第46、47-1、47-2次調査では、弥生時代終末期の配石遺構が確認され、祭祀に伴うものと考えられている（東大阪市教育委員会2002）。この場所は弥生時代中期の地震による地滑りの跡を祭場として、中期末から終末期にかけて断続的に地震を鎮める祭祀がおこなわれたとされる。配石には武庫川や紀の川といった遠方の石が使用され、火が用いられた。中期末や後期初頭の古い段階であるが、武器形木製品や朱塗りの盾が使用されている。木製品群がもつ祭祀的な側面と河内湖南岸域、また西岩田分流路の祭場としての性格についても考える必要があろう。

さらに、西岩田遺跡・新家遺跡の東方にある萱振分流路が埋没して生じた微高地上など、いまだ知られていない居住域の可能性も考慮に入れておきたい。

## 6. さいごに

紙幅の制限があり、バラエティーに富む木製品群自体の検討はできなかった。この考察は稿を改めたい。

2023年4月に弥生博から大阪府文化財センターに異動した筆者は、10月より新家遺跡の調査を担当した。現地調査では、西岩田遺跡22-1調査の担当者の一人、後藤信義氏と、両遺跡で出土する木製品群の性格について繰り返し議論することとなった。後藤氏は、渾身の力をふり絞って『西岩田遺跡2』の報告書を刊行されたのち、2026年1月に永眠された。議論は平行線をたどっていたが、この小文を後藤氏への（一旦の）回答とする。ややマイクロな内容となったこと、急遽のテーマ変更のため提出が大幅に遅れたことを弥生博の皆様にお詫びしたい。

小文をなすにあたっては後藤氏のほか、西岩田遺跡の調査を担当した大阪府文化財センターの川瀬貴子氏、河本純一氏、尾崎愛氏から、土器編年について市村慎太郎氏からご教示を受けた。末筆ながら記して感謝いたします。誤りがあるとすれば、筆者の責任である。

### 【註】

- (1) 筆者は新家遺跡北部における23-1調査を担当しており、今回の層序対比には現地での観察がベースの一つとしてある。
- (2) 新家その1の層序理解はその2・5・6とおおよそ共通するが、下層から番号を付けるために呼称が異なっている。

ここではその2・4・6の名称を代表させる。

(3) 数値だけの比較であれば、纏向遺跡の布留0式期に対応する結果は出ておらず、年代幅に含める必要はないのではないか。

(4) 報告書は2026年に刊行予定である。

#### 【引用文献】

- 石野博信 2005「3世紀の「都市」纏向」石野博信編『大和・纏向遺跡』学生社
- 上原真人編 1993『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所
- 大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1983『西岩田』
- 大阪府文化財センター 2012『瓜生堂遺跡4 岩田遺跡2 花屋敷遺跡3』
- 大阪府文化財センター 2024『西岩田遺跡』
- 大阪府文化財センター 2025『西岩田遺跡2』
- 大阪府文化財調査研究センター 1995『新家遺跡 第6次発掘調査報告書』
- 大阪文化財センター 1980『瓜生堂』
- 大阪文化財センター 1984『新家(その2)・(その3)』
- 大阪文化財センター 1987『新家(その1)』
- 大阪文化財センター 1993『新家(その5)』
- 大庭重信編 2020『先史・古代の河内平野南部地域の古地理復元を通じたジオアーケオロジーの実践研究』大阪市文化財協会
- 梶山彦太郎・市原 実 1972「大阪平野の発達史－14C年代データからみた－」『地理学評論』第7号
- 梶山彦太郎・市原 実 1986『大阪平野のおいたち』青木書店
- 河本純一 2025「木製仮面」『西岩田遺跡2』大阪府文化財センター
- 高橋 護 1988「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究紀要』9
- 趙 哲済・松田順一郎 2003「河内平野の古地理図」『大阪100万年の自然と人のくらし 普及講演会資料集』日本第四紀学会
- 寺沢 薫 2011『王権と都市の形成史論』吉川弘文館
- 寺沢 薫 2022「それは「方相氏」か－纏向「木面」評価の前提－」『纏向学研究』第10号、桜井市纏向学研究センター
- 寺沢 薫 2023『卑弥呼とヤマト王権』(中公選書134)中央公論新社
- 春成秀爾・小林謙一・坂本 稔・今村岑雄・尾寄大真・藤尾慎一郎・西本豊弘 2011「古墳出現期の炭素14年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集
- 東大阪市教育委員会 2002『瓜生堂遺跡第46、47－1・2次発掘調査報告書』
- 福辻 淳 2013「纏向遺跡の木製仮面と土坑出土資料について」『纏向学研究』第1号、桜井市纏向学研究センター
- 別所秀高 1999「瓜生堂遺跡第45次調査地点でみられた堆積環境変遷過程と人間活動の履歴」『瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』東大阪市文化財協会
- 松田順一郎 1995「新家遺跡発掘調査地(その6)における泥質堆積物の地震による変形構造」『新家遺跡 第6次発掘調査報告書』大阪府文化財調査研究センター
- 松田順一郎 2000『八尾市小坂合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積作用と地形発達』『小阪合遺跡』大阪府文化財センター
- 森岡秀人・西村 歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として－」森岡秀人・西村 歩編『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター
- 安田善憲 1978「大阪府河内平野における過去一万三千年間の植生変遷と古地理」『第四紀研究』16－4、日本第四紀学会
- 安田善憲 1980a「瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析II」『瓜生堂』大阪文化財センター
- 安田善憲 1980b『環境考古学事始 日本列島2万年』(NKH ブックス365)日本放送出版会
- 山崎孝盛 2022「古墳時代粗糖の水辺祭祀－纏向遺跡の祭祀土坑・纏向型祭祀を題材として－」『纏向学研究』第10号、桜井市纏向学研究センター

# 台形土器と弥生土器の製作技術

—岸和田市下池田遺跡出土資料の検討から—

三好 玄

## はじめに

大阪府立弥生文化博物館令和6年度夏季特別展「土器研究の可能性—新たな分析と弥生社会—」において筆者は、考古学のもっとも基本的な研究対象の一つである土器にかんする多様なアプローチを概観したうえで、生駒山西麓産土器の生産と流通にかかる検討を通じて弥生社会の特質に迫ることを試みた（三好編2024）。

この展示の中で、土器の製作技術にかかわる資料として大阪府岸和田市下池田遺跡出土弥生土器の台形土器（以下、本資料という）をとりあげた。本資料については、石部正志が岸和田市史において数量や形態的特徴について述べており（石部1979）、一部の研究者の間では存在が知られていたものの、具体的な報告はなされておらず、その実態はながらく不明であった。

以下においてその概要を紹介するとともに、台形土器の用途・用法について考えることとしたい。

## 1. 下池田遺跡出土台形土器

### （1）資料の概要

**既往の報告と評価** 本資料は、1976～77年に開発事業に先立ち岸和田市教育委員会によって行われた発掘調査において出土したものである<sup>(1)</sup>。前述のとおり岸和田市史における下池田遺跡についての記述によって、その概要と石部の評価を知ることができる。やや長くなるが市史の記述を引用しておこう（石部1979）。

中期の土器のうち、もっとも特徴的なのは、写真67のような台形土器が、すべて破片の状態であるが約100個体分も出土していることである。森岡秀人は、この種の土器は、中期後半のものが多く、畿内でもむしろ北摂地方など北半部に多い傾向があること、しかし、1遺跡からはせいぜい1、2点しか出土しないなどの傾向があることを指摘している。また、径約25センチ内外の円板状の台部の縁辺より少し内側に寄って使用による擦痕が認められることなどから、円板部を上にして用いた土器製作台ではないかと考察している。下池田での多量な出土は、この種土器に対する見解を大きく変えなければならないことになった。従来からも、奈良県橿原市新沢I遺跡から数点出土しており、畿内南半に乏しいという見解は成立しがたかったが、それに加えて、一つの遺跡からは多くは出ないという見解を否定する結果になった。田代克己の教示によると、池田市宮の前遺跡から発見された中期末の完形品は、次のような特徴があったという。円板状の部分を台部でなく底部としてみた場合、口縁部の内側は少しふくらみを持ち、外面には口縁直下に2条の凹線文がめぐらされている。鉢部の器壁は薄く、円板状の底部は厚い。これらの点から、鉢部を台脚と見たてる見解はなりたち難いものだという。台脚とみてよい土器は東大阪市の鬼虎川遺跡からも出土している。同じく中期末のものであるが、これは、脚部が部厚く、平坦な上面は、外周に張り出しをもたないものであり、かつ、肩部付近に、下方

を円弧とする半月形の孔があいているという。下池田の出土品は、宮の前から出土しているタイプと同類とみられるもので、この特殊な土器の謎を一層深める結果になったが、下池田の多数の土器をくわしく検討すれば、この器種の特殊な用途を解明する手がかりがえられるかもしれず、これも楽しみの一つである。

## (2) 資料の観察

**資料の構成** 本資料については洗浄の上、破片ごとに整理ナンバーが注記されている。本格的な接合の検討はなされていないものと思われるが、大量の土器片の中から台形土器と考えられたものが選別され、5つのコンテナに収められている。その総数は74点で、台部片71点、脚部片3点からなる。またいずれも破損して細片化しており、完形品は含まれない(写真1)。

**分類** 本資料を構成する個体の形態は多様であるが、脚部と台部の関係性からA～Cの3類型に大別しておきたい。A類は裾の広がった円筒形の脚部の上端からそのまま台部へと移行するもの、B類は同様の脚部の上端付近を外反させて台部へと移行するもの、C類は脚部の上端に径の大きな円形の粘土板を取り付けて台部としたものである。AおよびB類は脚上端部径がすなわち台部径となるのに対し、C類は前者より後者の方が大きいという違いがある。また、A類の製作は、通常の壺や甕の底部から体部下半と同様に円盤形の台部(壺・甕なら底部)から外に開く形で粘土紐を積み上げていくのに対し、B類の脚部は内湾した後に強く外反する点が異なっている。個体数の内訳はA類23点、B類21点、C類17点、不明13点である。

各個体の胎土は、いずれも石英、長石などの白色砂粒やチャート片などを含むものであるが、色調により大きく2分できる。橙褐色から淡褐色を中心とするものをi類、灰白色から淡褐色を中心とするものをii類と呼んでおこう。

**資料の観察** 上記の類型ごとに特徴が分かりやすい個体の実測図を作成した(図1)。以下では、これに基づいて、各類型の特徴について述べておきたい。



写真1 下池田遺跡出土台形土器集合

に基づいて、各類型の特徴について述べておきたい。

A類には図1-1～4が該当する。脚部の上端が平坦な台部の端となる。相対的に器壁が薄いものが多い。内面には丁寧なナデを施し、外面はミガキで仕上げるものとケズリを留めるものがある。色調はii類にあたるものが多い。

B類には、図1-5～7が該当する。脚部の上端が強く外反して台部に移行する。やや器壁の薄い個体も含まれる。いずれも内面はナデ調整で、外面はミガキで仕上げるものとハケが認められるものがある。色調はi類にあたるものが多い。

C類には、図1-9～13が該当する。脚部が円錐形に立ち上がり、すぼまったその頂部の上に円形の粘土板が取り付けられ

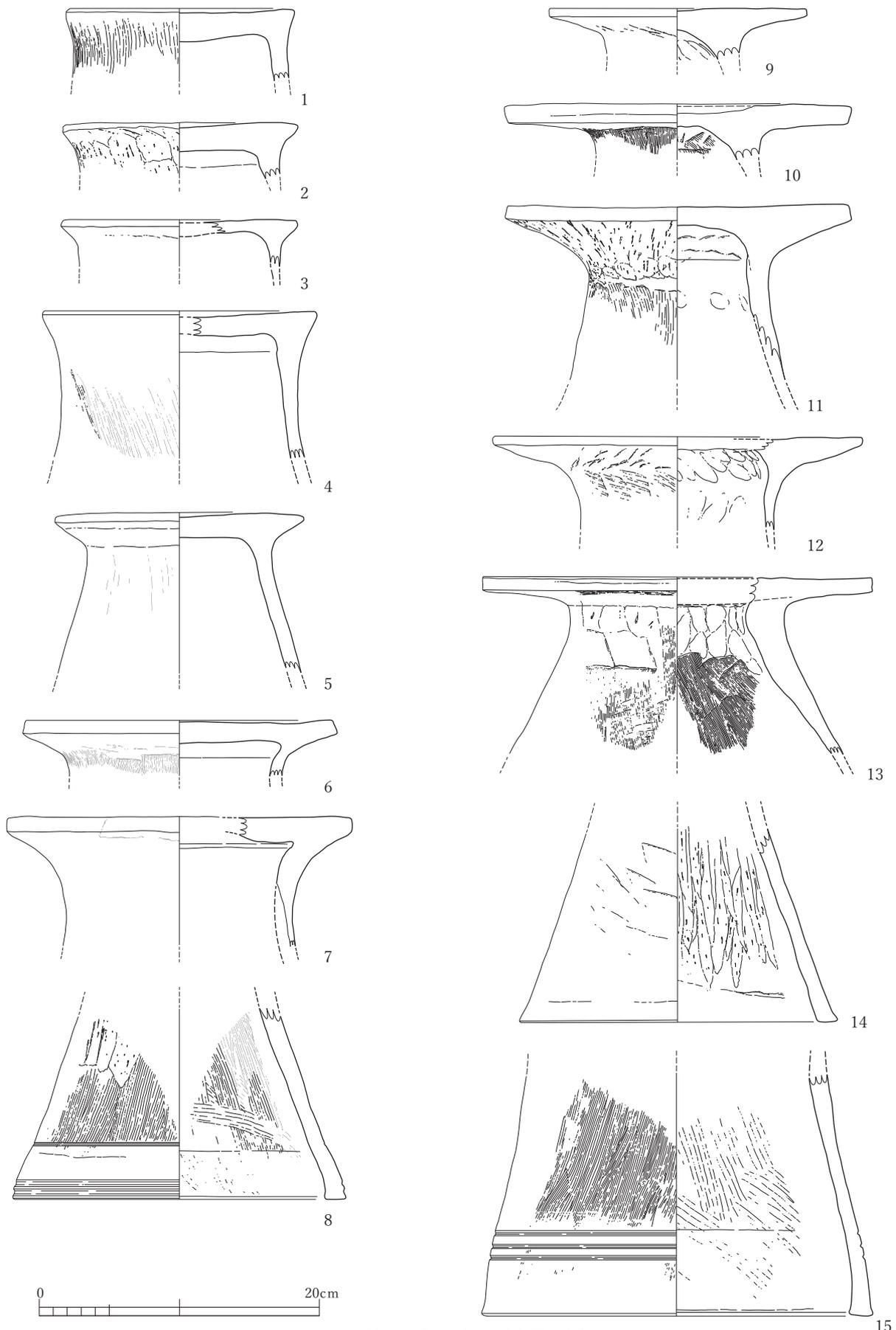


图1 下池田遺跡出土土台形土器実測図

ている。相対的に器壁の厚いものが多い。内面調整にはナデに加えてハケも多く認められ、また脚部と台部の接合部を中心に指頭圧痕が著しい個体もある。色調はi類にあたるものが多い。

A～C類に分類できない脚部のみの個体については図1-8・14・15を図化した。脚端部がわずかに内湾し、3～4条の凹線をもつものと、脚端部が内湾せず、凹線をもたないものがある。外面調整として、ハケ、イタナデおよびハケの上に施されたケズリが認められる。内面はハケで仕上げたものとケズリを加えたものがある。台部径を確認すると、A類は17cmと20cmの2つのピークをもち、相対的に小型であるのに対し、B・C類は26cm台をピークとする(図2)。

**小 結** 以上の内容をふまえて、改めて本資料について注目すべき点を次のように整理しておこう。

- ・通常少数しか出土しない台形土器が70点以上まとまって出土した稀有な事例である
- ・台形土器自体に凹線文をもつものがあり、弥生時代中期後葉に属するものと考えられる
- ・接合検討がどの程度なされたかは不明だが、いずれも破片で完形品は含まれない
- ・台部を中心とした形態に基づいて3つの類型に区分でき、かつ、この区分がサイズおよび色調と相關する可能性がある
- ・台形土器の機能・用法については、研究史上、意見の相違があり、本資料はその解明にむけた検討において重要な位置を占めるものと思われる

次節では、本資料と他の遺跡出土例の比較を行い、台形土器の性格について検討を加えたい。

## 2. 考 察

### (1) 研究史

**台形土器の認識と用途の諸説** 台形土器について最初にまとまった報告がなされたのは1928年刊行の奈良県新沢一遺跡の発掘調査報告においてであった(奈良県1928)。この時点では、器台の一種と認識されていたが、1972年の大阪府勝部遺跡の報告において佐原眞の教示に基づき、これを回転台形土器とする報告がなされた(荻田・島田1972)。佐原の認識は、自身が進めてきた弥生土器の施文にかかる分析を背景としたものであったと考えられる。

一方、その翌年に公表された工楽善通による研究動向のレビューの中では、大阪府宮の前遺跡出土例に基づき、これを鉢の底部とみるべきという見解が紹介され、佐原もこの考えに賛同していると述べられた(工楽1973)。

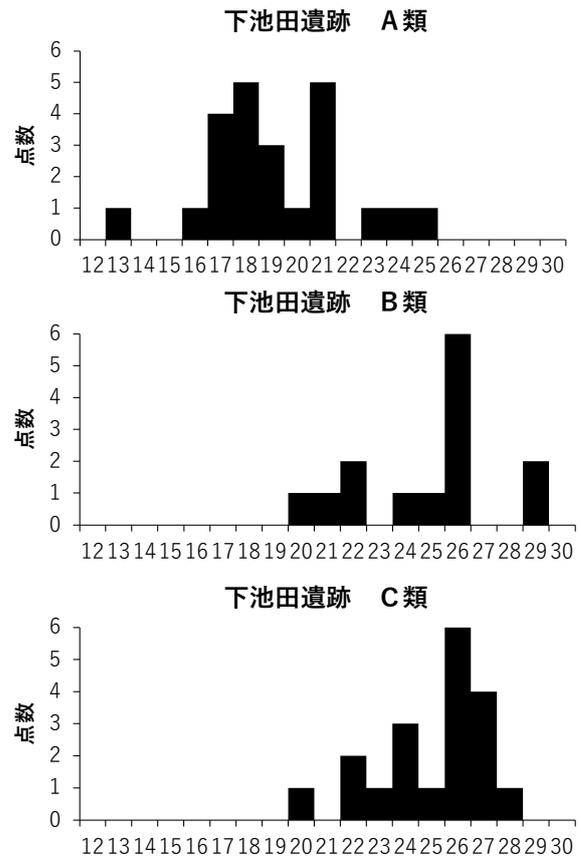


図2 下池田遺跡出土台形土器の台部径 (横軸 = cm)

これに対し、兵庫県会下山遺跡出土土器についての分析の中で類例の集成および用途の検討を行った森岡秀人が異を唱えた（森岡 1973）。森岡は、台形土器の特徴を次のとおりまとめている。

- 1) 破片で出土することが多く、完形品がきわめて少ない
- 2) 内面の調整が粗い
- 3) 台部は直径 20～25cm 程度のものがほとんどで、周辺部に同心円状の擦痕が認められる
- 4) 共伴土器はほぼ畿内第Ⅲ・Ⅳ様式とその併行期に属する
- 5) 一遺跡から大量に見出されることはなく、各遺跡に少数伴う

これらのことから、台形土器は鉢ではなく台部を上にして用いられたものであること、そして内面に軸受のような痕跡が認められないことから回転台とも考えられないことを指摘したうえで、台部の使用痕に着目してこれらを土器製作時に用いられた作業台とする解釈を示した。

これに続く作業台説として、秋枝芳および森下大輔が改めて未報告資料を含めた類例集成のうえで行った考察がある。秋枝らは基本的に森岡の見解を支持しつつ、木製回転台の存在を想定し、土器製作の中心的作業にこれが用いられた一方、それを補うものとして台形土器が用いられたのではないかと考えた。具体的には、単位文様の施文のような不連続で小刻みな回転運動を行うための作業台が台形土器であり、木製回転台とセットで用いられた、という解釈である（秋枝・森下 1977）。

一方、先にみた岸和田市史における石部による台形土器の評価はこれらの後に公表されたものであるが、工楽と同様に台形土器を鉢とみなす立場によるものであり、これらの見解は大阪府宮の前遺跡出土例にかんする田代克己の理解を背景としたものであったと考えられる（石部 1979）。

**土器製作台説の展開** 1980年代以降、台形土器にかんする議論は下火となっていったが、各地の顕著な出土事例の報告や土器編年において言及されたものがある。

用途にかんする意見として、伊藤実は台形土器を木製回転台の上に搭載して一体となって回転台を構成するものではないかと考えた（伊藤 1984）。

一方、複数の台形土器が出土した大阪府下田遺跡の発掘調査報告に際して使用法にかんする考察を行った浅岡俊夫は、基本的に森岡、秋枝・森下らの作業台とする理解を首肯しつつ、中・近世の常滑焼を参考にして大型土器製作時の土器成形台としてこれが用いられた可能性を示唆した（浅岡 1998）。常滑焼の甕は大型のため、台上に固定した土器の周りを人間が回る「ヨリコづくり」という製作技法が伝えられているという。そこで用いられる「ツクリダイ」とよばれる道具の形態およびサイズが台形土器に類似することから、弥生土器製作においてもいわゆる「人間ロクロ」（後述）が行われ、台形土器がこれに用いられたのではないかと考えた。さらに稲垣は、中国地方の類例の集成を行うとともに、本遺跡出土例が装飾性の高い塩町式土器の製作に関連する可能性に言及している（稲垣 2004）。

**出土状況からの検討** 他方、出土状況から用途にかんする有力な手がかりが得られた事例として、広島県和田原E地点遺跡の調査成果が重要である。同遺跡では焼失した竪穴住居跡SB5の床面に据えられた状態で完形の台形土器が出土した（図3）。報告者の稲垣寿彦は、この個体の台部上面に擦痕および粘土の付着がみられ、また周囲には粘土塊や粘土層の広がりが認められたことから、土器作りの過程で用いられたものと考えた。さらに稲垣は、中国地方の類例の集成を行うとともに、本遺跡出土例が装飾性の高い塩町式土器の製作に関連する可能性に言及している（稲垣 2004）。

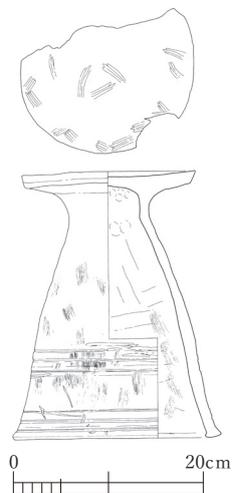


図3 和田原E地点遺跡出土台形土器

**課題と展望** 以上みてきたとおり、台形土器については70年代に用途の解釈を中心に議論が交わされたものの、80年代以降は散発的な言及がなされるに留まり、注目すべき分析対象とみなされていないのが現状である。この状況は、依然として

- 1) 出土数が少ないこと
- 2) 用途・用法が明らかでないこと

を主な要因とするものと考えられる。

1) については、各地の発掘調査の進展により、少しずつ出土例が増えてはいるものの、森岡1973で指摘された、各遺跡に少数伴うことが一般的である、という状況に変化はない。凹線文土器との関連性が強いという特徴にも変更は認められないが、土器の出土総量に占める台形土器の割合は非常に小さく、イレギュラーな存在として扱われることが多い。

そして、各地で事例が増加したとしても、依然として2) 用途・用法が不明瞭であるため、議論の対象となることは少ない。和田原E地点遺跡での出土状況に明瞭に示されるように土器製作に関連する可能性が高いと思われる一方、土器をみても木製品をみても、回転台の存在は認め難い。このため、作業台説の蓋然性が高いということになるが、回転しない台と弥生土器の製作をどう結びつけて理解すればよいかは判然としないというわけである。

そこで注目したいのが、近年指摘されている土器製作における「人間ロクロ」使用の可能性である。台形土器と「人間ロクロ」の関連性については、以前から浅岡1998において指摘されていたところであるが、近年、平川ひろみ・中園聡らによって、回転台と人間ロクロを比較した土器の製作の調査と実験が行われている。その結果、双方の手段によって見分けがつかないレベルの製品が仕上がったことが報告され、回転台の存在自体に対する疑問が呈されている（平川2015、平川・中園2016）。

この点と浅岡によって紹介された民俗例の内容をふまえ、以下では台形土器を大型土器の製作時に用いる製作台と仮定して論を進めることとしたい。

## (2) 台形土器の用途にかんする予察

本稿で台形土器の用途について本格的な議論を行う紙幅はなく、その準備も整っていないが、以下で予察的に検討を加えることとする。

**地域性** 台形土器は、西は山口県から東は愛知県まで、広範な分布を示す。筆者の集成作業はまだ途上であるが、現状では大まかな地域性として、1) 中四国地方ではA類の占める割合が高いのに対し、2) 近畿地方、特にその南部ではC類の分布が目立つ、ということが言えそうである。

傾向の確実な判断のためには、帰属時期等の詳細な検討を加える必要があるものの、1) の顕著な例として香川県旧練兵場遺跡出土例をみておきたい（香川県教育委員会ほか2009等）。この遺跡では、広大な範囲を対象とした発掘調査によって、計20点の台形土器が出土している（図4）。その内訳は、A類12点（不明を除いた総数19点のうち63.2%）、B類5点（同26.3%）、C類2点（同10.5%）であり、台部径を類型別に示したものが図5である。帰属時期は、中期後半のものが大半であるが、確実に後期前半に属すると考えられるA類もあり、一貫してA類が主体を占めたものと思われる。

これに対し、もう一方の2) の最も顕著な事例が先にみた下池田遺跡出土の本資料である。台形土器計74点の内訳はA類23点（不明を除いた総数61点のうち37.7%）、B類21点（同34.4%）、C類17点（27.9%）であり、それぞれの台部径は図2に示したとおりである。

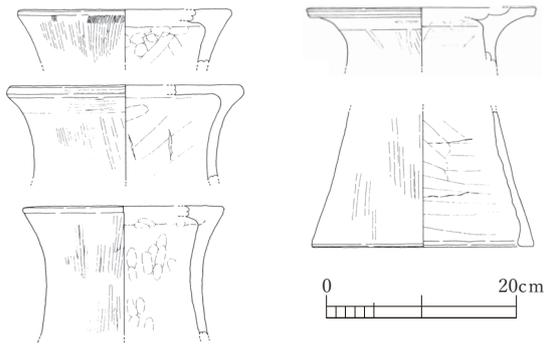


図4 旧練兵場遺跡出土台形土器

**サイズの違い** 甚だ概略的ではあるが、以上により1)、2)の傾向が確認できるであろう。そして、先にみた本資料の様相をふまえれば、このような種類の割合は両地域の台形土器のサイズと関連する可能性があるとも考えられる。旧練兵場遺跡では、他地域のA類に通有のサイズの小さいものだけでなく、大型のものがある点が特徴的であり<sup>(2)</sup>、単純な議論はできないが、ひとまずこの種類の偏りに注目し、その背景について考えを進めてみよう。

**台形土器の用法の想定** 先述の通り、台形土器を大型土器製作に際して用いる作業台と仮定した場合、製作する土器としては、常滑焼の大甕のように容量および土器自体の重量が大きい器種が想定される場所である。具体的には弥生時代中期後葉であれば、壺や一部の甕のような貯蔵具が候補となるが、これらの器種の底部は小さくすぼまっており、かなり大型のものであってもA～C類のいずれを用いても大きな支障なく製作することができるものと思われる。

これに対して、脚付の供膳具の中には底部径の大きなものがある。高杯や台付鉢、あるいは器台がこれにあたり、脚部上に作りつけた杯・鉢・受け部の成形・調整のためには大きな脚部や基底を安定した状態に据えて作業する必要があるものと考えられる。そして、それらの作業にあたり、「人間口クロ」すなわち人間が土器の周囲を回りつつ手を加える技法を用いるため、台形土器によってこれに適した高さに粘土を維持したと考えてみてはどうだろうか。

**底部径の比較** このような想定 of 当否を確かめるための手段として、ここでは土器の底部径と台形土器の大きさの関連性の有無を検討してみたい。具体的に先述の1)については多数の土器が出土した讃岐地域の『旧練兵場遺跡II』(香川県教育委員会ほか2011)掲載の中期後葉の土器、2)の近畿南部については、下池田遺跡出土土器の様相が不明であるため、比較的近隣で複数の台形土器が出土した大阪府長原遺跡の『長原遺跡発掘調査報告書XII』(大阪市文化財協会2005)掲載資料を対象として、土器の底部径を比較することとした。その際、先にのべた理由により、高杯・台付鉢及び器台を対象として、底径を実測図上から読み取ることとした。

讃岐地域では、既往の編年研究(信里2004・2005、渡邊2013)において指摘されているとおり、中期後葉には器台が存在しない(図6)。このため、旧練兵場遺跡については高杯・台付鉢の底部径のみを整

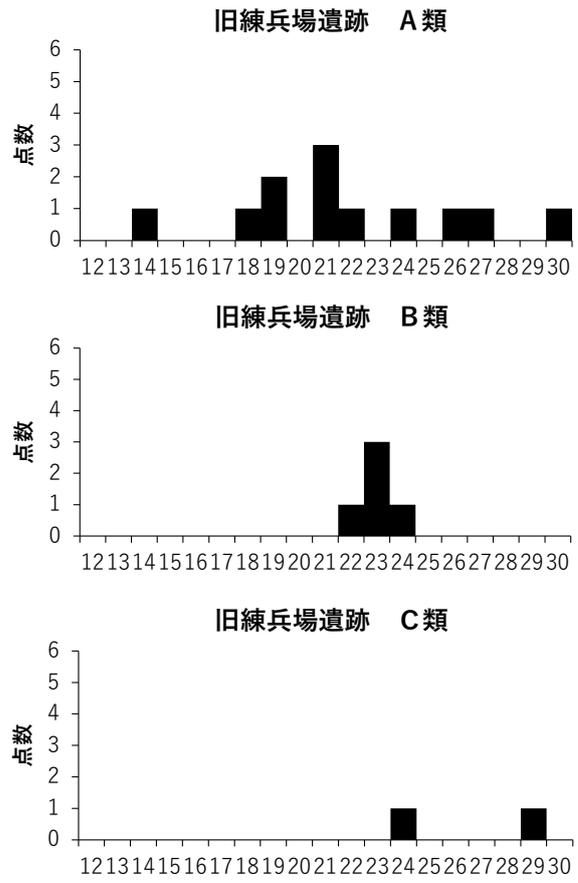


図5 旧練兵場遺跡出土台形土器の底部径(横軸=cm)

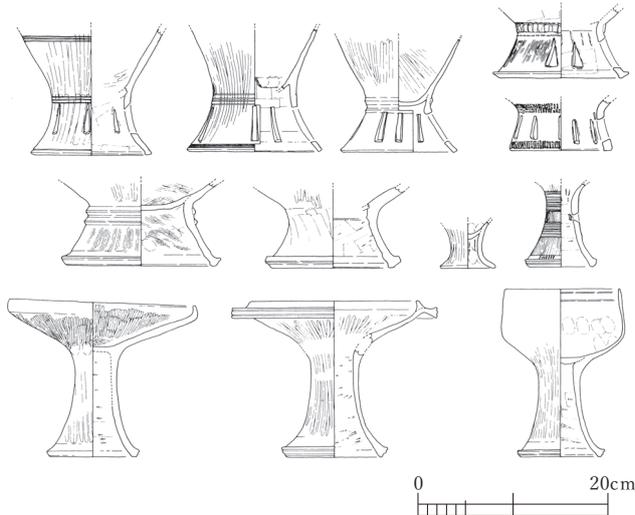


図6 旧練兵場遺跡出土高杯・台付鉢

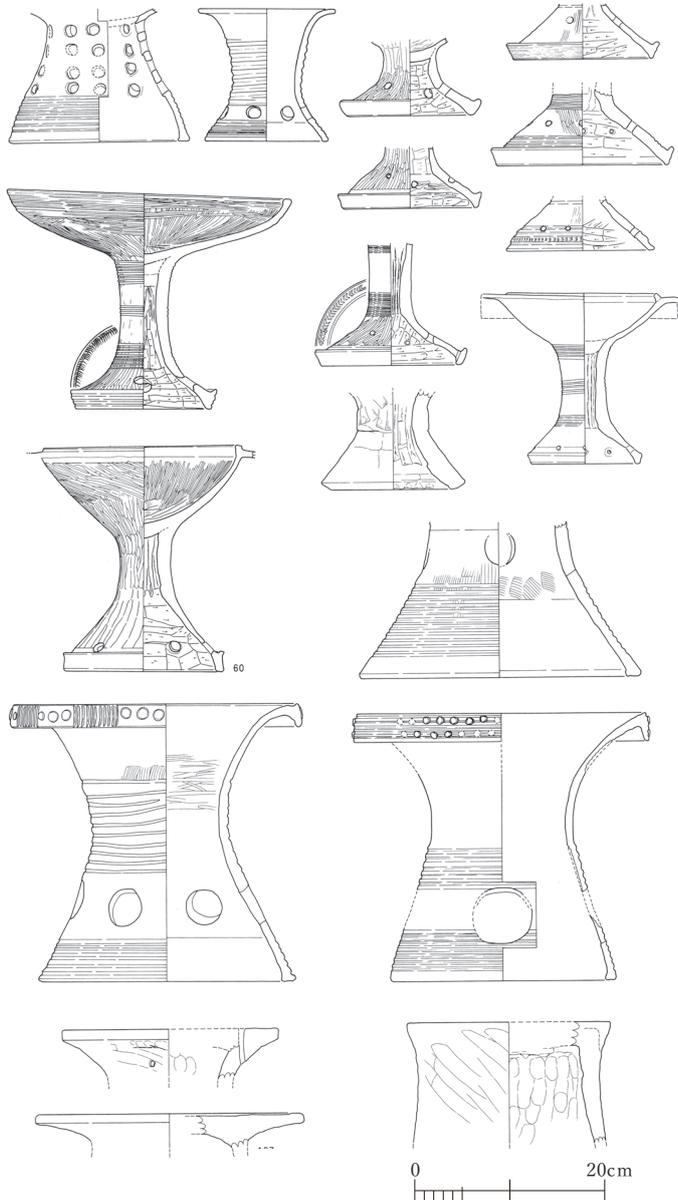


図7 長原遺跡出土高杯・台付鉢・器台・台形土器

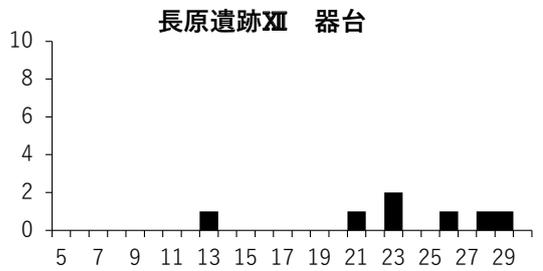
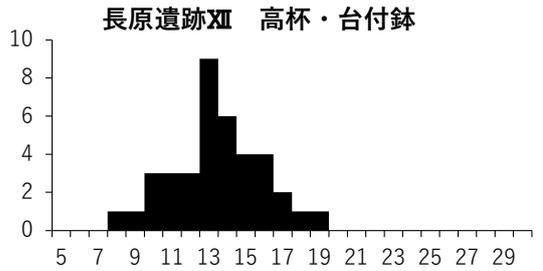
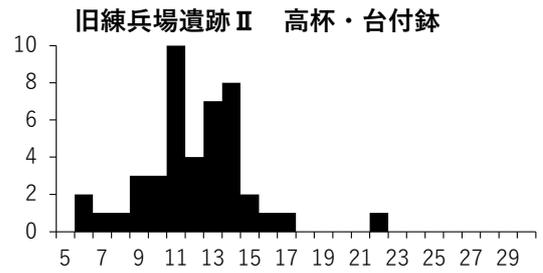


図8 旧練兵場遺跡及び長原遺跡出土土器の底径 (横軸= cm)

理したところ、10cm台と13cm台の2つのピークが認められるが、全体としては11cm前後を中心とする分布がみてとれる(図8上)。

これに対して長原遺跡(図7)では、高杯・台付鉢については12cm台をピークとする分布を示し(図8中)、全体として旧練兵場遺跡に対してやや大きいものの、さほど大きな違いがあるとはいえないだろう。一方、計7点が掲載された器台についてみると(図8下)、底径が20cm以上の個体が多く、最大のもは28.8cmに及んでいる。これに対応するように、『長原遺跡調査報告書Ⅻ』に掲載された台形土器の台部径も大きい。

このように2つの遺跡の土器の底径を比較すると器台の有無によって大きな相違が生じていることがわかる。このことを1)、2)における台形土器のタイプの割合との対応関係

を示すものと理解することが可能ではないだろうか。すなわち、器台のような底径の大きな土器の製作に際しては、それに見合うサイズの台形土器が必要となったのではないかと考えられる<sup>(3)</sup>。

**考察のまとめ** 以上の内容を改めて箇条書きにてまとめておこう。

- ①台形土器は、土器製作に関連する道具であると考えられる
- ②ただし、土器の総量に対する台形土器の出土量は少なく、全ての土器が台形土器を用いて製作されたとは考えにくい
- ③民俗例では、台形土器に似た道具を用いて大型土器を成形する、いわゆる「人間ロクロ」と呼ばれる製作技法が確認されている
- ④近畿南部地域と讃岐地域の事例の比較によれば、サイズと関連する台形土器の種類の割合と土器の底径の大小との間には一定の相関関係がうかがえる
- ⑤上記の④が③を弥生時代の土器づくりに想定する根拠ととらえるならば、台形土器は大型土器の製作に用いられた道具と考えることが可能となる
- ⑥製作された器種については、底径の大きな供膳具に加え、土器そのものの容量および重量の大きい一部の貯蔵具などが候補として考えられる

## おわりに

本稿では、下池田遺跡出土台形土器の観察のうえ、そこで認識された類型に基づき、これらの土器の用途・用法について考えてみた。1980年代以降、なかなか具体的な検討が進まなかった台形土器の性格に対してアプローチを試みた次第である。

今後さらに検討を進めるとすれば、台形土器を必要としない一般的な土器製作の実態、つまり回転台の存否および存在しないとした場合にいかんして櫛描文などを伴う精緻な土器の製作が可能になったのか、ということが重要な課題となろう。また、大型土器製作に台形土器が用いられたとすると、その希少性から大型土器製作自体が限定的な技術であったと考えることも可能であり、この点を切り口とした、生産・流通論へのアプローチも有効ではないだろうか。ただし、そのような議論の展開の前にもっとも急がれるのは、集成作業と時期の評価をふまえた資料分布の精査であることを述べ、本稿のまとめとしておきたい。

## 【謝辞】

本稿作成にあたり、下記の方々および機関からご教示・ご支援をいただきました。記して感謝申し上げます。

浅岡 優、石井智大、桐井理揮、柴田将幹、篠宮 正、杉山拓己、田中元浩、松木研太、森岡秀人、山岡邦章、渡邊 誠、岸和田市教育委員会

## 【註】

- (1) 以下の検討において、本資料が一括性をもつものか否かが問題となるが、出土状況については不明であるといわざるをえない。ただし、台形土器自体の希少性に加え、近接する調査区においてこれが出土していないという事実を鑑み、特定の遺構からまとめて出土したものとみておくこととしたい。なお以上の認識は、山岡邦章氏の教示に基づくものである。
- (2) ただし、出土点数が極端に多い下池田遺跡と旧練兵場遺跡の台形土器の台部径を単純に比較すると、旧練兵場遺跡

の方がやや大きい。一方で、土器底部径を比較した長原遺跡出土台形土器はC類が多く、さらに大きい数値となる。

- ・下池田遺跡：平均値 21.0cm、中央値 21.8cm
- ・旧練兵場遺跡：平均値 22.2cm、中央値 22.2cm
- ・長原遺跡：平均値 24.8cm、中央値 24.5cm

(3) この点をさらに追求するためには、讃岐地域の近隣に位置しながらも中期後葉から器台を使用する中国地方の様相との比較が有効であると思われる。本格的検討は稿を改めることとしたいが、稲垣の集成事例（稲垣 2004）によれば中国地方の台形土器には、旧練兵場遺跡よりも多くのB・C類が含まれるものと考えられる。

#### 【参考文献】

- 秋枝 芳・森下大輔 1977「遺構と遺物の検討」『八代深田遺跡』姫路市文化財保護協会
- 浅岡俊夫 1998「VI まとめ」『堺市下田遺跡』下田遺跡調査団・六甲山麓遺跡調査会
- 石部正志 1979「下池田遺跡」『岸和田市史』第1巻 岸和田市
- 伊藤 実 1984「V まとめ」『亀山遺跡—第3次発掘調査概報—』広島県埋蔵文化財センター
- 稲垣寿彦 2004「3. 出土遺物」『庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』庄原市教育委員会
- 荻田昭次・島田義明 1972「V 出土遺物」『勝部遺跡』豊中市教育委員会
- 榎原光一郎 2004「台形土器の研究」『帝京大学山梨文化財研究所報告』第12集
- 工楽善通 1973「1972年の考古学界的動向（弥生時代）」『月刊考古学ジャーナル』No. 81
- 信里芳紀 2004「讃岐地方における弥生中期の土器編年—凹線文期を中心にして—」『第53回埋蔵文化財研究集会 弥生中期土器の併行関係発表要旨集』埋蔵文化財研究会
- 信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年—凹線文期を中心にして—」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』I, 香川県埋蔵文化財センター
- 平川ひろみ 2015「土器の痕跡を読む：民族考古学的観点から得られた情報を元に」『日本情報考古学会講演論文集』15
- 平川ひろみ・中園 聡 2016「弥生土器製作者の身体技法：回転台と“人間ロクロ”の民族考古学的調査」『日本情報考古学会講演論文集』16
- 三好 玄編 2024『土器研究の可能性—新たな分析と弥生社会—』大阪府立弥生文化博物館
- 森岡秀人 1973「会下山弥生遺跡」『朝日ヶ丘縄文遺跡・会下山弥生遺跡』芦屋市教育委員会
- 渡邊 誠 2013「高松平野における弥生時代後期前半の土器相」『私の考古学』丹羽佑一先生退任記念事業会

#### 【報告書】

- 香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院 2009『旧練兵場遺跡I』
- 香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院 2011『旧練兵場遺跡II（第19次調査）』
- 香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院 2015『旧練兵場遺跡V』
- 香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター 2016『旧練兵場遺跡VII』
- 香川県教育委員会 2022『旧練兵場遺跡（第26次調査）』
- 財団法人大阪市文化財協会 2005『長原遺跡発掘調査報告』XII
- 庄原市教育委員会 2004『庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 奈良縣 1928「高市郡新澤村大字一石器時代遺跡調査」『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會第拾回報告』

#### 【挿図等出典】

写真1：三好編 2024、図3：庄原市 2004、図4・6：香川県ほか 2011、図7：大阪市 2005、その他は筆者作成

# 弥生文化博物館所蔵の盤龍座獣帯鏡

— 銭文と銘文を中心とした考察 —

高瀬裕太

## 1. はじめに

大阪府立弥生文化博物館では、伝中国出土鏡 64 面を所蔵している。製作時期としては、岡村秀典による漢鏡編年（岡村 1984・1993・1999）でいう 4 期から 7 期までの資料を中心に、戦国時代から三国時代までが確認でき、各時期の鏡種が網羅されている。

本稿では、これらのうち筆者が専門とする「銭文」が描かれた盤龍座獣帯鏡（資料番号 90 - 15、以下本鏡と呼称）について紹介する。まず、鏡を構成する「銘文」、「内区主文」、「外区」といった文様帯を中心に特徴を概観したうえで、「銭文」の表現や銘文の内容について若干の考察をおこなった後、同時期の銅鏡製作の動向から本鏡がどのように位置付けられるかを述べる。

## 2. 資料の観察

**法量・状態** 面径 17.0cm、鈕の高さ 1.5cm、厚さ 1mm、鏡縁の厚さ 6mm の完形鏡であり、全体は黒色を呈する。全体的にやや錆がみられ、特に図 1 の時計の 4 時（以下、「時計の」は省略）から 6 時の方角にかけて顕著となっている。状態としては良好である。

**構成** 半球形の鈕を中心に、周りは鈕座がめぐり、圏線の外側にある内区には四神や瑞獣等の文様が描かれている。さらに圏線を隔てた内区外周文様帯には銘文、櫛歯文帯と続き、一段高い箇所外区をめぐらす。

**鈕・鈕座** 鈕孔は円形を呈する。鈕座には体躯を鈕に隠す盤龍鏡と同じように右側に龍を、左側に虎を配しており、それぞれが対向する形で表現されている。鈕方向はおそらく後漢代前半までにみられるような縦方向と考えられ、ちょうど龍虎の口にはさまれる位置にある。鈕の正軸方向に対し、鈕座および内区文様全体が若干、時計回りにずれている。文様の表現は、輪郭を線で表し、内側を浮彫とした半肉彫りとも呼ばれるものに該当する。

**内区** 7 乳により瑞獣を区画した獣帯をめぐらす。本来であれば四神 4 体とそれぞれ対をなす瑞獣 4 体の計 8 体が定形であるのに対し、玄武が欠落した 7 体となっている。乳は円座である。図 1 の 0 時から 4 時の方角に龍形の獣が 3 体、5 時の方角に朱雀、7 時の方角に武器と盾を持った獣人、9 時の方角に白虎、11 時の方角に鹿が表されている。隙間には芝草等の植物が補填されている。

方格規矩四神鏡に比べ、瑞獣を自由に配置することが多い獣帯鏡に規則を見出すのは困難かもしれないが、王莽代に定形化した方格規矩四神鏡の四神と瑞獣の配置と比較すれば、次の 3 点のことが考えられる。

- ① 白虎と鹿、青龍と龍は対となるよう隣接しており、四神の左側に配置される。
- ② 朱雀は鳥と対になることが多いが、本鏡では定形外である獣人に置き換わり、①と同様に左側に隣接している。
- ③ 本来、玄武と隣接する瑞獣は①と②の結果から 0 時の方向に位置する。また、口吻の形が盤龍座の龍



図1 大阪府立弥生文化博物館所蔵盤龍座獸帯鏡 (S = 1 / 1)

やほかの2体の龍形に比べ異なることから、玄武と対をなすことが多い一角獣がモデルである可能性が高い。文様表現は浮彫式である。

**内区外周文様（銘文）帯** 内区に近い文様帯には銘文がめぐっており、外区側には楡歯文が施されている。銘文の字体は隸書体である。

銘文は「趙氏作竟大毋傷 辛有善同出丹羊 和巳銀錫青且明兮」とあり、これらを積読すると「趙氏は鏡を作るに、大いに傷毋し。新たに善き銅有り、丹陽に出づ。和するに銀錫を以てし、清にして且つ明なり。」と読むことができる。

上記の字句表記および単語の補足を加えておくと、1句目にみえる「趙氏」といった鏡の作者銘を入れる事例は、漢鏡5期後半以降にみられ、「淮派」と呼ばれる工人の手によるものである。

続いて2句1字目の「辛」は「新」と同義である。本鏡は漢鏡5期後半、すなわち王莽の新滅亡後に製作された鏡である。そのため、王朝名を表したものとは考えにくい。

同じく2句7字目の「羊」は直前の「丹」とあわせて「陽」と同義ということがわかる。丹陽は長江下流域に位置し、漢代には銅採掘場として有名な地域であり、2句はそのことを謳っている。

3句2字目の「巳」は「以」と同義であり、1字から4字まであわせて「(善い銅に) 銀と錫を合せた」という意になる。錫は金属の強度を上げるために用いられ、実際に銅鏡の成分としても多く含まれるが、銀はほとんど含まれない。このことから笠野毅は「銀錫」は白金のように精良であることの修辭であるとしている(笠野1983)。3句目最後に助辭である「兮」が付くため8字になっているが、1句と2句と同様に7字句をベースにしていることがわかる。

最後に銘文の開始位置と「鳥文」記号についてふれておこう。後漢前半までの銘文の開始位置は図像や鈕の向きと対応するように0時方向から2時方向に定まっているのに対し、本鏡の場合、6時方向からとなっている。また、銘文の開始点には「・」や「…」等のような記号が施されることが多い中、本鏡は「鳥文」が配置されている。筆者が知る限り同様の例は少ないが、漢鏡4期後半の「王氏昭鏡」銘鏡の銘文中に確認されているほか(林1993)、同時期の鏡では「呂氏」作盤龍座獸帶鏡の例も報告されている(岡村2010)。

**外区** 外区はまず内側に鋸齒文がめぐり、外側に影絵風の獸文帯が表される。上下に日月文、左右に錢文が施される。子細をみていくと、0時方向に①三足鳥をあしらった日文と、これに体軀の一部を隠した②龍がみられ、時計回りに③二角の牛、④小禽、⑤蛇と魚、⑥錢文、⑦瑞獸、⑧蟾蜍をあしらった月文と、

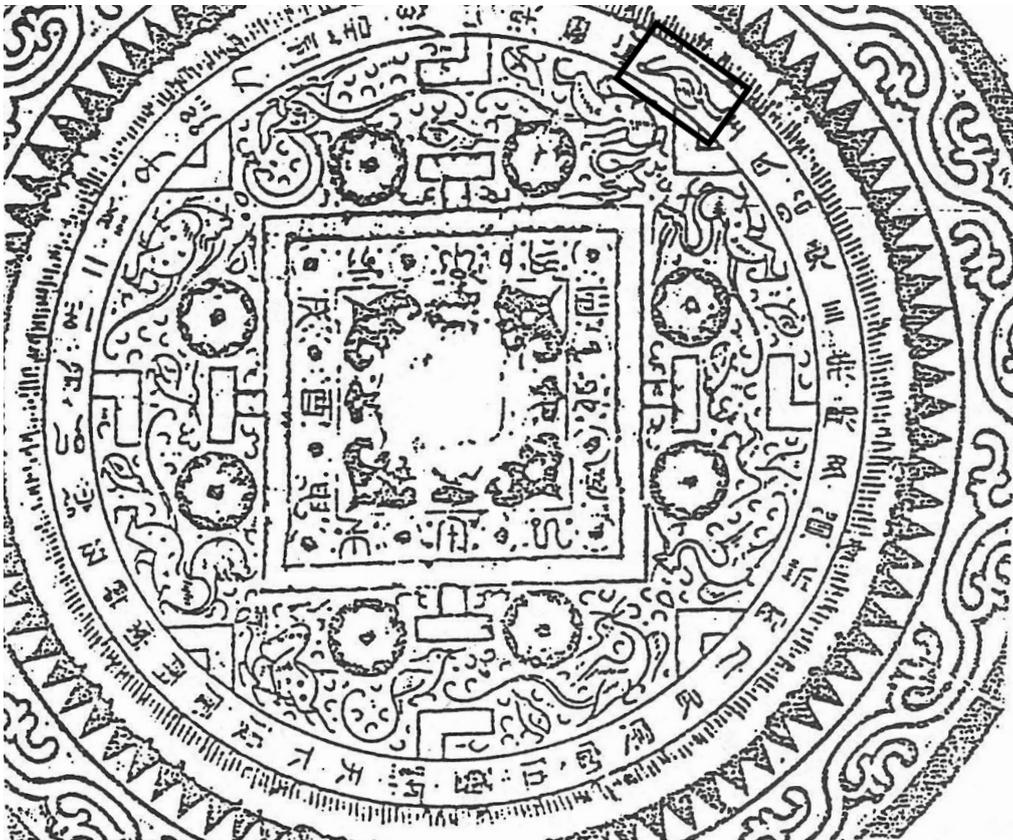


図2 鳥文記号を持つ「王氏昭」銘方格規矩四神鏡(林1993)

これに体軀の一部を隠した⑨虎、⑩3羽の禽獸、⑪龍、⑫錢文、⑬鳥、⑭禽獸となっている。

①と⑧は対となり「陰陽五行説」といった思想が反映されたものと考えられる。②・⑪は牙と角の表現から龍と推定され、②に相對する⑨は虎とみる。①・②および⑧・⑨は方格規矩四神鏡等でも組み合わせで表現されることから裏付けられる。③や⑤はほかの獸文帯にもよくみられる表現である。

④、⑩、⑬、⑭はすべて鳥をモデルにしているが、大きく3つに大別できる。まず、④・⑩は頭部の表現が若干異なるが、近似している。

一方、⑬は胴部の表現こそ④や⑩と似るが、頸部が長く、尾羽をみるに内区の朱雀のほうが近い。⑭も羽を広げた姿で表されている。

⑦・⑫は方孔と円形をもつ錢文である。日月文に伴う星辰文が変化したものとする。文様の詳細については後述する。

**型式** 岡村による単位文様の変化とそれらをもとにした型式分類に照らしてみる（岡村 1984・1993）。

内区図像をみると四神のうち玄武が欠落していることから主文 b で、図像に輪郭線がある浮彫表現 a である。以上の特徴から型式は浮彫Ⅱ式にあたるものといえる。

**編年** これまで述べてきた特徴から本鏡は漢鏡編年 5 期後半（1 世紀後葉、後漢前期後葉）に位置付けられる。漢鏡 5 期の特徴として、①官営工房である「尚方」から独立した「青蓋」や「（淮南）龍氏」、「池氏」をはじめとする「某氏」製作鏡が登場すること、②それら「某氏」工人は「淮派」と呼ばれ、製作活動の中心地は旧淮南国が位置した現在の中国安徽省寿県や淮河流域であること、③主流であった細線式獸帯鏡から新たに盤龍鏡や浮彫式獸帯鏡を創出したことなどが挙げられる（岡村 2010、2012）。

**「淮派」の作鏡活動における本鏡の位置づけ** 岡村は漢鏡 5 期後半における淮派の活動を 4 段階にわけている（岡村 2010）。本鏡は、浮彫式獸帯鏡の創作を画期とし、さまざまな鏡工人が尚方工房より独立し製作地を移動しつつ、時勢に応じた新たな意匠や銘文を創出した第 2 段階の資料と考えられる。岡村は当該期の鏡群を「およそ章帝（在位 75-88）のころ」に製作されたものと評している。

**銘文** 1 句目に作鏡者銘を入れることは既述のとおり当該期の特徴である。2 句および 3 句目はこの時期に主流となっている樋口隆康の分類による K ではなく、M や林裕巳の Mb2a に該当し（樋口 1979、林 2006）、本来の銘文 M にあるべき 4 句目以降は欠落している。

なお上記による各氏の編年では「新有善銅」銘文中の「新」は王莽代を指すものとされていることには注意が必要であり、この点については改めて考察を加えることとする。

**同時期の鏡式** 本鏡のような盤龍座から抽出される形で登場する同時期の鏡式に盤龍鏡がある。そのため、当該期の盤龍表現のほか、獸像表現についても参考になる部分も多いと考え、以下に紹介する。

岡村 1993 にある盤龍鏡の型式編年にて設定された単位文様をさらに区別した上野祥史による主文獸像表現分類によれば、本鏡の龍体部については長くくねらし、S 字様に表現した表現 2 であり、図像配置については鈕を中心に 2 獸が旋回する C 1 であることから型式 2 C 1 が該当する（上野 2003）。

また型式ごとに作鏡者を刻んだ銘文や出土分布地から系列を抽出し、製作動向についても言及しているが、結論を先に述べると当該型式 2 C 1 は特徴を見出すことができないといった評価であった。

この理由として当型式に属する事例が 6 例と少ないことや、「北は幽州楽浪郡から南は交州郁林郡まで分布する」といった広域であることがあげられる。ただし、その中でも楽浪郡からは 3 例が集中していることを特記している。

筆者は今回、盤龍鏡については事例が確認できていないが、上野が集成した型式 2 C 1 の中に、「趙氏」

作鏡があることを紹介しておきたい。<sup>(1)</sup>偶然かもしれないが、本鏡の盤龍座および内区に表された龍の体軀は表現2であることから類似している可能性がある。当該「趙氏」作盤龍鏡と比較しないことには作鏡者が同じかどうか確証は得られないが、非常に興味深い課題といえる。

### 3. 本鏡に関する考察

**銭文について** まず、銭文鏡に関する先行研究について簡単に紹介する。樋口は鳥取県西伯耆郡の普段寺山1号墳から出土した三角縁神獸鏡に関する考察の中で、銭文が表される鏡式や、文様の配置位置について簡潔に言及している（樋口1952）。

国内外の事例を集成し、より詳細な分析をおこなった高倉洋彰は、①銭文の配される鏡は方格規矩鏡・盤龍鏡・獸帯鏡・画像鏡・双頭龍文鏡・双夔鏡・方銘獸文鏡の7種であること、②表された銭文のモデルについては「大泉五十」銭と「五銖」銭のみであること、③外区に銭文が入る場合、鏡式は方格規矩四神鏡・獸帯鏡・盤龍鏡・画像鏡に限られ、内区に銭文が表される場合については先に挙げた7種のうち、画像鏡以外に広くみられること、④銭文が表現される位置関係から、龍虎あるいは日月に伴うものであること、⑤以上を踏まえ銭文鏡の初現は王莽、あるいはそのやや後とし、後漢後期（2世紀後半から3世紀初頭）に盛行したと述べている（高倉1990）。

徳富孔一は方格規矩鏡に関して高倉の挙げた例と自身が確認した新たな事例を加え、銭文を配する方格規矩鏡の銭貨から製作年代の限定を試みている。特に王莽銭である「大泉五十」については、公式に発行されてから禁止されるまでの紀元8年から20年とこの文様をもつ鏡の製作年代が一致しないことから、非公式な後漢以降の流通年代についても考慮すべきと指摘し、「冥銭」等の意味をもった副葬品としての評価をおこなっている（徳富2018）。

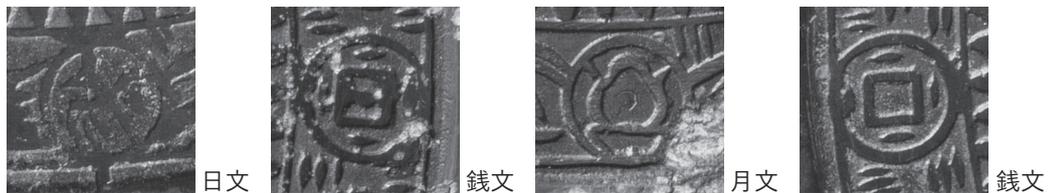


図3 本鏡の銭文および日月文の拡大

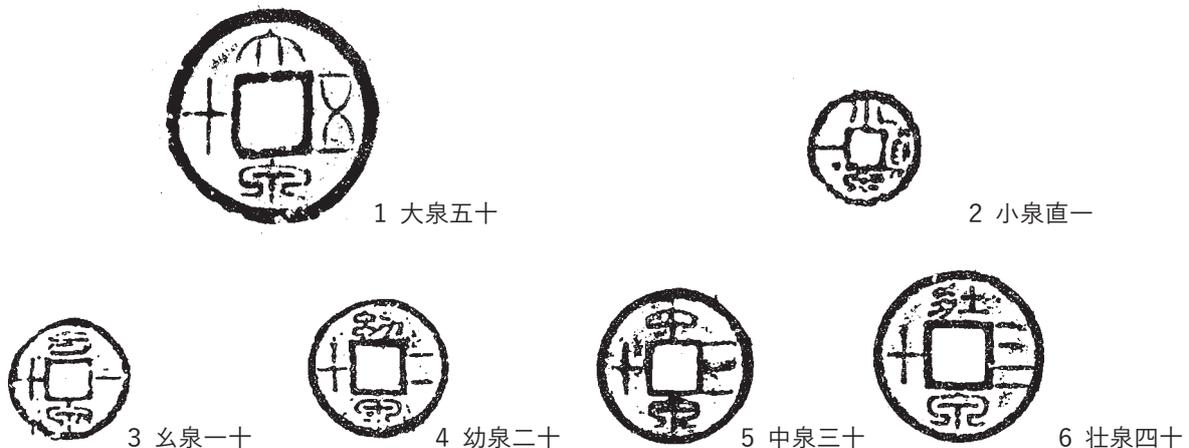


図4 4文字銭貨の候補（国家文物局1989より）

杉山晋作は、中国鏡の錢貨の文様に着目し、主に錢文の大きさや文字、錢貨が配される意味について述べている。錢文の大きさについて、1～1.5 cmと径2 cmである通常の錢貨より小さいことから、「小五銖」錢である可能性を指摘し、製作の際、型に小五銖錢を押し当てて文様としたのではなく、「コンパスを刺した穴が中心点として残っている」ため、工人が他の図像と同様に手描きで円を描いたものとしている(杉山1998)。

ちなみに、錢文の定義については高倉のいうような「大泉五十」等の文字を有する例に加え、記号あるいは無文であっても方孔円錢形のものをお互いに合わせた総称であることを補足しておく。

次に上記の内容をふまえて本鏡の錢文について改めてみていこう。配される位置は外区であり、2枚が日月文との組み合わせにより四方の位置を占める。錢文の大きさは外郭線までで8 mmを測る。また、方孔の中心にはコンパスを刺した穴が確認でき、方孔各辺に平行する形で「-」の記号を4本施している(図3)。

「-」の記号は素直にみれば本来あった錢貨の文字を省略した表現と考えられ、4本あることから「五銖」、「五金」、「五朱」、「貨泉」等といった漢字2文字のみを配す錢貨はモデルとならない。<sup>(2)</sup> 錢文を配す鏡の事例にこのような記号を用いた省略表現はみられないため、可能性として、①漢字4文字の錢貨と②漢字2文字+記号が候補としてあげられる。②でいう記号とは、錢文にみられる「五銖」といった漢字とは別に「…」や「…」といった列点を表現したものを指す。

①は鏡の製作時期と同時代の貨幣に照らした場合、図4で示した王莽代の6例に限定される。<sup>(3)</sup> また、本鏡と同じように外区に漢字4文字の「大泉五十」錢文をもつ鏡の類例として、『小校径閣金石文字』に掲載されている方格規矩鏡(劉1979)と、その同範(型)鏡と考えられる『古鏡圖録』掲載鏡(羅1916、図5)が存在する。ちなみに図5は漢鏡4期の鏡である。

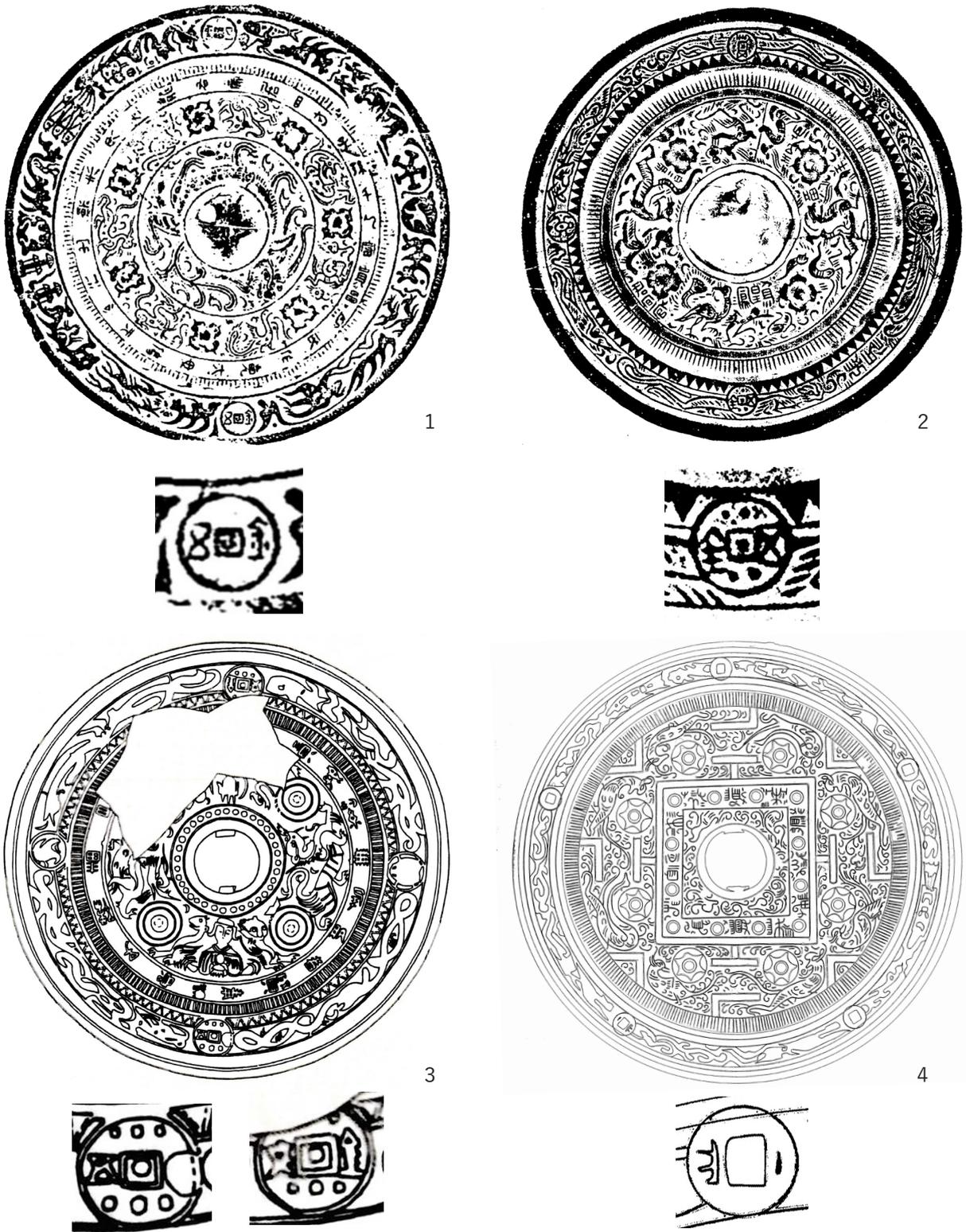
続いて②の候補として、①の図5鏡と同じ条件で外区に漢字2文字および記号をもつ錢文を配する資料をいくつかピックアップした(図6)。時期は異なるが表現の参考として、広く漢鏡5から7期までを対象とした。また倭鏡ではあるが、愛知県犬山市東之宮古墳出土仿製方格規矩獸文系倭鏡についても外区に錢文が5枚配されており、うち1枚には崩れているが「五銖」を表現したようにみられるため参考とした。

結論を述べると、①については高倉らの指摘するとおり4文字を配す錢文は図4-1のような「大泉五十」のみに絞られることがわかる。②についても文字を「-」に変換したとしても、「…」の表現をわざわざ別の「-」記号に置き換えるとは考えにくい。

ただし、錢文のモデルが「大泉五十」となると、高倉も指摘しているように「方格規矩鏡」にしか類例がみられないことから、本鏡と鏡式が異なることについては注意しなければならない。加えて、何度も触れているが本鏡は漢鏡5期後半、つまり後漢鏡であることをふまえる



図5 外区に「大泉五十」錢文を配す方格規矩四神鏡(羅1916より、縮尺は任意)



- 1 「池氏」作盤龍座獸帶鏡（劉 1996 より）
- 2 「張氏」作画像鏡（羅 1916 より）
- 3 千葉県高部 30 号墳出土斜縁神獸鏡（千葉県 2003 より）
- 4 愛知県東之宮古墳出土仿製方格規矩獸文系倭鏡（犬山市 2014 より）

図6 鏡に配される銭文の種類（縮尺は任意）

と、王莽代に流通した「大泉五十」銭の文様が積極的に採用される理由も考えにくい。

ではこの矛盾をどうみるか。筆者としてはすでに製作された「大泉五十」銭文が配された方格規矩鏡を制作時の参考にした可能性を考えたい。ただし、図5の方格規矩鏡と本鏡は外区の文様および銭文の数も3枚と異なる。強いていえば図6-1から3の方が近いと、図5鏡を直接モデルにしたとはいえない。未発見の鏡例、または銭文様のみを取り入れるというスタイルを参考にしたのであろう。

漢鏡5期後半には、「尚方」の作る鏡の図像や銘文が形式化する一方、多くの鏡工人が独立し、主流であった方格規矩鏡から次第に獸帯鏡や盤龍鏡などの制作に注力していった。中には王莽代にみられた銘文を借用しつつ、時勢に配慮し「新」を「國」に改めるなどして鏡を製作することもあった（岡村2010ほか）。

本鏡の製作時期は王莽の新が倒れ、後漢代の流通貨幣は前漢と同じ「五銖」銭に戻っていったとはいえ、さほど時を隔てていないわけではないため、「大泉五十」等の貨幣が非公式に流通、または認知されていた可能性がある。このようなことをふまれば本鏡の「一」については、図6-4の倭鏡銭文のような文字や銭文の理解を欠いた写しの過程で生じた簡略化ではなく、現王朝に対して配慮した文字の省略であったと考えることが妥当ではないだろうか。

**本鏡の銘文について** 先に銘文の詳細や本鏡のモデルについて触れる中で、「新」は王莽の国家を指す名称ではないと述べてきた。この点を銘文研究の視点から補足すると、「新」の前後にわかれる「漢」が鏡の編年においてどう扱われているかが参考となる。先行研究の中では「漢有善銅」銘でいうところの「漢」を、「前漢」と「後漢」のどちらかで比定するか、度々意見がわかれてきた（樋口1979、林2006ほか）。

岡村は王莽鏡のような同じ型式段階の鏡に「漢」から「新」のような変化が見られる場合、「漢」は王莽建国前の執政時の「前漢」であり、「新」の場合は王莽の建国後に製作された鏡であると指摘する（岡村2019ほか）。

一方で「漢有善銅」銘自体は王莽鏡をはさむ形で前漢鏡と後漢鏡のどちらの銘文にも登場し、この場合は考古学による型式学的手法と組み合わせながらみていくしかない。ただ、素直に考えれば先にも述べたとおり、仮借した銘文には王朝交替に即して（岡村2010ほか）、「漢（前漢）」→「新」→「漢（後漢）」と置き換えていったと理解するのが妥当であろう。

しかし、本鏡の場合はこれと異なり、既に王朝として存在しない「新」（辛）の字が刻まれているが、これは国家の意で使用したのではないと筆者は想定している。先に紹介した銭文のモデルと想定される方格規矩四神鏡に施された4文字銭貨「大泉五十」各辺を「一」で置き換えているのに対し、「新」が「漢」に置き換えられていないことは、すなわち「新たに」と読ませることにより、そのまま使用したものとみることができるからである。

これに続き「善銅出丹陽」が刻まれていることも、作鏡者の意図を理解するうえで重要である。本来はこの銘文の前に「漢」や「新」といった国名が表されることが一般的であり、これらの銘文は前漢からみられる。ただし、岡村は漢代における銅山として著名な「丹陽」が、後漢にみられる淮派の作鏡活動地域である淮河より北に約250kmと近い位置に属することから、後漢鏡にも「丹陽」銘が入ることは活動の実態にあったものとみなしている（岡村2011）。

本鏡の銘文は3句までとなっているが、2句および3句から本来5言7字句からなる銘文M「漢（新）有善銅出丹陽 和以銀錫清且明 左龍右虎掌四彭 朱爵玄武順陰陽 八子九孫治中央」がベースになっているのは間違いない。銘文Mは四神の配置や役割が定形化する方格規矩四神鏡（漢鏡4期）に多用され、実際に3句以降の銘文が四神と対応していることがわかる。

一方で本鏡が位置する漢鏡5期後半は銘文の字句数が多様化する時期とされる（「中国古鏡の研究」班2011）、7字句がベースであることや、銘文Mを使用しているのは実に興味深い。先述した銭文表現の省略化や銘文における「新」文字の使用と同じように、方格規矩四神鏡をモデルとしながらも、内区表現において玄武が欠落することと内区の表現と連動するように銘文も3句目（本鏡でいう4句目）以降を省略したとすれば、やはり銘文の意味を理解しつつおこなった改変の産物と考えられるであろう。

#### 4. おわりに

最後に改めて、本鏡の評価をまとめておこう。本鏡の属する岡村編年漢鏡5期後半の淮派による活動画期は4段階に分かれており、第1段階は「青蓋」に属する有志の工人や「池氏」など続々と工人が独立し、浮彫式獣帯鏡や盤龍鏡といった新たなデザインを創出した時期である。

これに続く第2段階に登場する様々な工人のうちの一人である「趙氏」によって本鏡は製作されたものである。その特徴は王莽代にない盤龍座を採用するほか、第1段階以降多くみられる四神や方位にとられない獣帯鏡をベースにした点にある。

一方で、外区に施した銭文の文字を省略している点や、銘文その開始点に表された鳥文符号、そして前漢に多様される銘文Mを参考にした銘をもつことは、王莽鏡である図2や図5のような方格規矩四神鏡をモデルとしたことによるものであろう。オリジナルの完全模倣ではなく、当時の流行にあわせつつ一部の改変を加えて作鏡をおこなったものと考えられる。

本鏡の製作時期に銭文や銘文の符号である鳥文が表される例は決して多くはない。また、今回は紙幅の都合や根拠が少ないため言及をしていないが、内区に描かれる獣人は『山海経』に登場する「鑿齒」や「刑天」ではないかとも考えられる。当時みられた新たな意匠を積極的に取り入れる独創性に加え、本鏡製作段階に後続する第3段階に西王母が登場することをふまえると、『山海経』の世界観が題材として使用されていても不思議ではない。

あくまで「趙氏」の事例にとどまるが、新たなデザインと既存の鏡を融合したものが本鏡であると筆者は考える。以上、本鏡の観察を通して多種多様な淮派の作鏡活動の一端を示すことができたこととすれば幸いである。

#### 【謝辞】

本稿に掲載した画像および法量等一部の情報は、2025年におこなわれた岩本 崇、村瀬 陸、渡辺夏美の各氏による資料調査の成果を使用させていただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

#### 【註】

- (1) 型式2C1では「呂氏」作盤龍鏡も1例確認されている。本稿1節「内区外周文様（銘文）帯」にても紹介している通り、「呂氏」製作鏡は同時期としては珍しい銘文開始点に「鳥文」記号が多いのも特徴である（岡村2010）。以上のことからさらに論を飛躍させれば、「趙氏」や「呂氏」には一定の共通点を見出せるといえるかもしれないが、今回の考察に加えるには事例の検討が少ないため、今後の課題である。
- (2) 「貨泉」の配された鏡として『中原蔵鏡聚英』（王趁意2011）内に掲載されている方格規矩四神鏡が徳富によって紹介されているが（徳富2019）、今回は4文字銭貨の対象ではないため、割愛する。

(3) 漢代の副葬品としての厭勝銭や後漢より下る三国時代の貨幣を含めるとより候補が増えるが、対象資料のモデルが純粋な貨幣としての意図であると筆者は考えていること、そして時期の違いから取り上げなかった。

【参考文献・報告書】

<日文>

- 犬山市教育委員会 2014『犬山市埋蔵文化財調査報告書第12集 史跡東之宮古墳』犬山市教育委員会
- 岩本 崇 2021「東之宮古墳の鏡」『東之宮古墳の研究はどこまで進んだのか』第4回研究会資料集 東海古墳時代研究会
- 上野祥史 2003「盤龍鏡の諸系列」『国立歴史民俗博物館研究報告第100集』国立歴史民俗博物館
- 岡村秀典 1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻5号 史学研究会
- 岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告第55集 [共同研究] 日本出土鏡データ集成1 日本出土鏡にかかわる諸問題』国立歴史民俗博物館
- 岡村秀典 1999『三角縁神獸鏡の時代』吉川弘文館
- 岡村秀典 2010「漢鏡5期における淮派の成立」『東方學報』第85冊 京都大学人文科学研究所
- 岡村秀典 2011「後漢鏡銘の研究」『東方學報』第86冊 京都大学人文科学研究所
- 岡村秀典 2012「後漢鏡における淮派と呉派」『東方學報』第87冊 京都大学人文科学研究所
- 岡村秀典 2014「後漢鏡淮派の先駆者たち——三鳥・銅槃伝」『東アジア古文化論攷』中国書店
- 岡村秀典 2017『鏡が語る古代史』岩波書店
- 岡村秀典 2019「王莽鏡論」『東方學報』第94冊 京都大学人文科学研究所
- 笠野 毅 1983「清明なる鏡と天—中国古鏡が規範を内包する根拠」『考古学の新視点』雄山閣
- 岸本泰緒子 2006「獸帯鏡に関する一考察」『博望』第6号 東北アジア古文化研究所
- 杉山晋作 1998「鏡に現された銭文様」国立歴史民俗博物館編『お金の不思議—貨幣の歴史学—』山川出版
- 高倉洋彰 1990『日本金属器出現期の研究』学生社
- 千葉県史料研究財団編 2003『千葉県の歴史 資料編考古2 (弥生・古墳時代)』
- 「中国古鏡の研究」班 2009『前漢鏡銘集釋』『東方學報』第84冊 京都大学人文科学研究所
- 「中国古鏡の研究」班 2011『後漢鏡銘集釋』『東方學報』第86冊 京都大学人文科学研究所
- 徳富孔一 2018「銭文を配す方格規矩鏡の研究」『七隈史学』七隈史学会
- 徳富孔一 2019『銭文を配す方格規矩鏡の研究Ⅱ』2019年度弥生ネット交流会 in 岡山 発表資料
- 林 裕己 2006「漢鏡銘について (鏡銘分類概論) —樋口分類補正試論—」『古文化談叢』第55集 九州古文化研究会
- 樋口隆康 1952「同型鏡の二三について—鳥取普段寺山古墳新出鏡を中心として—」『古文化』第1集2号 日本古文化研究会
- 樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
- <中文>
- 王 趁意 2011『中原藏鏡聚英』中州古籍出版社
- 国家文物局 1989『中國古錢譜』文物出版社
- 羅 振玉 1916『古鏡圖録』
- 劉 紹明 1996「“天公行出”鏡」『中國文物報』国家文物委員会
- 劉 體智 (清) 主編 1979『小校徑閣金石文字 引得本』6 (臺灣) 大通書局
- 林 素清 1993「兩漢鏡銘初探」『中央研究院歷史語言研究所集刊』第63本第2分 中央研究院歷史語言研究所

# 馬鍬の形態と地域性

—古墳時代から古代の木製資料を対象として—

石束 礼

## はじめに

農耕に畜力を利用する場合には畜力農具を要する。そのため、日本列島における農耕への畜力の利用を考古学的に示す遺物として、これまでもっとも注目されてきたのが木製馬鍬である。弥生時代以来の水田稲作の画期ともいえる牛馬耕の開始年代は、木製馬鍬の出土例の層位の年代観から古墳時代後期ごろが想定されてきた（工楽 1987、都出 1989 ほか）。

木製馬鍬はこのように牛馬耕の導入や普及過程とも関わる重要な検討対象である一方で、その型式学的な検討は、出土数の僅少さや、分類するうえでの注目すべき属性の多さなどから難しい課題であった。

出土木製馬鍬の形態に関する理解の大枠については、河野通明と松井和幸の研究に詳しい。河野は、馬鍬が全国で6世紀から出土する傾向を指摘したうえで、民俗事例との形態の類似に着目している（河野 1994）。また松井は古墳時代以降の木製馬鍬を集成し、古代以降出土数が増加する鉄製馬鍬歯への変遷を指摘している（松井 2004）。さらに田中義昭は、馬鍬をめぐる研究史および個別の資料の諸特徴をまとめたうえで、地域的な傾向や出土遺跡の性格にも考察を加えている（田中 2011）。

このように、出土木製馬鍬についての個別の出土事例を確認することで、形態の特徴を捉える検討は進んできている。しかし、それらを体系的に整理し分類することは、これまで限られた出土事例の中では困難であった。ただ、近年の低湿地遺跡の発掘調査の増加に伴い木製資料の類例も増加しており、新出資料も含めた集成に基づく検討が可能となってきた。

本稿では、古墳時代から古代に比定される木製馬鍬の基礎的な整理をおこない、定量的な分析を試みる。そして、研究史においても注目される地域性について、その差異が現れる属性を体系的に示すことを本稿の射程とする。

## 1. 木製馬鍬の形態と構造

### (1) 木製馬鍬の各部名称と定義

遺跡から出土する木製馬鍬は、現在の民具である馬鍬と基本的に同じ構造をしている。水田の土を攪拌するための十数本の木製の歯と、その歯を固定する台木、そして人の持ち手である柄と、牛馬につなぐための引棒が台木に取り付けられる形で構成される（図1）。歯・柄・引

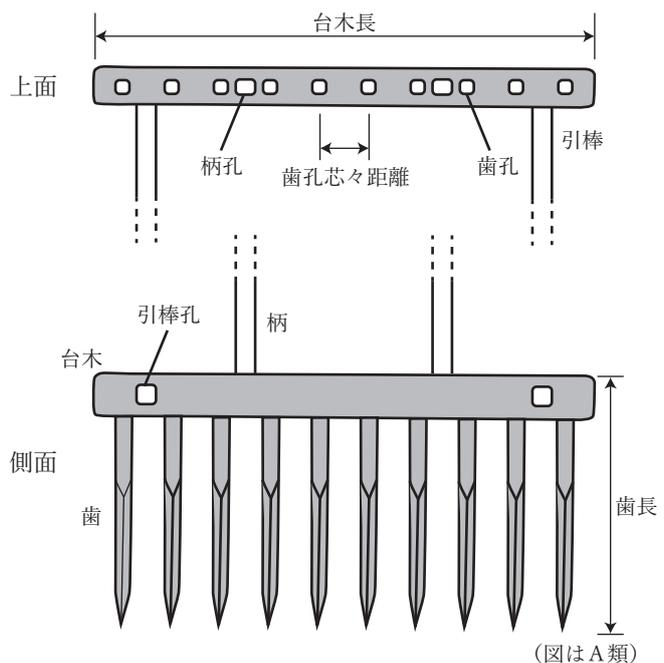


図1 馬鍬の構造と各部名称

(図はA類)

棒はそれぞれ台木にクサビなどで固定されるため、出土する台木にはそれらを差しこむための孔が確認できる。

木製馬鍬はこのように多くの部品を組み合わせて構成されるが、それぞれの部品は単純な作りであるため、部品が単独で出土したり欠損が大きかったりすると馬鍬として認識することは容易ではない<sup>(1)</sup>。角棒を組み合わせて構成される馬鍬の構造とよく似た出土遺物には、農具の大足や建物の建築部材などがある。

また他にも構造が類似している遺物として、畜力ではなく人が引く手馬鍬が挙げられる。松井は、畜力を利用する馬鍬と人力を利用する手馬鍬の分類として、台木が1 m以上のもの（1類）を馬鍬、台木が30～40cmのもの（2類）を手馬鍬としている（松井2004）。この基準は、完形の資料を見る限り妥当な数値であると考えられる。しかしながら、台木が完形で出土する事例はむしろ稀で、多くの資料は欠損がみられることから、広く適用するのはやや難しい。

これらのことを踏まえ、本稿で木製馬鍬として扱う資料を次のとおり整理しておきたい。まず馬鍬として報告されているもののうち、台木と歯がともに残存するもの、あるいは歯は残っていないが台木が良好に残存し、柄孔と引棒孔の両方がそれぞれ1つ以上認められるものに限って資料集成を試みた（図4、表1）。また手馬鍬や大足の可能性が高い資料との差別化については、残存率の低い資料でも計測可能な歯孔の芯々距離に着目した<sup>(2)</sup>。馬鍬として集成した資料のうち、歯孔の芯々距離はいずれも8～17cmの幅に収まり、そのうちほとんどが10～14cmである。一方、手馬鍬や大足として報告されている資料の数値は8 cmより小さいことがほとんどである（図2）。このことを踏まえると、欠損が激しいため本稿では集成対象外となった資料についても、歯孔芯々距離の数値を参考にして馬鍬と識別することができるかもしれない。

## (2) 馬鍬の構造

出土馬鍬の台木を観察すると、台木に穿たれた柄孔の位置の違いから構造の異なる2種類があることは、先行研究でも注目されてきた（河野1994、高橋2011ほか）。高橋健太郎は愛知県亀首遺跡出土馬鍬の報告の中で、柄孔位置の違いに対する河野の言及に従い、柄孔を歯孔と同方向に穿孔し、柄が歯に対して平行にのびるタイプを定型馬鍬A種、柄孔を歯孔と交差方向に穿孔し、柄が歯に対して直行するタイプを定型馬鍬B種と呼称している。本稿でもそれに従い、前者を柄孔A類、後者を柄孔B類とする（図3・4）<sup>(3)</sup>。ただし、その他に柄孔がない例や柄孔が斜め方向に穿孔される例などもあり、柄の

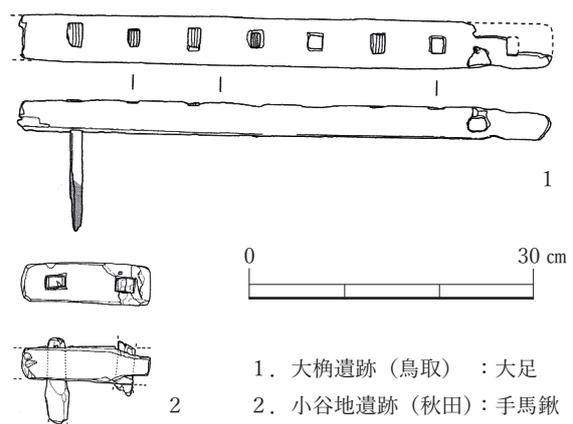


図2 馬鍬として扱わない資料

(1：水村編2017 2：村上編2011)

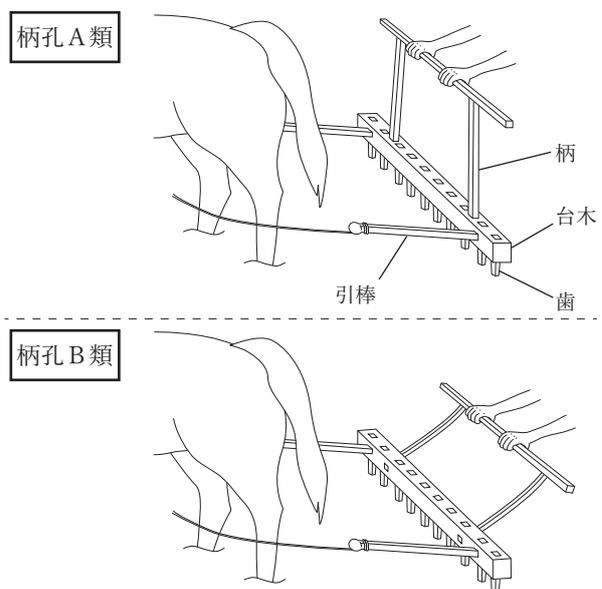
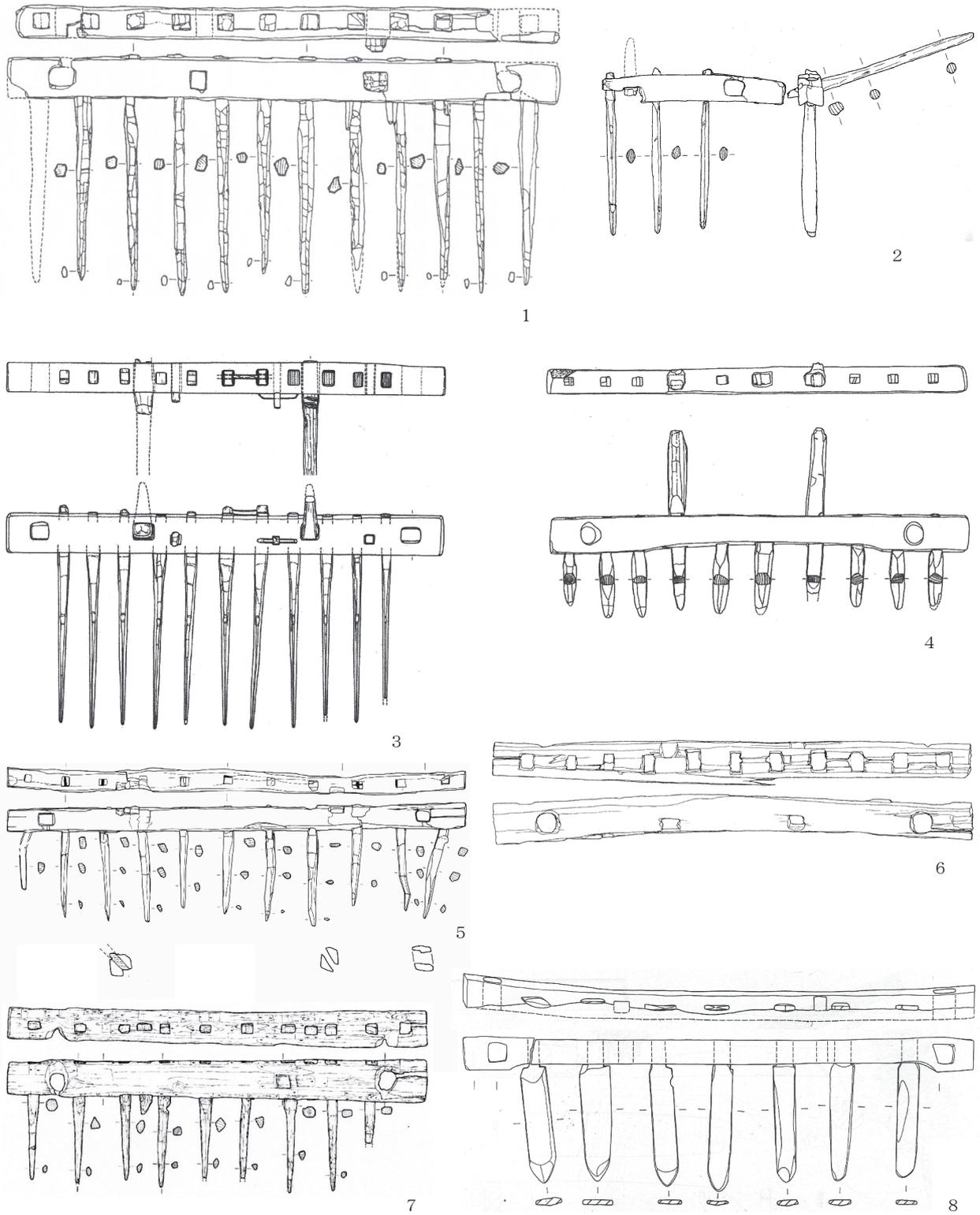


図3 柄孔の位置による分類



- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| 1. 大森 A 遺跡 (福島) : B 類 | 2. 勝川遺跡 (愛知) : B 類   |
| 3. 稻積川口遺跡 (富山) : B 類  | 4. 小路大町遺跡 (兵庫) : A 類 |
| 5. 岳美遺跡 (静岡) : その他    | 6. 堂田遺跡①(滋賀) : その他   |
| 7. 木の本遺跡 (大阪) : A 類   | 8. カキ遺跡 (福岡) : A 類   |

0 80 cm

図4 出土木製馬鉞の類例 (1:田中 2011 2:樋上編 1992 3:加藤編 2009

4:井尻編 2004 5:山本編 1996 6:宮崎ほか編 1986 7:横田ほか編 2004 8:小方編 1992)

表1 出土木製馬鋏集成

	遺跡名	所在地	年代(層位)	歯孔芯々距離 平均(cm)	柄孔の型式	歯の本数 (本)	台木長 (cm)	歯長 (最大) (cm)	引棒孔の形状	台木 削りこみ
1	市川橋	宮城	古墳後期～8C	10.5	B	12	133.3		方形	
2	上浅川	山形	8C中葉	10.5	B	14	152.0	54.0	方形	
3	大森A	福島	6C後半	11.8	B	12	147.2	63.5	方形	
4	池守	埼玉	6C後半～7C前半	9.5	その他(柄孔1つ)	14	135.8	46.5	方形	
5	石川天野	東京	7C前半	12.8	B	13	173.3	61.9	円形	
6	岳美	静岡	8C後半～9C前半	11.1	その他(斜め)	11	121.2	31.3	方形	
7	曲金北	静岡	奈良～平安前期	10.5	A	12	122.7		円形	
8	新明原・元宮川	静岡	6C末～7C	13.0	B	残存4			方形?	
9	仮宿堤ノ坪	静岡	古墳前期後半	12.4	B	11		46.3	楕円形	
10	藤守	静岡	7C後半	10.3	その他(柄孔なし)	8	93.3	19.3	方形	
11	伊場①	静岡	8C	11.1	B	復元10		36.2	方形+円形	
	伊場②	静岡	7C中葉	14.1	B	9	123.4	43.9	円形	
	伊場③	静岡	8C	13.5	B	復元10			円形	
12	祝田	静岡								
13	亀首	愛知	8C後半	12.4	B	残存8			方形	
14	勝川	愛知	8C前半～9C	13.0	B	残存4		44.8	方形	
15	柿田	岐阜	5C中葉～7C前半	10.7	B	10	123.8		方形	
16	橋垣内	三重	7C～8C?	13.8	B	9	117.6		方形	
17	川田条里	長野	古墳後期～8C前半	11.3	B	残存5		54.8	方形	
18	稲積川口	富山	6C中葉～7C前半	8.6	A	11	116.6	60.1	方形	
19	石田①	滋賀	4C末～5C初頭	8.4	B	復元12超		53.6	円形	
	石田②	滋賀	6C後半	10.2	A	復元12			円形	○
20	堂田①	滋賀	5C～6C後半	11.1	その他(斜め)	11	127.2		円形	
	堂田②	滋賀	6C後半	13.3	その他(両方向)	9	123.0		円形	
	堂田③	滋賀	6C中葉	12.7	A	10	125.9		円形	
21	下田東	奈良	7C～8C	13.2	B	10	126.4	29.4	円形	○
22	上田部①	大阪	8C	10.2	A	10	98.6	39.5	方形	○
	上田部②	大阪	8C	11.5	B	10	115.1	39.1	方形	
23	木の本	大阪	古墳前期後半	11.0	A	10	112.0	33.9	円形?	
24	今池	大阪	6C末葉	8.7	B	13	114.3	37.6	方形	○
25	小路大町	兵庫	8C前半	10.8	A	10	111.5	26.7	円形	○
26	吉田南	兵庫	8C後半～9C	10.3	B	10	103.0		方形	
27	出合	兵庫	5C～6C		その他(柄孔1つ)		(101)		円形	
28	板井寺ヶ谷	兵庫	8C後半～9C	12.6	B	8	98.8		方形?	
29	山垣	兵庫	8C前半	11.6	その他(柄孔なし)	9	107.3	31.4	方形	
30	市辺	兵庫	7C～8C	12.6	A	10			円形	
31	辻井	兵庫								
32	カキ	福岡	6C後半	16.7	A	7	134.4	40.6	方形	○
33	八ツ溝	佐賀	弥生～古墳初頭	12.4	A	10	125.9		方形	

※表の各数値は、実測図上から計測している。ただし12祝田、31辻井の各遺跡資料は未報告かつ未実見のため出土事例の提示に留める。

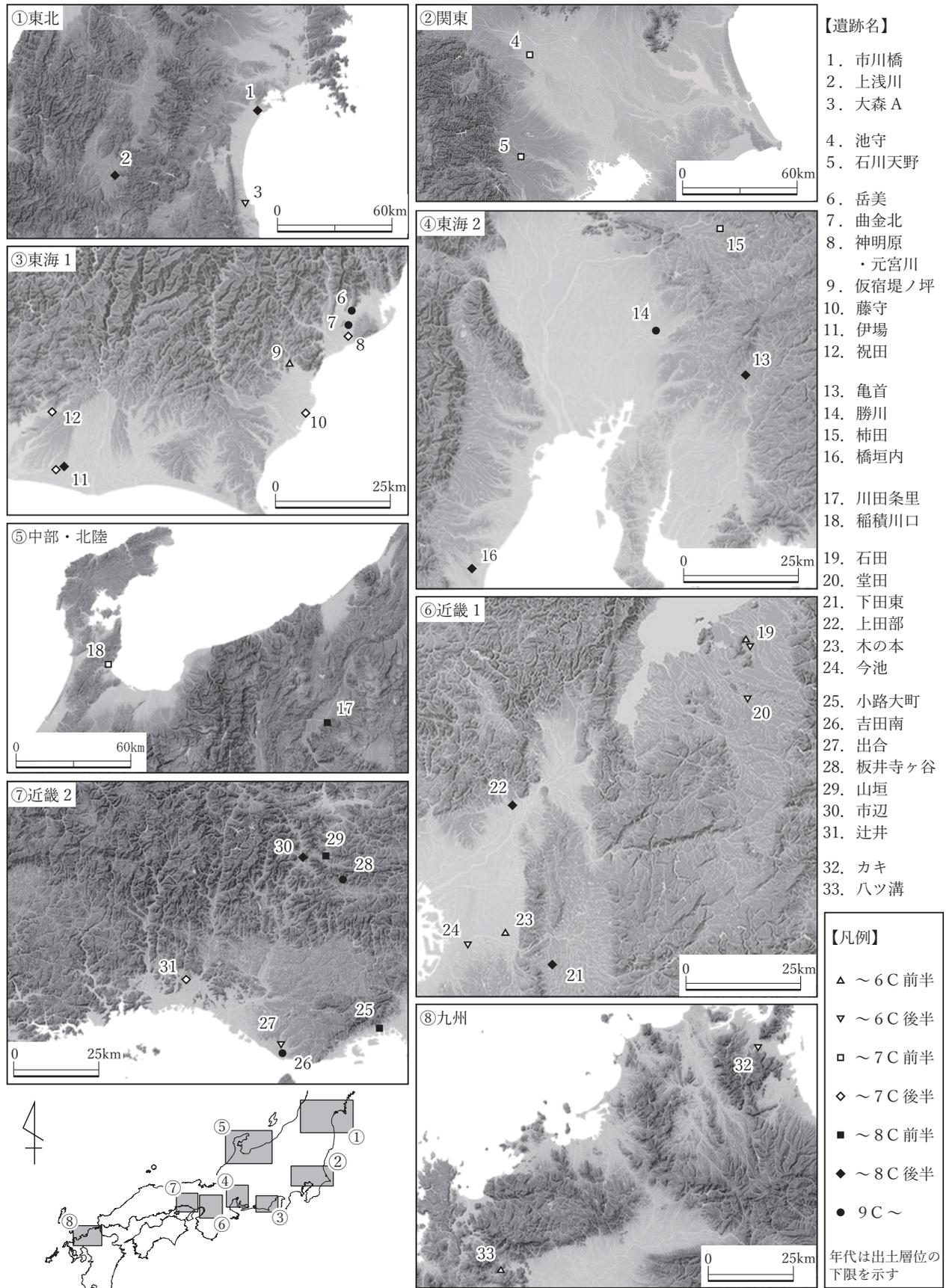
また27出合遺跡資料は写真のみ報告されており計測はおこなえていない。

※歯長は同一個体のうち最も長い歯を計測している。なお、歯が遊離している場合はその全長を、歯が台木に装着されている状態で歯基部が実測図にあらわれていない場合は台木上端から歯先端までを計測している。

装着には様々な形態があったと考えられる。

しかし、柄以外の要素である台木と歯と引棒孔の関係性は概ね同じであり、どの例も10本前後の歯をもち、2本の引棒が台木の両端側面に取り付けられるという共通性をもつ。木製馬鋏は古墳時代から古代にかけて、東北から九州まで分布しているが(図5)、それらに顕著な構造的差異は認められず、その形は大きな変化なく民俗事例(河野1994)まで引き継がれているといえるだろう<sup>(4)</sup>。

ただし、こうした共通性の中にも出土馬鋏には地域差が見出せることが指摘されており(田中2011)、本稿ではこの点に注目した分析を進めることとしたい。



※詳細地図はカシミール3Dを用いて作成

図5 出土木製馬鍬の分布

## 2. 木製馬鍬の地域性

### (1) 定量的検討

前述のとおり、田中義昭が馬鍬の形態の地域的差異について着目した検討をおこなっている。田中は、馬鍬の作業能率に関係する要素と考える台木と歯の長さに注目し、関東・東北地域ではこれらが長大な例が多い一方、近畿地方には歯が短小な例が散見されると指摘している（田中 2011）。以下において、これを具体的な数値により比較してみたい。

計測する部位として、馬鍬の台木の全長および歯長を求めることとする。対象資料は、出土層位が古墳時代から奈良時代に属する資料とし、台木の計測にあたっては台木が完形で出土している資料および、長辺が半分以上残存し反転復元可能なものに限ることとする。ただ歯長については、台木から遊離している資料と台木に装着された資料があり、台木に装着されたものは歯基部がみえないこともあり、その場合は台木上端から歯先までの数値を計測する。また歯は形状が細い資料のため、摩耗あるいは欠損、収縮の関係で実際より短くなっている可能性もあると考えられるため、参考値として示しておく（表1）。

まず台木長に着目したい。資料を出土遺跡ごとに①東北・関東、②中部、③近畿、④九州の4地域に分け、横軸に台木長の数値をとって法量分布を示した（図6）。これをみると、東北・関東地方の資料は130 cm以上と明らかに長く、最も長い資料で170 cmを超えている。一方、その他の地域は130 cmより短い資料がほとんどであり、東北・関東地方の馬鍬の特異な状況がうかがえる。また歯長についても、台木の長い地域では50cm前後と長く、台木の短い地域では30cm前後と短い傾向にあることがいえる。

ただし、歯の芯々距離もあわせて検討すると、台木の長さとの間には相関関係がないことが指摘できる（図7）。つまり、台木が長くても歯の芯々距離がその分長くなるということではなく、歯の本数が増えるということを示しているのである。

このように、台木や歯の長さ、歯の本数といった属性は、歯孔芯々距離の規格とは無関係に、地域的な特徴があらわれる要素であるといえる。反対に歯孔芯々距離については、地域性を反映しない属性と捉えることができる。

台木や歯の本数、長さに地域差があらわれる要因は判断が難しい。田中は、福島県大森A遺跡の事例を挙げ、馬鍬の出土層位と同時期にあたる同遺跡の水田跡は小区画水田であり、小畔をつくった後に台木の長い馬鍬を使用することはきわめて困難であると指摘したうえで、大畔区画内を小区画に区分する前に使用した可能性を示唆している（田中 2011）。水田区画の大きさは地域あるいは時期によって差があり、その違いが馬鍬の形態に反映され

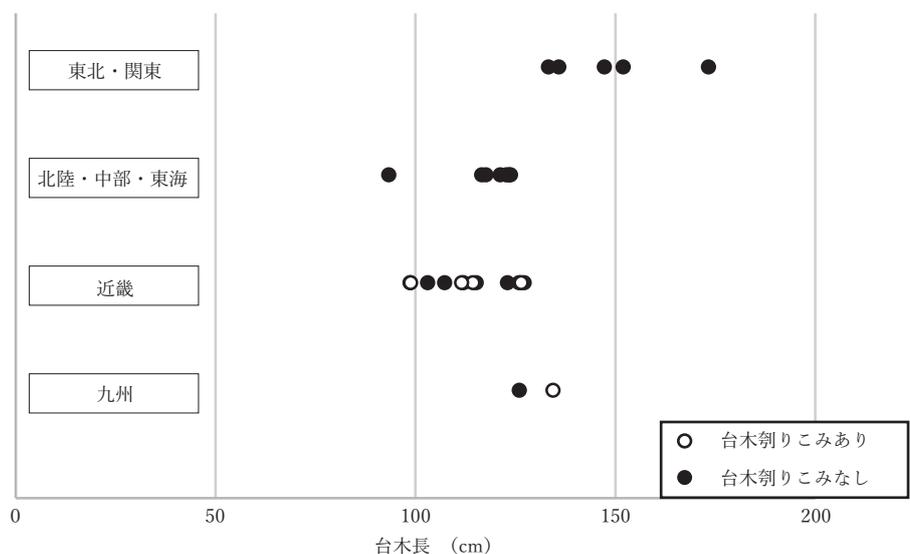


図6 台木長の比較（地域別）

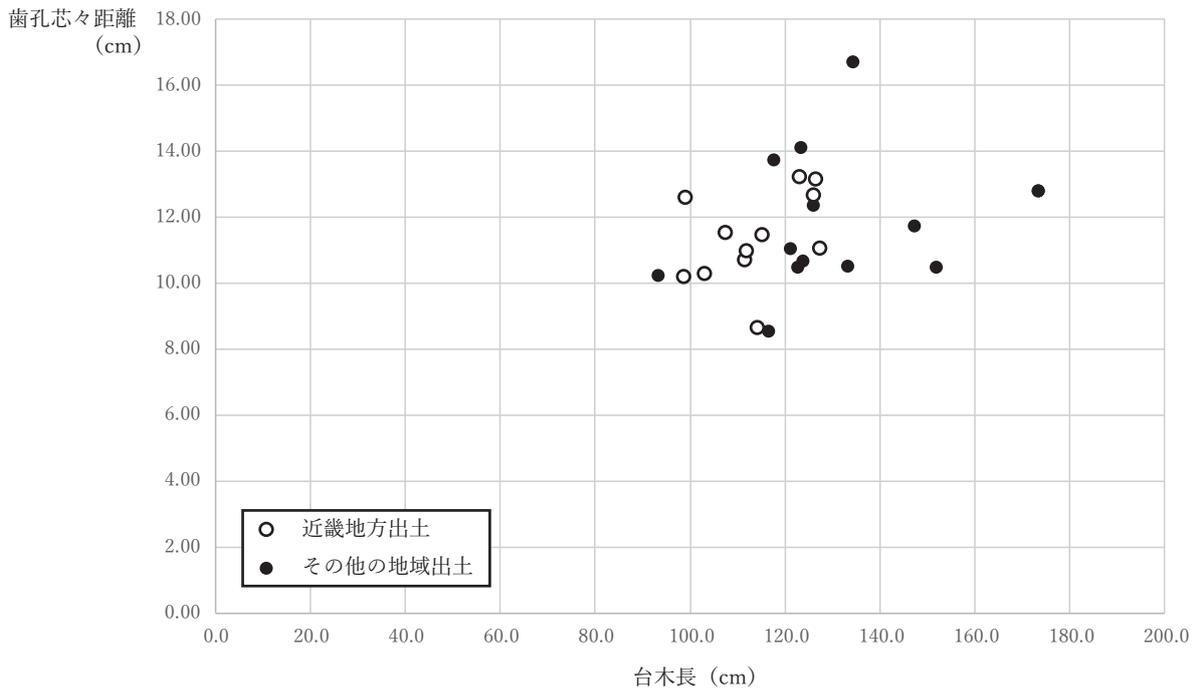


図7 台木長と齒孔芯々距離の関係

ている可能性も考慮すべきだろう。また馬鍬の齒の長さは水田を耕作する深さともつながる要素と考えられ、深耕・浅耕の地域差にも相関するかもしれない。このように馬鍬の形態の地域差は、今後出土遺跡周辺の水田跡や民俗事例とも比較し検討すべき課題といえる。

(2) 形態的特徴の比較

次に、馬鍬の形態を属性ごとに比較してみたい。

先にみた柄孔による分類を地域別にみると、東日本にはB類が多く、西日本はA類とB類が両方みられることがわかる(図8)。例えば大阪府上田部遺跡では、同じ8世紀代の資料でA類とB類の双方がみつまっていることから、西日本において使用用途により両者が使い分けられていた可能性が考えられる<sup>(5)</sup>。

次に台木の形態について確認する。台木の多くは直線的な角材であるが、下辺を浅く削りこむ形状のものが一部に認められる(図9)。この形態の台木は、現在のところ九州地方の1例を除いてすべて近畿地方でのみ出土している点に注意したい(図6)。削りこみが施される理由については、牽引力が伝わる台木両端の引棒孔付近以外の部分を細くすることで軽量化が図られたとも考えられるが、より台木加工を丁寧におこなうという近畿地方に共有された形態的特徴の1つとして捉えておきたい。

地域的な形態の特徴は引棒孔にも認められる。引棒孔の形態には主に方形と円形がある。全体では方形の事例の方が多く、特に滋賀県を中心として近畿地方に円形の引棒孔

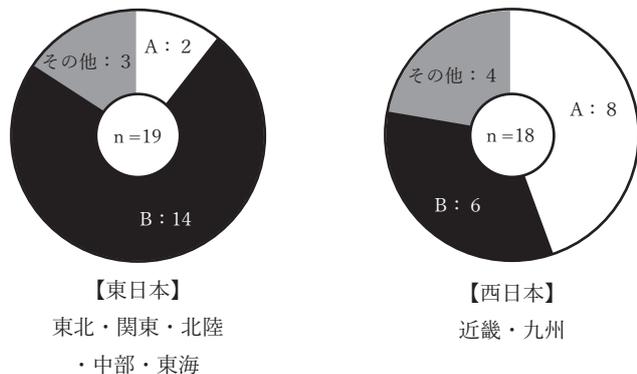


図8 柄孔型式の比較(地域別)

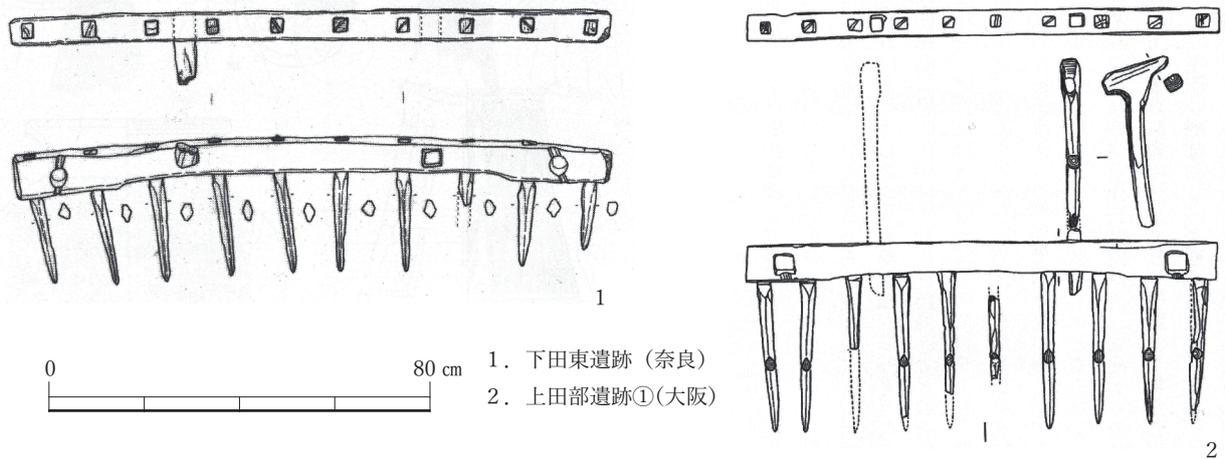


図9 台木に割りこみをもつ例 (1:小島ほか編 2011 2:田中 2011)

の例が集中していることが特筆される。それらの例を観察すると、整った円形に穿孔されており(図4-4・6、図9-1)、方形の孔が摩耗によりいびつになったのではなく意図的に円形に穿孔しているのは明らかである。孔形の違いは、引棒の丸木材加工か角材加工かという木材加工の違いを示しており、技術系統の違いがうかがえる。

### (3) 近畿地方の特徴

以上のように、馬鍬の形態には地域性があらわれる属性がいくつかあることが確認された。そのうち近畿地方の資料について改めて詳しくみてみたい。

台木長の数値については、110cm前後の狭い幅に収まっており(図6)、歯の本数は10本の例が特に多い。さらに、台木長100～120cm、歯孔芯々距離10～12cmの範囲には近畿地方の出土例のみが分布していることも勘案すると(図7)、近畿地方において比較的強い法量的な規格があった可能性を指摘することができる。規格という点では、前述の台木の割りこみもあてはまる。また円形の引棒孔の選択、柄の取り付け位置の違う2種類の馬鍬の使い分けも、近畿地方を中心とした特徴といえるだろう。

田中は古代馬鍬の出土遺跡の性格について、地方官衙的性格を多分に備える典型的な拠点集落からの出土事例が大多数であることを指摘している(田中 2011)。馬鍬の出土状況を確認すると、郡衙や駅家に比定されている遺跡や、墨書土器や木簡、木製祭祀具などが多く出土する遺跡からみつけることがほとんどであり、古代において木製馬鍬の使用は一般的な農村にまでは普及しておらず、一部の官衙的性格をもった集団にのみ導入された農具であったと考えた方がよいだろう。このような限られたネットワークにのみ木製馬鍬の使用が共有されたことが、先にみた構造的差異の少なさの要因ではないだろうか。そして近畿地方の資料が他地域に比べ強い規格を有していることは、馬鍬ひいては牛馬耕の使用・普及が、当該期の先進地域である畿内から発していた証左であると考えられることもできるだろう。

韓半島や大陸における馬鍬は未確認のため予察に留めるが、このような近畿地方の特殊性は、畜力利用技術の伝播元である列島外との関連の中で考察する必要があると考える。つまり、近畿地方に通有の規格や特徴をもつ馬鍬が列島外にあり、それが畿内にもちこまれ、規格が崩れたり系統が淘汰されたりしながら列島内に広がったという可能性があるのかもしれない。

## おわりに—今後の展望—

木製品という性質上、木製馬鍬の分布の偏りから牛馬耕の普及の程度を論じることは難しい。しかし本稿で馬鍬自体の構造・形態を属性ごとに確認することにより、地域的な共通性と差異の傾向がみえてきた。資料数の寡少さは否めないが、日本列島にもたらされた牛馬耕の導入・普及過程を論じるうえで出土馬鍬の型式学的な検討は不可欠である。

本稿では地域差を取り上げたが、時期差を型式学的に捉えることも今後の展望として示しておきたい。これまで馬鍬の年代は出土層位の相伴遺物から比定されてきた<sup>(6)</sup>。ただ、出土状況を個々に検討すると流路や包含層からの出土事例も多くあり、年代決定の根拠が層位のみというのは危うい側面があるといえる。出土馬鍬の年代観は日本列島における牛馬耕の開始という重要な論点に直接つながる問題であり、新出資料も踏まえつつ時期的な型式差の傾向を確認したうえで、資料の年代を決める必要があるといえよう。

### 【謝辞】

本稿は2024年度に大阪大学大学院人文学研究科に提出した修士論文の一部を大幅に再編したものである。修士論文執筆にあたっては、同大学考古学研究室の福永伸哉先生、高橋照彦先生、上田直弥先生、木村理先生に丁寧なご指導を賜りました。さらに、下記の方々には文献の提供や有益なご教示を賜り、また資料調査において便宜を図っていただきました。末筆ながらここに記して感謝の意を表します（五十音順、敬称略）。

浅見貴子 井口智博 岩木智絵 河野通明 篠田泰輔 鈴木京太郎 竹原伸次 富樫孝志 村松直樹

大阪府教育庁文化財調査事務所 行田市郷土博物館 静岡県埋蔵文化財センター 浜松市地域遺産センター 浜松市博物館 藤枝市郷土博物館・文学館

### 【註】

- (1) 馬鍬の部品が単独で出土する原因として、木製品という遺存しにくい性質に加え、単純なつくりの部品を解体して別の部材に再利用している可能性が考えられる。
- (2) 表1の歯孔芯々距離の数値は、実測図上でそれぞれ隣り合う歯孔同士の芯々距離を計測し、その平均値を示した。
- (3) 図3中の柄の装着方法の復元図については、柄が台木に着いたままの状態でも良好に残存している事例が少ないため根拠となる資料に制約がある。富山県稲積川口遺跡（図4-3）や愛知県勝川遺跡（図4-2）の事例ではB類の柄が台木に装着された状態で出土したが、柄がやや上方に傾いているため、復元図でも上向きの柄を想定した。また、鳥居形の柄は鳥根県西川津遺跡で出土しているが、台木や歯は出土していないため正確には馬鍬の事例であると断定できず、復元図の柄に持ち手の横棒が取り付けられていたかは不明である。
- (4) なお、形態的な変化として馬鍬の歯が8世紀代から9世紀代にかけて木製から鉄製に入れ替わったことが指摘されている（松井2004）。しかし民俗事例では木製の歯が主体であるため、近世から近現代のいずれかの段階において形態の再転換があったと考えられる。
- (5) 柄孔のA類とB類の用途にどのような差があるかは今後の検討課題であるが、民俗事例はすべてA類である点は注意したい。
- (6) 松井は、滋賀県石田遺跡例①の年代が4世紀末～5世紀初頭に比定され、これがU字型鍬・鋤先の出現と一致することから、新たな農具や馬とともにこの時期に朝鮮半島からもたらされたと推定し、その後6世紀以降出土例が増加することを指摘している（松井2004）。しかし2000年代以降、古墳時代前期の年代が与えられる木製馬鍬が報告されるようになり、このことから乗馬の風習に先んじた農耕馬の使用があった可能性も指摘されるようになった。ただし、日本における馬具の出土が5世紀初めごろ、馬匹生産の開始が古墳時代中期以降と考えられることに鑑みれば、それに先立った畜力利用の可能性は低いといえるだろう。

【参考文献・報告書】

- 家田淳一 2006「木器二題－踏み鋤と馬鍬の資料紹介」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第30集 佐賀県立博物館・美術館
- 池田正男・村上泰樹編 1990『板井寺ヶ谷遺跡－縄文時代～中世の調査－』兵庫県文化財調査報告書第96－2冊 兵庫県教育委員会
- 井尻 格編 2004『小路大町遺跡 第4次調査 発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 岩木智絵 2005『仮宿沢渡古墳群・仮宿沢渡遺跡・仮宿堤ノ坪遺跡・仮宿堤ノ坪古墳』藤枝市教育委員会
- 及川 司・鈴木良孝編 1988『大谷川（稲妻地区）』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第13集 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 小方泰宏編 1992『カキ遺跡』木製品編 北九州市埋蔵文化財調査報告書第116集 北九州市教育文化事業団
- 小川弦太編 2006『市辺遺跡』兵庫県文化財調査報告第304冊 兵庫県教育委員会
- 小野木学編 2005『柿田遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第92集 岐阜県教育文化財団文化財保護センター
- 加古千恵子・平田博幸・岸本一宏編 1990『山垣遺跡』兵庫県文化財調査報告書第75冊 兵庫県教育委員会
- 加藤裕介編 2009『稲積川口遺跡』氷見市埋蔵文化財調査報告第52冊 氷見市教育委員会
- 鎌木義昌・亀田修一 1986「出合遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度 兵庫県教育委員会
- 河北秀実編 2009『橋垣内遺跡（県道A～C地区）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- 工楽善通 1987「古代の水田跡とムラ」『稲のアジア史』3 小学館
- 黒須亜希子 2008「近畿」『季刊考古学』104号 雄山閣
- 河野通明 1994『日本農耕具史の基礎的研究』和泉書院
- 小島靖彦・辰巳陽一編 2011『下田東遺跡』香芝市文化財調査報告書第12集 香芝市教育委員会
- 斎藤 忠・向坂鋼二・川江秀孝・辰巳 均 1978『伊場遺跡遺物編』1 浜松市教育委員会
- 佐久間光平 2000『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第184集 宮城県教育委員会
- 佐藤洋一郎・及川 司・藤巻哲男・笠井信孝編 1997『曲金北遺跡』遺物・考察編 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第92集 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 柴田 睦編 2002『藤守遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第131集 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 杉浦隆支・西 邦和編 2002『西浦遺跡（2次）石田遺跡（12次・13次・14次・15次・16次）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第53集 能登川町教育委員会
- 鈴木敏則編 2002『伊場遺跡遺物編』8 木製品Ⅱ・金属器・骨角器 浜松市教育委員会
- 高橋健太郎・楠部博世・渡辺英美子編 2011『亀首遺跡』豊田市埋蔵文化財調査報告書第46集 豊田市教育委員会
- 高橋健太郎 2011「第5章 まとめ」『亀首遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第46集 豊田市教育委員会
- 田中義昭 2011「古代馬杷一試考」『弥生時代集落址の研究』新泉社
- 都出比呂志 1989「農業発展の諸段階」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 鶴田典昭・河西克造編 2000『川田条里遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第47 長野県教育委員会
- 手塚 孝・村山正市編 1986『上浅川』米沢市埋蔵文化財調査報告書第15集 米沢市教育委員会
- 野田芳正編 1995「今池遺跡発掘調査概要報告－堺市新堀町1丁IMI6地点－」『堺市文化財調査概要報告』第52冊 堺市教育委員会
- 樋上 昇編 1992『勝川遺跡』Ⅳ 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集 愛知県埋蔵文化財センター
- 松井和幸 2004「馬鍬の起源と変遷」『考古学研究』51-1 考古学研究会
- 水村直人編 2017『大桷遺跡』Ⅰ 鳥取県教育委員会
- 宮崎幹也・岡本武憲編 1989『堂田・市子遺跡』（2） 滋賀県教育委員会
- 村上義直編 2011『小谷地遺跡』秋田県文化財報告書第472集 秋田県教育委員会
- 山本真央編 1996『岳美遺跡』Ⅱ 遺物編 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第75集 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 横田 明・山田隆一編 2004『木の本遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2003-2 大阪府教育委員会

講演録

## 大阪に渡来した竜

春成秀爾

### はじめに

私が弥生文化博物館から与えられたテーマ名は「大阪に渡来した龍」でした。そのとき突然、「りゅう」の字について、「龍」を使ってよいのか、それとも「竜」にすべきか、考えこんでしまいました。私は過去に書いた論文では「龍」を使っています。芥川龍之介、鳥居龍蔵、坂本龍馬はみな「龍」で、龍の字は重厚でどこか格調高く感じられる一方、竜の字は略字のようで軽く見えていたからです。弥生文化博物館も龍を使っています。ところが、常用漢字は竜、新聞・雑誌で現在使っているのも竜です。そうすると、龍を使うのであれば、その理由を説明しなければなりません。そこで、私は龍と竜の字の起源を調べて、「竜」を使うしかないと結論に達しましたので、今日から「竜」を使うことにしました。

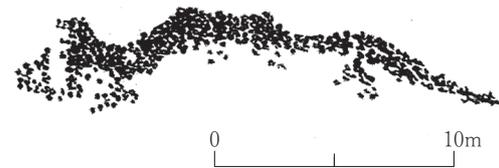
### 1. 中国新石器時代の竜

いま問題にしようとしている竜は、中国で生まれた竜が日本にやってくるわけで、テーマ名は、「中国から大阪に渡来した竜」ということになります。そこで最初に中国の竜について瞥見しておくことにします(図1)。

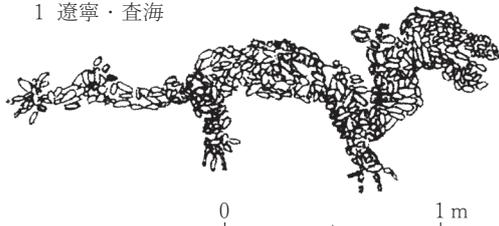
中国の竜の歴史は非常に古く、新石器時代にすでに竜が姿をあらわしています。

1は、内蒙古の北部、乾燥地帯の遼寧省の査海遺跡で発掘された竜の造形です。角礫を積んで竜の形にした長さが19mに達する大きなものです。私は今から十数年前に見に行ったことがあり、案内者の好意で竜の脚元まで行くことができました。角張った石を置いた竜の形が崩れないまま土に埋もれてしまった稀有な例です。左側に頭、その少し下の方に前脚、そして後脚も長い尾もあります。頭部付近は後に崩れてはつきりしません。これが約8000年前、中国最古の「石堆龍」の姿です。私は日本風に「積石竜」と呼んでいます。

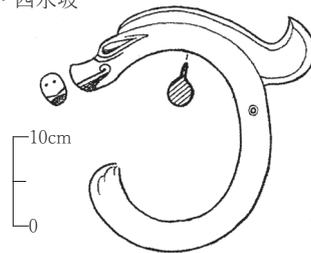
2は、仰韶文化、約6000年前の例で、カラス貝(ニ枚貝)の殻を竜の形に地面に張り付けた「蚌塑龍」すなわち「貝殻竜」が河南省の西水坡遺跡で見つかっています。これも前脚、後脚、尾がはっきりしています。尾の先端には



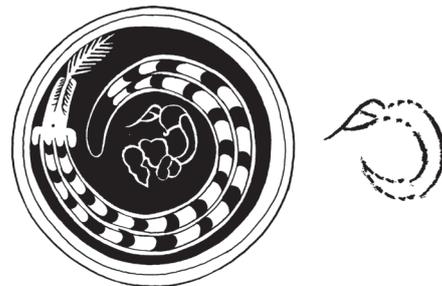
1 遼寧・査海



2 河南・西水坡



3 遼寧・三星他拉



4 山西・陶寺



5 河南・殷墟婦好墓



6 河南・殷墟

図1 中国新石器時代から商代の竜

星の形があります。口を開け、舌が出ています。体長175 cm、ワニを連想させるこの形も竜でしかありません。ここでは、墓の中央に人の遺体、その東側に竜、西側に虎の造形があり、竜と虎が死者を守るという図像が中国には早い時期に登場しており、後世の人たちが考える竜の概念に近い考えがあったことがわかります。

3は、約6000～5000年前の紅山文化に属する内蒙古の三星他拉遺跡から見つかった竜の玉製品です。胴部から尾にかけてぐるりと曲げています。脚をもたず蛇と同じような形ですが、蛇と違うのは、背中にたてがみを持っていることです。中国では、頭部を猪とみて「猪龍」とも呼んでいますが、頭部は熊をかたどっているという説もあります。

4は、山西省の陶寺遺跡から発掘された竜山文化、約4000年前の盤形の土器に描いてある竜の絵です。土器の内面に脚のない動物がぐるりとめぐるっています。口から奇妙な形の舌が出ていますが、光を発しているのか、火か水を吹いているのか、解釈しかねる樹枝状の表現があります。頭の左右には鰓でも耳でも前脚でもない表現があります。この竜は蛇には見えず、どこか水棲の動物のように見えます。ところが、この土器の中央にも小さな図像があります。よく見ると、これは雲の合間から竜の頭部と胴の一部が覗いています。これを天にいる竜だとすると、この土器には、天にいる竜と水の中にいる竜を描いてあることになり、天と地の間を往還する竜の姿を描いた、まことに象徴的な図像のように見えます。なお、この土器の竜は、3と同様、脚がありません。竜の姿形にとって脚は必須の条件ではなかったようです。

5と6は、河南省の殷墟出土の青銅器に鑄出された竜の姿形です。婦好墓の例は、西水坡の貝殻竜の形をよくのこしています。6は背部や腹部に棘がついています。



図2 竜と龍の文字

## 2. 竜の文字

ここで中国の「りゅう」の字源を見ていくことにします(図2)。

商代(殷代、紀元前1300年～1000年前)、亀の甲羅や獣骨に文字を書いた甲骨文字に「りゅう」の文字があります(1～5)。1は、脚のない胴をぐるりと曲げ、逆三角形の頭をもち、口を大きく開いています。全体の形は、内蒙古の紅山文化の玉竜の形によく似ています。2は、提灯を想わせる形ですが、口を大きく開いているように見えます。4は頭が「干」の形に変わり、前脚のような表現もあります。胴はひじょうに長いものです。この形が少しずつ変化し、最初のうちは脚がありませんが、やがて前脚をもつ字が現れます。最古の「りゅう」の文字の形が、さきほどの陶寺遺跡の土器の中央に描いてある竜の図像とほとんど同じであるのは興味深いことです。

次は青銅器にあらわした金文の竜です(6～11)。6は、甲骨文の1とほとんど同じで、2本線による体をぐるりと曲げて脚はなく、頭がついています。かすかに角のような表現があります。これはその後に変化を遂げて、7では体を二本の線ではっきり書いていたのが、8では一本線にかわっています。胴と尾がありますが、4と同じく前脚のような表現があります。9はさらに変化しています。10は、胴付近の表現が尾と胴とに分かれています。11では、胴が少し変化しています。尾が反対向きになり、上に頭の表現があります。これが金文の「りゅう」の文字の歴史です。甲骨文字と同様、胴と尾の表現は明らかですが、脚は必ずしもはっきりしません。

時代はくだって、秦～前漢代、紀元前3～1世紀頃の竹簡や木簡に書いた「りゅう」の文字を見ていきます(12～16)。12と13は金文から来ていることがよくわかります。体の線があり、そして右側に何か出たあと変化しており、これを辿っていくことができます。14は後漢代に作成された『説文解字』に出てくる15の「龍」に近づき、16で「龍」の旧字が完成します。中国では現在、「龍」を簡略化した17の簡体字を使っています。頭と胴をあらわしていた偏を除き、旁を中心にして、尾を右下に伸ばし、上の部分の線を拾ってつくったものです。

では、日本はどうかというと、最近、新聞・テレビの種になった大阪の金龍ラーメンは「龍」の字を使っています。ところが、国語辞典、漢字辞典、あるいは白川静先生の『字統』には、常用漢字として「竜」の字を最初に置いて、「龍」は「旧字形」として次に置いています。個人名、固有名詞のばあいは「龍」を使ってよいことに

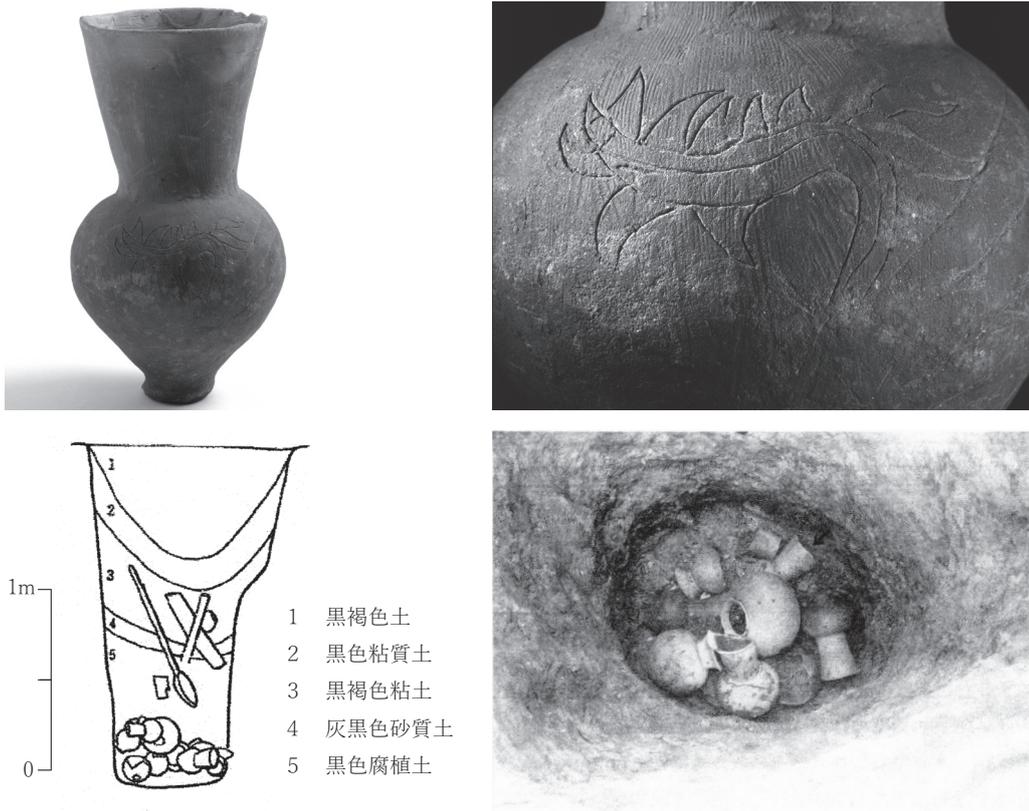


図3 池上遺跡の竜を描いた土器と出土した井戸

なっていますので、芥川龍之介さんはそのままですが、地名の「廣島」はいま「広島」、川の「天龍川」は「天竜川」と書きます。普通に使うのであれば「竜」でないといけません。福井県や兵庫県で中世代の恐竜の化石骨の発見がありますが、「恐龍」の文字を使うことはありません。それから、藤井聡太さんは、この前の竜王戦で藤井竜王になりました。新聞を見ると、すべて「竜王」です。しかし、戦前は、すべて「龍」でした。当用漢字（いまは常用漢字）は、戦後の1946年に内閣告示として公布され、そこで「竜」を使うことが決められています。日本国民は、いまは「竜」を使うほかありません。「龍」を使うにはそれなりの根拠が必要です。

では、「竜」は日本で生まれた漢字かという、そうではありません。中国の宋代、11世紀に書かれた『集韻』に「りゅう」は古くは「竜」に作っていたと書いてあります。しかし、春秋・秦・漢代以降に「竜」を使っている例は、隋代にわずかにあるくらいで、漢代の鏡の銘文はすべて「龍」です。では「竜」の字はどこまで遡るのか。「竜」の字は、金文に初めて近いものが出ています。11世紀の人はるか以前の「竜」の字をどこかで知っていたのです。白川静先生は、「竜」は常用漢字、「龍」は旧字形、竜は頭に辛字形の冠飾をつけた蛇身の獣の形で、竜は龍の初文、竜が古字で、龍はその繁字と説明してい

ます。繁字というのは繁雑な文字という意味です。「辛字形の冠飾」というのは、そうではなく、角を生やした頭部が変形した形の可能性があるように私は思いますが、いずれにせよ「りゅう」の字をさかのぼっていくと、「竜」のほうが甲骨文や金文の形にはるかに近いことは明らかで、現在の「竜」の字は、解体すると、「立」は頭、「甲」の中軸線の下端を右に曲げた「し」が胴から尾、左の「E」と右の「ヨ」が四脚をあらわしているとみることができます。

私は自分の不勉強を反省しながら、これからは「竜」を使うことにします。白川先生の著書を開くと、文字一つとっても、奥の深い歴史があり、いろいろな問題があることがよくわかります。慣れ親しんでいるからこれだよというのではなく、歴史の中で何が正統であるかを明らかにしていくことが学問だと思います。

### 3. 池上遺跡の竜

それでは「大阪に渡来した竜」にいきましょう。弥生文化博物館で竜について講演する理由は、和泉市の池上・曾根遺跡（以下、池上遺跡）で見つかった1点の壺の存在にあります（図3）。この土器は1970年に発掘されたもので、現在は弥生博の館藏品になり、常時展示してあります。

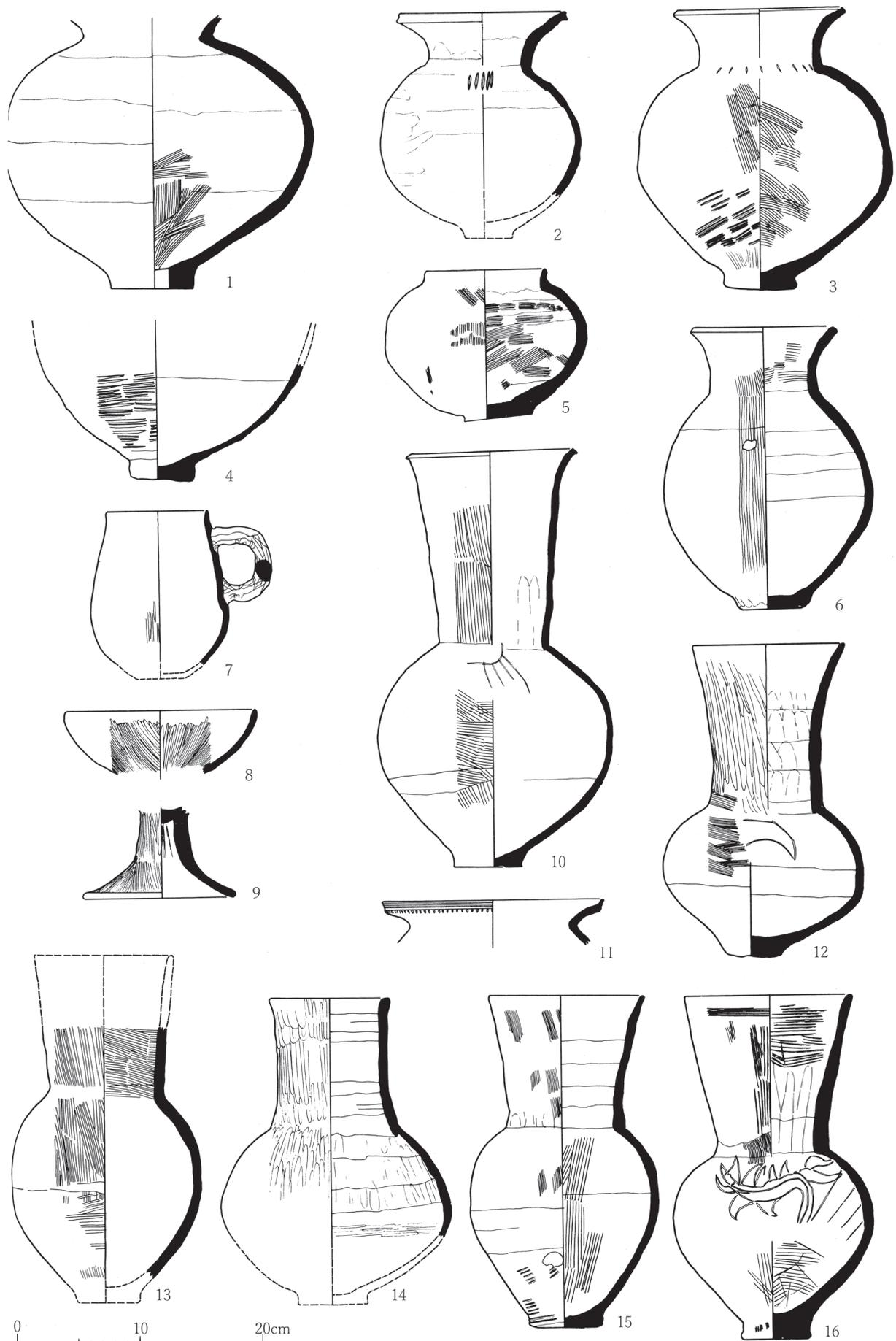


図4 池上遺跡5号井戸出土の土器

池上遺跡では弥生時代後期中頃、紀元後1世紀後半頃の壺11個のほか高坏、ジョッキ形など大量の土器が井戸に投げ込まれ、その底に溜まっているのが見つかりました(図3、図4)。そのなかにあった高さ28.4cmの壺(図4-16)を見て、調査に関係していた金関恕さんや佐原真さんはただちに竜の絵と認めました。竜を描いた土器は、少し暗い灰褐色をしており、展示してある状態では竜を描いてあることはわかりにくく、見栄えがよくないのは残念です。しかし、今にいたるまで、竜を描いた土器のなかではこれに優るものは見つかりません。「竜が渡来した」といっても、竜は実在の動物ではありませんので、竜の知識、竜のイメージを人が運んできたわけですから、誰が竜の情報を大阪にもたらしたのか、それを考える材料がこの土器に描かれた竜です。

あらためて、池上の竜を観察すると、身体をS字形にくねらせた動物であることは誰にでもわかります。しかし、胴部の上下についているヒレ状の付属物(以下、ヒレ)は解釈が必要です。私は次のように見ます。胴部の下で最初のヒレは下顎で口を開いていることを示し、次の2つのヒレは前脚です。胴部の上で最初のヒレは角ですが、その次のヒレと合わせて2本の角を左右対称形に描いているようにも見えます。その次の3つのヒレは鬣または背棘板、その後ろの2つの尾状のものが後脚です。そして、角と下顎の線を描くときにその延長線を描いてそれによって目を表しています。体の中心に一本の線があるのも注意すべきことで、これは脊椎骨をあらわしているのでしょう。脊椎骨は表面から見えませんが、原始絵画ではレントゲン画法、透視画といって、見えないものも描きます。

同-10は、右を向いた鹿です。胴を1線で、前脚2本、後脚2本も1線であらわし、頭はありませんが、鹿です。同-12は、サメのヒレのようなものだけを描いたものです。これらを見ると、弥生人の絵画を描く感覚がよくわかります。

このころ、すなわち紀元後1世紀の後漢代の中国の人は竜をどのように考えていたのでしょうか(図5)。1は、岩壁に描いた2頭の竜の絵です。親と子どもの竜でしょう。2字形の胴部に獣類の四脚をもち、胴部は鱗でおおわれています。頭部に長い角、口元から長いドジョウ髭がでています。2は、画像石に彫刻した竜です。体をS字形にくねらせ、尾があります。頭部に角、口元から長い髭がでているのは、1と同じです。背中の後ろよりの3つのトゲは棘板でしょう。前脚と後脚があり、体には脊椎と鱗の表現があります。四脚は獣類の脚で、しっか

りした丈夫そうな脚には指の表現まであります。頭があり角が2本伸びています。

3の7世紀の薬師寺本尊の台座や、4の8世紀初めの奈良県高松塚古墳の壁画にも中国直系の竜の表現があります。薬師寺の例は獲物を追い詰めるような竜を立体的にあらわした迫力を感じさせる傑作です。

高松塚の例は虎と対に描いてあり、虎と竜を比べると、頭以外の表現はよく似ており、竜と虎の区別は困難です。竜は人間が作り上げた想像上の動物ですから、やはり他の動物の図像の影響を受けます。何をモデルにして竜の形を作るかというときに、これを描いた人は虎の図像を気持ちで描いているからよく似ています。角は鹿の角をモデルにして描いています。口を大きく開けて舌を出し



1 陝西・成県李翁墓



2 四川・石羊上村



3 奈良・薬師寺本尊台座



4 奈良・高松塚古墳

図5 中国古代と日本古代の竜

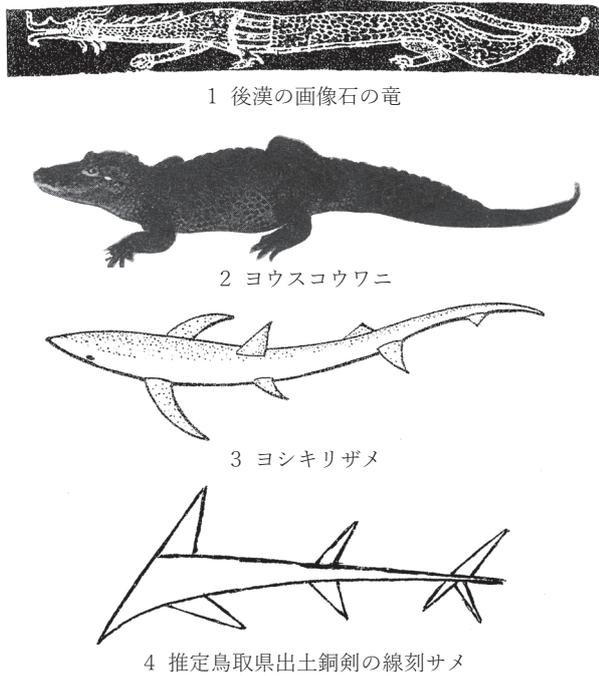


図6 竜とワニ・サメ

ています。前脚を見ると、肉食獣の脚です。

こうしてみると、池上の土器に描かれた竜は、中国や古代日本の竜と比較すると、だいぶ違って、脚を魚のヒレのように変えているのが大きな特徴です。

ここで池上の竜が生まれるまでのプロセスを考えてみます(図6)。1は、後漢代、紀元後2世紀の画像石の竜です。前脚、後脚、尾が出ています。先ほどの竜のイメージとはだいぶ違います。これに一番近い動物は、ワニでしょう。中国では揚子江に2のようなヨウスコウワニが棲んでいます。全長2mほどで大きくありません。新石器時代から商周代に河南省や山東省ではワニを捕まえていた証拠にその甲羅が出ています。かつては中国の北の方までワニが棲んでいたのです。画像石の竜の四脚の表現はワニそっくりです。尾が長いのも似ていますが、ワニのばあいは尾はもっと太いです。頭もよく似ています。

ところが、池上の竜は、四脚が魚のヒレ状になっています。中国の竜をモデルにしながら、日本風にアレンジするとき、水の中に棲む竜というイメージをもって、陸獣の脚を魚類のヒレ状に変えたのでしょうか。そのさい、頭の中にあっただのは、鋭いヒレをもっている3のサメです。サメを確かに見ている証拠に、高知県、徳島県で発掘された弥生土器や、4の推定鳥取県出土の銅剣にはサメの絵を描いてあります。ヒレの表現は竜に似ています。ワニをモデルにしながら、ワニの脚をサメのヒレ状に変えたのが池上の竜というのが私の解釈です。

査海遺跡の竜は全長19mもありました。竜は大きいとなぜ考えたのでしょうか。中国の北方、砂漠地帯は中生代の恐竜の化石骨の産地として早くから知られていました。土中に埋まっていた化石骨が、表面の土が風で飛ばされて露出しているのです。恐竜の大腿骨などは太く長いですから、とんでもなく巨大な動物がいることを古代の人たちは考えていたようです。そこで、ワニに恐竜の骨のイメージを与えると、長大な竜が生まれます。中国では陸棲の竜という基本的なイメージは、こうしてできあがりました。

池上の竜が見つかった当時、研究者がそのモデルとして考えたのは、中国からもたらされた新~後漢代の鏡に描いてある竜の図像でした(図7)。1は、茨木市紫金山古墳出土の方格規矩四神鏡に描いてある竜の図像で、前脚で太陽を抱えた竜ですが、池上の竜にはまったく似ていません。鏡の竜をモデルにしたとすると、一番近いのは6の佐賀県の二塚山遺跡から出土した獣帯鏡に描いてある竜です。尾、右後脚があります。池上の図像では右上の部分に相当します。左の後脚は、池上の図像では尾になっています。前脚の位置は同じです。そして、口を開けており、角のようなものも表現されています。鏡の図像を参考にすると、この鏡が第一候補かと思いますが、この竜は長さが2cmくらいしかありません。それをじっくり見て、池上の竜のイメージをつくるようなことがあったのか、疑問なしとします。

竜の具体的な形を伝える時に、口だけで教えるのはき

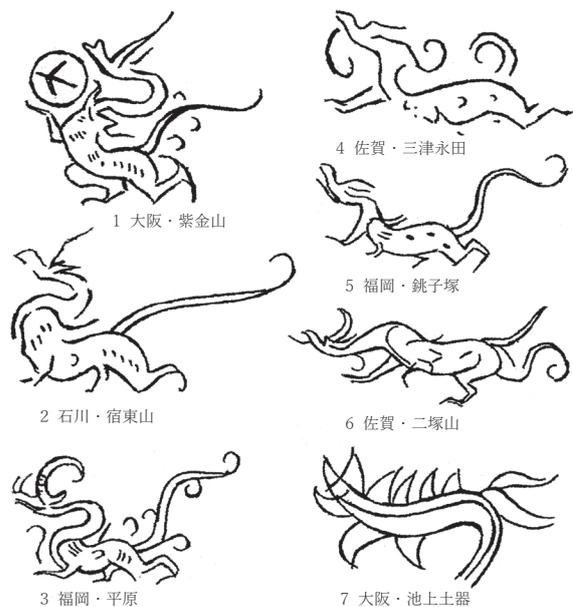
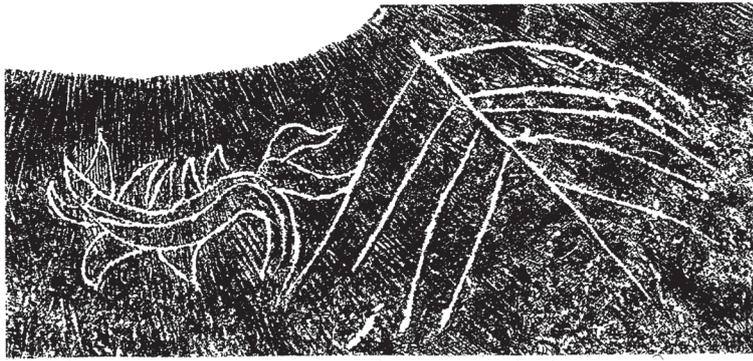


図7 中国鏡の竜



1 池上土器の竜と樹状図形

図8 池上の竜と落雷



2 東京・新宿の落雷

わめて難しいことです。竜は身体をくねらせ、前脚と後脚をもち、尾は長いといった程度のことを耳で聴いて竜を描けるものではありません。何らかの具体的な図像情報が伝えられて、池上の竜が誕生したことはまちがいないと思いますが、弥生人は陸棲の竜を水棲の竜に変えていますので、池上の竜のモデルが何であったのかの問題はこれからも追究をつづけていきたいものです。

ところで、池上の竜の図像で、注意されるのは竜の右横に木の枝を逆さにしたような不思議な図像があることです(図8)。両者をセットとしてとらえるならば、これは雷が落ちた時の稲妻の図像だと私には見えます。東京の新宿に雷が落ちた時の写真を示しましたが、稲妻には、いろいろなパターンがありますが、池上の図像によく似ているのはこの枝状電光です。雷が落ちる時に同時に大雨が降ります。これらの図像を、雷と雨がセットになって天から降りてくる情景と見ると、後脚の一部が「電光」にかかっているのは、雷が落ちる時に竜がいっしょに降りてきた、竜が雷雨と共に地上に降りてきた降竜の図像を池上の土器はもっともわかりやすい形で表現しているといつてよいでしょう。弥生土器の竜の後ろに逆V字形の図像を描いた例は、神戸市玉津田中遺跡で見つかった甕にも見られます。また、愛媛県松山市若草町遺跡の壺に描いてある図像(図12-11)も、降雨をもたらす竜を二様にあらわしていると解釈することができる、興味深いものです。

池上の竜を描いた土器の価値はきわめて高いものがありますから、国の重要文化財に指定したいところです。胎土の関係で見栄えが悪いのは惜しいですが、それもまた、この土器の製作地を推定するうえで、意味のあることですから、その点は目をつぶるほかありません。

#### 4. 大阪の弥生土器の竜

「大阪に渡来した竜」が演題ですので、大阪で見つかった弥生土器に竜の図像をほぼ全点図示しました(図9)。

1はすでに述べた土器ですが、不思議なことに、底の部分が磨滅して斜めになっているので、水平な面の上におくとゴロンとひっくり返りそうになります。このようなことは普通ありませんので、この土器は、何回も使ったあとに井戸の中に投入したことを示唆しているのかもしれない。

2も池上遺跡の例で、これを竜だと主張するのは難しいですが、消去法で竜と推定しています。絵は上手な人もいれば、そうでない人もいます。竜の情報を教えてもらう時に、十分に理解できなかったのか、竜の認識がややふやのようです。しかし、その目で見ると、右向きの竜で、右上に頭のような図像があります。体をくねらせて、前脚と後脚を下にまとめて描いているようにも見えます。別の図像が重なっている可能性もあります。

3の池上例は、ヒレ一つだけで竜というのは私くらいのものでしょうか。この土器も、底部の中心点から上に垂線をのばすと口縁部の中心から外れる、ひずんだ作りになっています。土器の内側をみると、粘土紐を積み上げていますが、その継ぎ目がはっきり見え、調整が不十分です。口縁端は放物線を描くように丸くなっており、端面がありません。この土器も作りはうまくありませんが、図像があるのは1と同じです。これらの例は、土器作りとしては手抜きしたというよりも、土器作りに習熟していない者の知識と技量で精一杯作ったというのが真相でしょう。

6の東大阪市西ノ辻遺跡の例は、これを竜と言うと、

大丈夫ですかと言いたくなりますが、胴が縦にあって、脚の表現があります。右上に小さなV字形を描いてあり、図像を簡略化してもこれだけは落とせなかったこととなります。

7は藤井寺市船橋遺跡から発掘された土器で、池上例の次に位置付けることができる例です。先ほど、ヒレだけで竜だと言っていますが、8の八尾市恩智、9の船橋、3の池上、10の船橋の例は、竜の図像が変化していく過程を示していると考えられます。胴、前脚、後脚にしばって描いていますが、8などは見事な図像だと思います。これを一本の線で描くと9になります。そしてもっとも簡略化すると10になりますが、さすがにこれも竜だと主張するのは少し勇気が要ります。まあ、こういうことも考えられるというくらいを含みを持たせると、これも竜ということです。

11の八尾市八尾南遺跡の竜は変わっています。上にも下にもいるように見えますが、両者はつながっています。右側に頭があり、角がその上にあり、上顎は下をむいており、かなり変形しています。同じような図像が左側にもありますから、これは2頭の竜が後ろでくっついているとみるならば、雄と雌の2頭の竜が交わっている交竜の図と解釈できます。交竜の図像は中国にたくさん例がありますので、八尾南の絵は弥生風ですが、その起源は中国にあると思わざるをえません。12も、八尾南の例です。胴があって上下に前脚と後脚でしょうか、中軸線が入って綾杉文のように描いていますので、脊椎骨と鱗を表そうとしているのでしょうか。不思議なことにこの上に頸は存在しているにも関わらず途中を描いていません。何か深い意味が隠されているのかもしれませんが。この土器の反対側には脚のようなものが出ています。頭を隠していますが、脚もありますので、消去法でいくと、これも竜なのでしょう。

それから、14は大阪市瓜破遺跡の赤彩の竜の例です。

15の東大阪市亀田遺跡の例は残りが悪いですが、壺の頸部に竜の後半身がみえます。注目すべき点は、口縁端部に横方向に沈線が入っていますが、平行線をびしりと描くべきところを情けない描き方をしていることです。この土器の作者は、こういう点に無頓着、あるいは不慣れなように見えます。

17～22は、高槻市古曾部・芝谷遺跡で発掘された小さな破片ばかりです。池上遺跡の土器よりも古く弥生後期初めの土器に描いてある絵で、現在知られている日本最古の竜の図像です。これも、脚の表現がやはりヒレ状になっていますから、弥生土器の竜は最初から水棲動物

と認識されていたこととなります。頭には大きな目、ヒレの形をした角があって頸は長い。口は開けている。胴の形は他の小破片を参考にして復元してみると図12-1のようになり、池上の竜とは系譜の違いを思わせませす。

## 5. 日本列島の竜の系譜

次に、竜の絵を描いている土器の分布を見ていきます(図10)。竜の図像は、東は静岡県、南は鹿児島県の範囲から見つかっており、さまざまの竜がいることがわかります。

6の宮崎県下那珂の竜は、鳥とされていますが、鳥でなくて竜だと思います。竜は現実に存在しない動物であるために、耳で聞く、あるいは土器の図を見て、次の人がまた描くというためにいろんな変異が生まれます。10を教えてもらっても10全部を覚えることは難しい。10のうち6が頭に残る人、3が頭に残る人、それによっていろいろな図像が出てきます。要領の良い人がいて、一番大事なところはここだと、しっかり頭に入れて描いたのが例えば26の恩智の竜です。34の六大bやcなどは手抜きなのか、それとも竜は体を曲げているという情報しか頭になく、このような竜になってしまったのか、一覧すると、29の上ノ山のような複雑怪奇な竜を描いている例もあります。

池上遺跡の竜を出発点にして、それがどのように崩れていくか、そしてつぎにつながっていったかを示しました(図11)。最初が池上の竜で、そのあとの線を活かしていくかによって、さまざまの竜が生まれます。恩智の竜からヒレだけの池上cの竜になって弧線1本の船橋cの竜が変わっていきます。それから、東奈良の竜から角江の竜に変わり、最後に六大aの竜になっています。玉津田中の竜は東奈良の竜に由来していますが、後ろにV字形を描いています。池上の樹状図形の簡略表現でしょうか。船橋aの竜は、池上aの竜から目の部分を強調して目を頭に変えています。亀田の竜は船橋aの背中の棘と後脚を引き継いでいます。こういう例を基にして、九州南端の宮崎に伝わったときは、下那珂の鳥のような竜に変わっています。竜は天にあり、天から降りてくるというイメージをもっていたことから、鳥に近くなってしまったのでしょうか。

このように日本発見の竜の図像は、いくつかの系統にわかれますが、ほとんどの例がどれかの系統に属するというのが、これまでの私の研究結果です。その主要な系統の出発点の一つになったのが、池上遺跡の竜の図像で

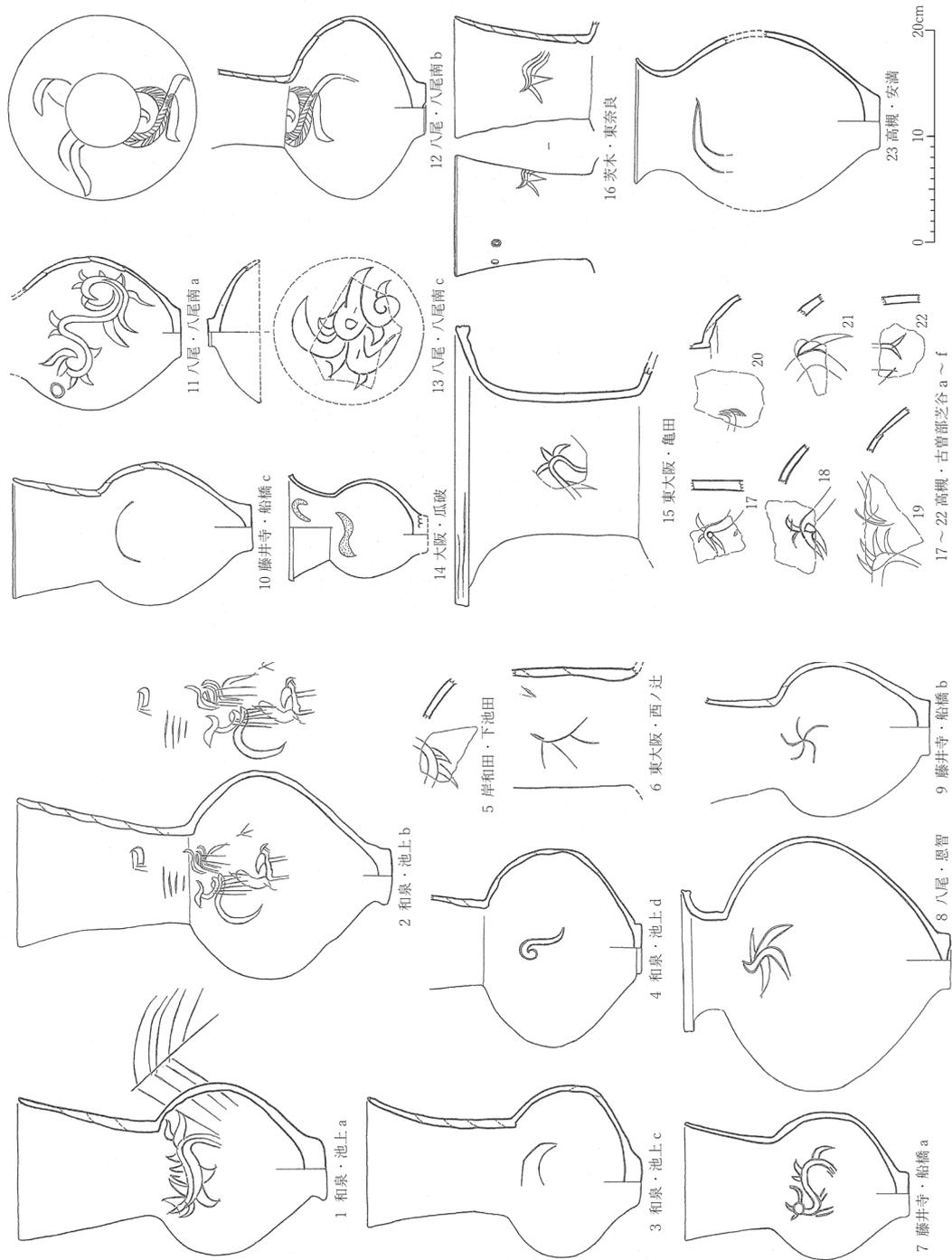


図9 大阪出土の竜を描いた土器

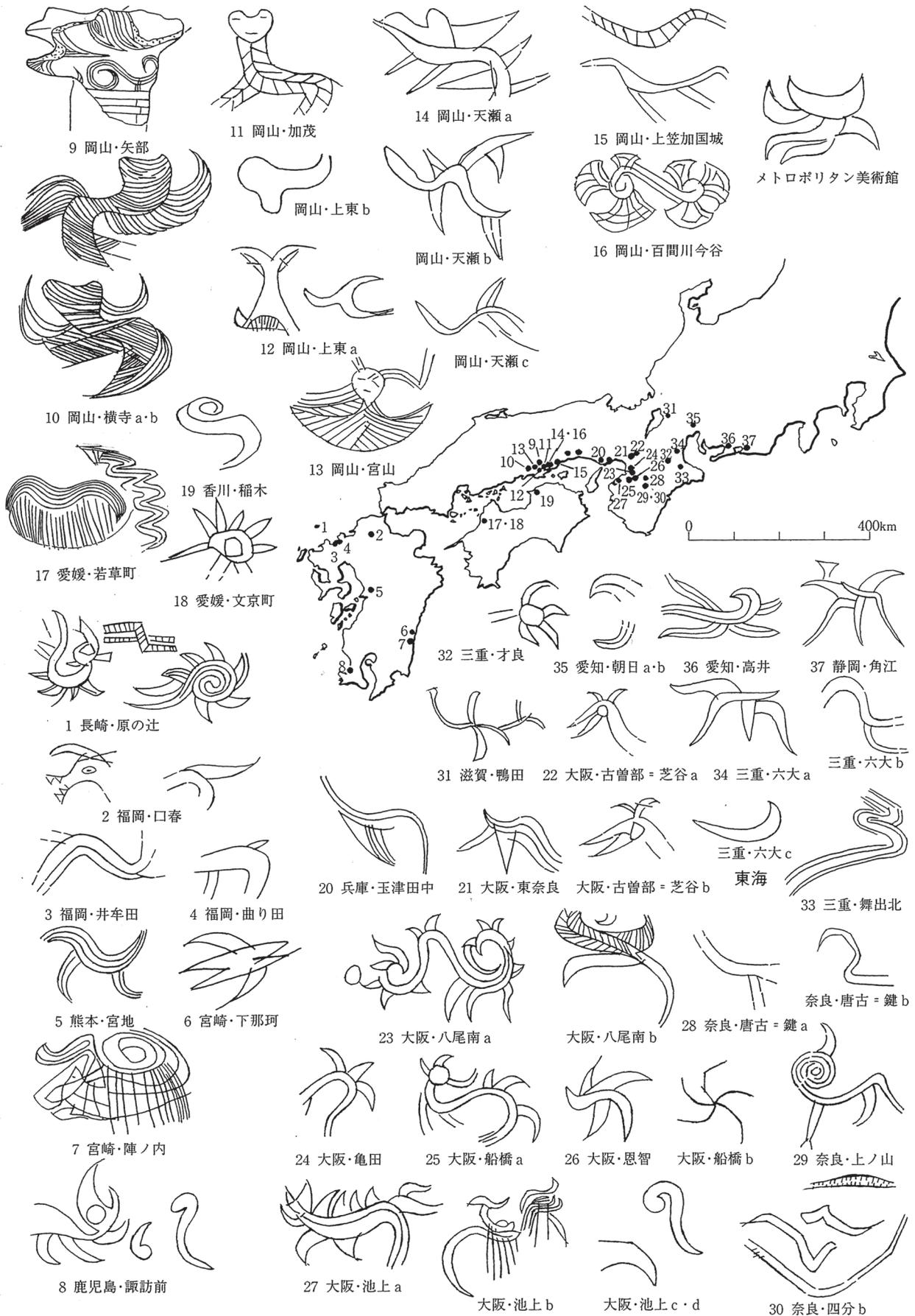


図 10 弥生土器の竜

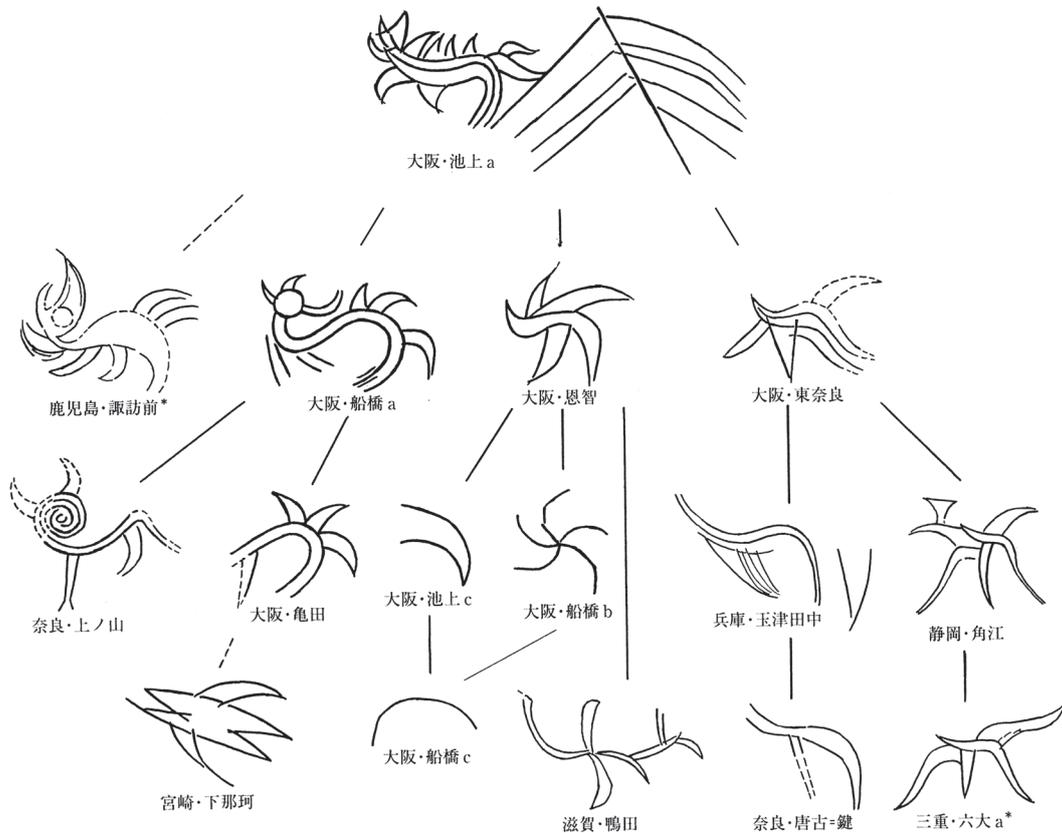


図 11 池上の竜の進化史

した。

次に四国の竜を見ていきます (図 12)。

池上の竜よりも一時期古く、日本最古の竜といえるのは、高槻市古曾部・芝谷の竜で、復元すると1のようになります。それが四国に渡来すると、2の今治市新谷森ノ前遺跡で見つかった例のように左右反転して描いています。四国に早い時期に竜の図像が伝わっている証拠です。これの頭の表現を簡単にすると3になり、次に胴の線を1本だけ拾うと4の東石井のように、簡略化もいきつくところまでいった感があります。胴の線の2本に渦巻状の頭をつけると6の稲木の例になります。さらに、頭頂部と角だけ拾うと5の福音小学校の例のようになりますが、いずれも表現をいくら簡略化しても、竜の特徴をのこしていることがわかります。なお、新谷森ノ前の例は、1つの壺の「正面」とその「反対面」にほとんど同じ形の竜を描いています。雌雄とみるべきでしょうか。

それに対して7~10は別の系譜ですが、これを竜と言っても、納得する人がいるでしょうか。7の釜ノ口a例は、数年前に拓本をとりに行きそれを図化したものですが、右向きの竜で、頭部は口から舌をだし角を細い線で描いていると見ました。すると8の新谷森ノ前c例が

ありました。よく見ると、似ています。そして、これを簡略化すると9の釜ノ口b例が生じます。そして、10の釜ノ口c例は土器を上から見た図ですが、横から見ると、6つの山をつないでいます。以上は釜ノ口a例あるいは先行する明瞭な竜の図像が変化していく一連の過程を示していると私は見えています。

11・12の松山市若草町の例も別の系譜です。11は2つの図像が並んでいますが、どちらも竜だと思います。左の図像は、6本の両端を閉じた波線とその下の縦線を、竜が雨をざあざあ降らせているイメージ画と私は解釈しました。右の図像は、斜め方向に3本の線からなるぐねぐねとした図像があり、上端をよく見ると三角形の頭の表現があります。これも上向きの竜をあらわしているのでしょうか。いずれにせよ、竜と雨との密接な関係を物語る貴重な図像だと思います。12は、11の右側の竜を簡略化したもので、右側が頭でしょう。

四国では以上のように、少なくとも3つの竜の系譜が存在し、それぞれの変遷をたどることができますが、他の地方でも細かく検討すると、同じようなことにならないかと予想しています。

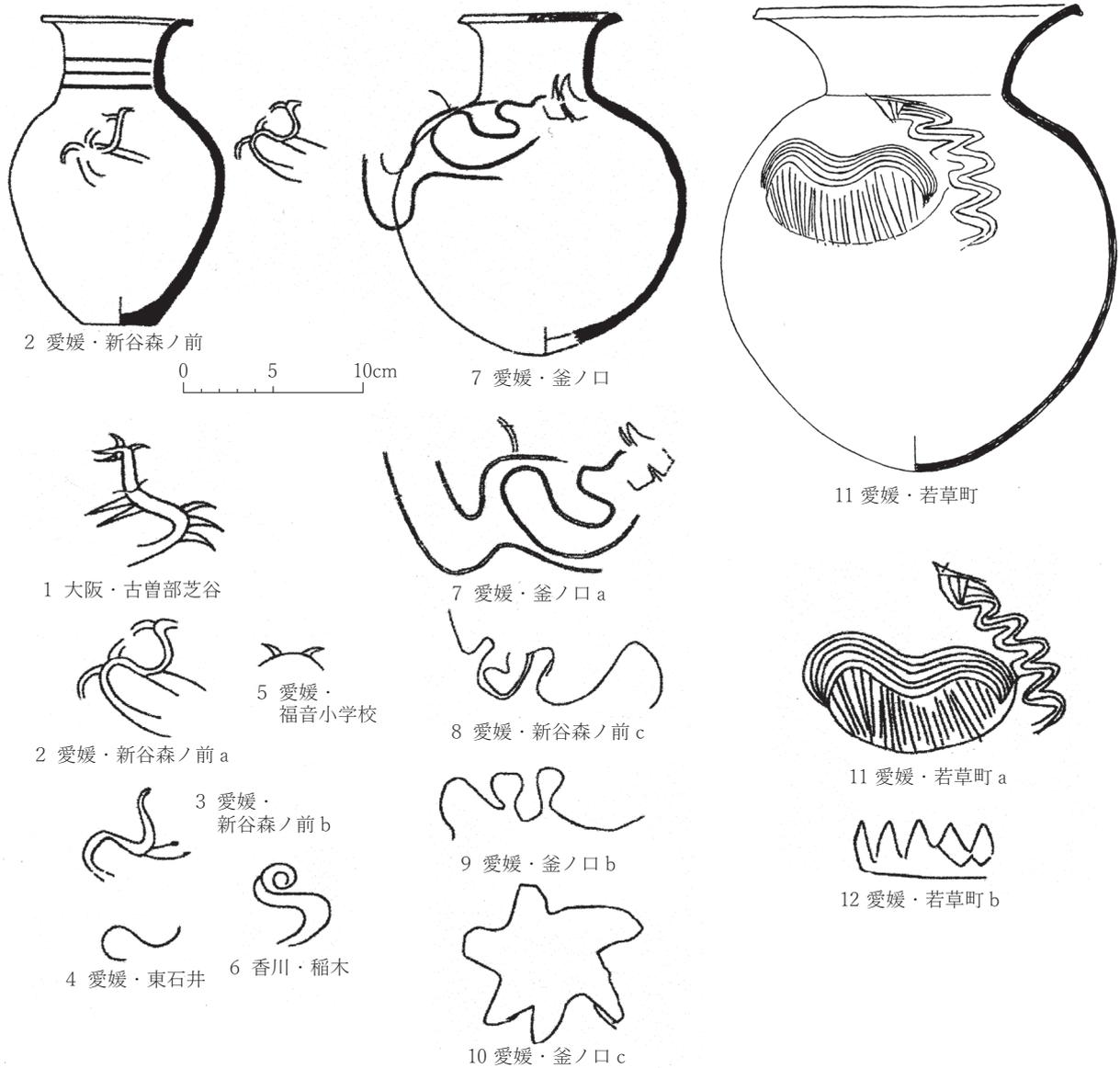


図 12 四国の竜の系統図

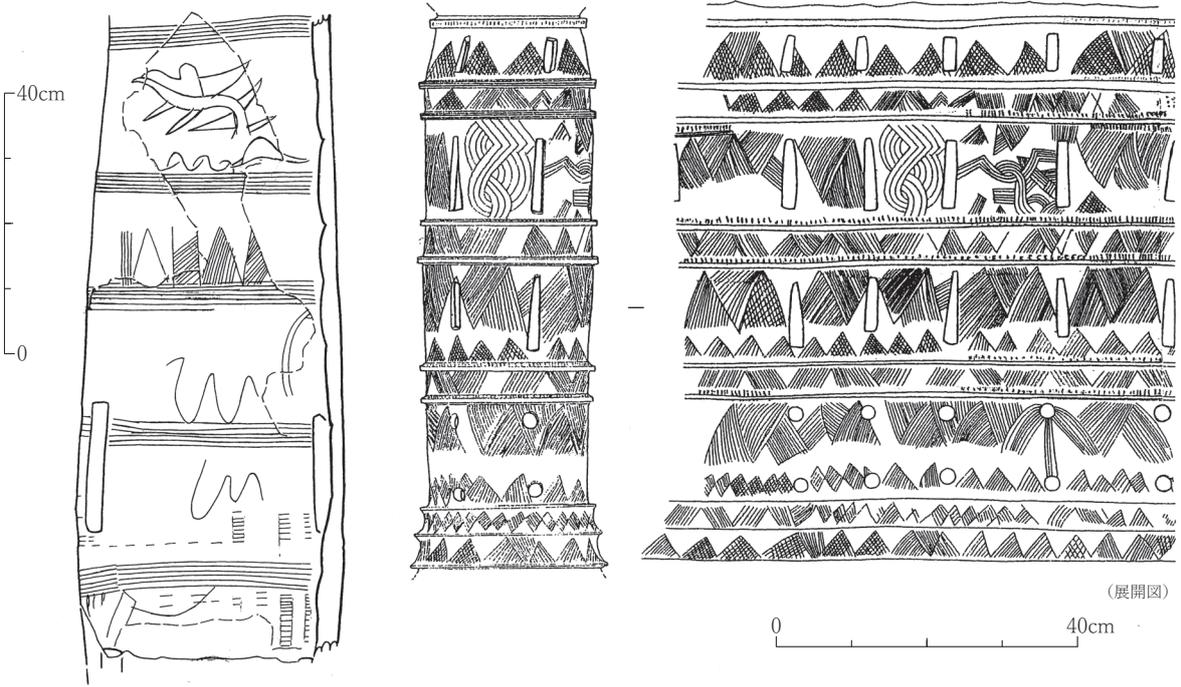
## 6. 岡山の竜

次に岡山の竜を見ていきましょう(図13)。岡山は弥生後期には弥生文化の中心地の1つです。竜は、近畿や四国だけでなく岡山にもたくさん渡来しています。

1は、岡山市天瀬遺跡出土の器台の胴部に竜の図像があります。池上の竜に似てはいますが、少し違います。前脚、後脚、頭から尾にかけて鋭く尖らせたヒレの表現があり、その下のほうに波状の線が見えます。水面を波で表現しているのでしょうか。そこから竜が飛び上がっているようにも見えます。さらに、器台の中央と下に波線が2本ありますが、これもいわば記号化した竜かもし

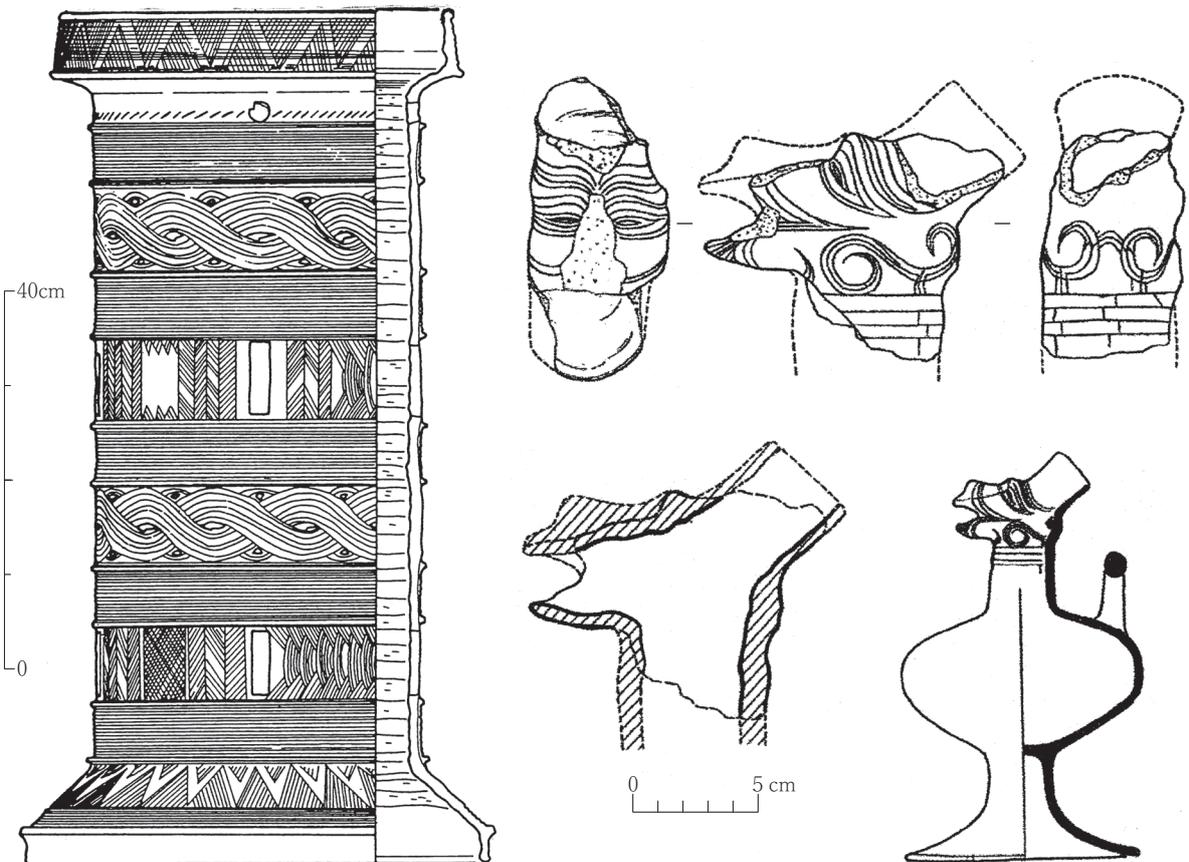
れません。この図像はしっかりしていますが、この器台の形はおかしいし、作りは下手です。粘土紐の継ぎ目が内側にはっきり見えていて、何より重い。5条の沈線も普通の土器に施している沈線とはまったく違います。これは岡山の一つの例ですが、岡山にもしっかりした竜の図像が存在していることを示しています。

吉備地方の「特殊器台」は有名ですが、この名称は特殊な形と文様をもっており、特別に大型であること、集落跡からは出土せずもっぱら墓地遺跡から出土するところから、このようなあいまいな名称で呼んできました。特殊器台はその上に特殊壺をのせて、亡くなった人に捧げたもので、特殊器台は最後に円筒埴輪に変化します。



1 岡山・天瀬

2 岡山・長坂1号墳



3 真庭・中山

4 倉敷・矢部

(復元図)

図13 岡山の竜

2は、岡山市長坂1号墳で発掘された古墳時代になって棺に転用されていた長坂式特殊器台です。弥生後期中頃に位置し、立坂系特殊器台に先行する型式で、私は最古の特殊器台と認めています。

長坂例の外面に施されたすべての図像を展開図にすると、中央に縦方向の波状の図像、その隣に横方向の波状の図像があります。これが特殊器台では最古の弧帯文です。抽象的な文様であって、竜とはいえませんが、縦型弧帯文、横型弧帯文と呼ぶほかありません。

しかし、私のこれまでの話でこの図像を見ると、これは竜が降りてくる図像と、竜が水の中に伏せている図像のように解釈できるかもしれませんが。降竜と伏竜、この器台の図像はほかにもありますが、その中心は明らかにこの弧帯文です。

縦型と横型の弧帯文は、3の真庭市中山例のように、以後、特殊器台の主要な文様になり、やがて特殊器台が円筒埴輪に転形するとまもなく消滅します。

倉敷市矢部から見つかった4の土製品は特に注目すべき遺物です。頭の部分しかのこっていませんが、おそらく台付きの壺で、把手がつき、口の部分に動物の頭を造形していると私は復元しました。目を何重もの線で縁取りしており、角の表現はありませんが、人ではありえず、竜でしかありません。口を開けているのは、なかに酒を入れて傾けると、酒が出てくるようにしているのでしょう。側面にあるS字形の渦文も起源は竜であって、後ろのほうが繋がっているのは、雌雄が交尾しているのをあらわしていると私は想像しています。竜形の土器は近畿地方からはまだ出ていません。

このような造形品があるという点でも、岡山は特異な地域です。さらに、岡山からは人頭竜身、つまり体は竜で頭が人という器台の絵画と石造品が見つかっています(図14)。1の総社市新本横寺遺跡で見つかった奇妙な姿の竜の図像も目と口の表現によって人頭をあらわしています。斜めに帯が出ているのは雷光と解釈すると、竜と雷との結び付きは岡山の土器でも証明できます。

2の岡山市加茂A遺跡や、3の総社市宮山遺跡の例も、人頭竜身像でしょう。

4は、倉敷市榑築墳丘墓の上に建っていた旧・榑築神社で神体として長い間、地上の小祀の中に保存されていた弧帯石で、特に重要です。1辺約92cm、高さ約34cmの石造品は、人頭竜身像だというのは私ですが、身体が竜で頭が人の生き物、しかも女性を高度に抽象化した造形がこの弧帯石だと思っています。比較資料をたくさん示して、確かにこれは竜だと証明しなければいけま

せんが、今日はその手続きを省略します。

先ほど取り上げた長坂式の縦型弧帯文と横型弧帯文は立坂系特殊器台に継承され、さらに発展されています。弧帯文が重なる部分にあげた孔は目でしょうか、竜が体をくねらせている、そして別の段には綾杉文を描いてありますが、このばあいの綾杉文は、池上の土器にあった雷光を定型化したものでしょう。連続鋸歯文を上下に施した脚部の白い部分を追いかけていくと、三角形を意図的にずらしているために稲妻すなわち彷徨電光の形になっています。考古学用語で鋸歯文ですが、文様に意味を込めて、土器に描いていると思います。

## 7. 弥生土器の絵の意味

では弥生土器になぜ竜の絵を描いたのでしょうか。竜は一体何者なのか、あるいは誰が描いたのか、それが大切なことです。

竜は何者なのか、後漢代の『説文解字』の中で、竜は「春分にして天に昇り、秋分にして淵に潜む」とあります。竜は夏の間は天にいて、秋に地上に降りてきて、水中に潜んでいるようです。そして、春になるとまた天に昇る。竜はなぜ天と淵を往復しているのか。それは、竜が雨、水を司っているからです。水田稲作を行っている弥生時代は、水がもっとも大事な問題でした。水田の水が粘れると米を作れません。あるいは長雨が続くと水田が水没してしまって収穫を望みません。井戸の水が粘れると日常生活に不便を来します。弥生人は、水の問題を絶えず抱えていたわけです。気候の歴史では、弥生後期の紀元後1世紀を頂点として、天候が非常に不安定な時期を迎えています。竜を描いた土器を作っていた時代の自然的な背景は天候不順にありました。

弥生土器の絵画は特に中期に発達していました。紀元前2世紀から前1世紀の200年間は、土器に絵画を描くことが盛んでした。奈良県唐古・鍵遺跡や、近くの清水風遺跡から絵を描いた土器がたくさん出ています。描いている絵で多いのは鹿と鳥、そして高床倉庫です。

鹿の一番の特徴は、春に角が生えはじめて、秋になると立派になって、冬から春先にポロっと落ちることです。春に生え始めて、秋に立派に成長するという生態は、春に稲刈を撒いて秋に収穫する稲作のサイクルと重なります。そこで鹿の角を稲に、鹿の体を土地にたとえ、鹿を土地の象徴とみていたのではないのでしょうか。

次に多いのは鳥です。私はサギだと言っていたのですが、大阪府東大阪市池島遺跡で弥生中期の水田跡で見つ

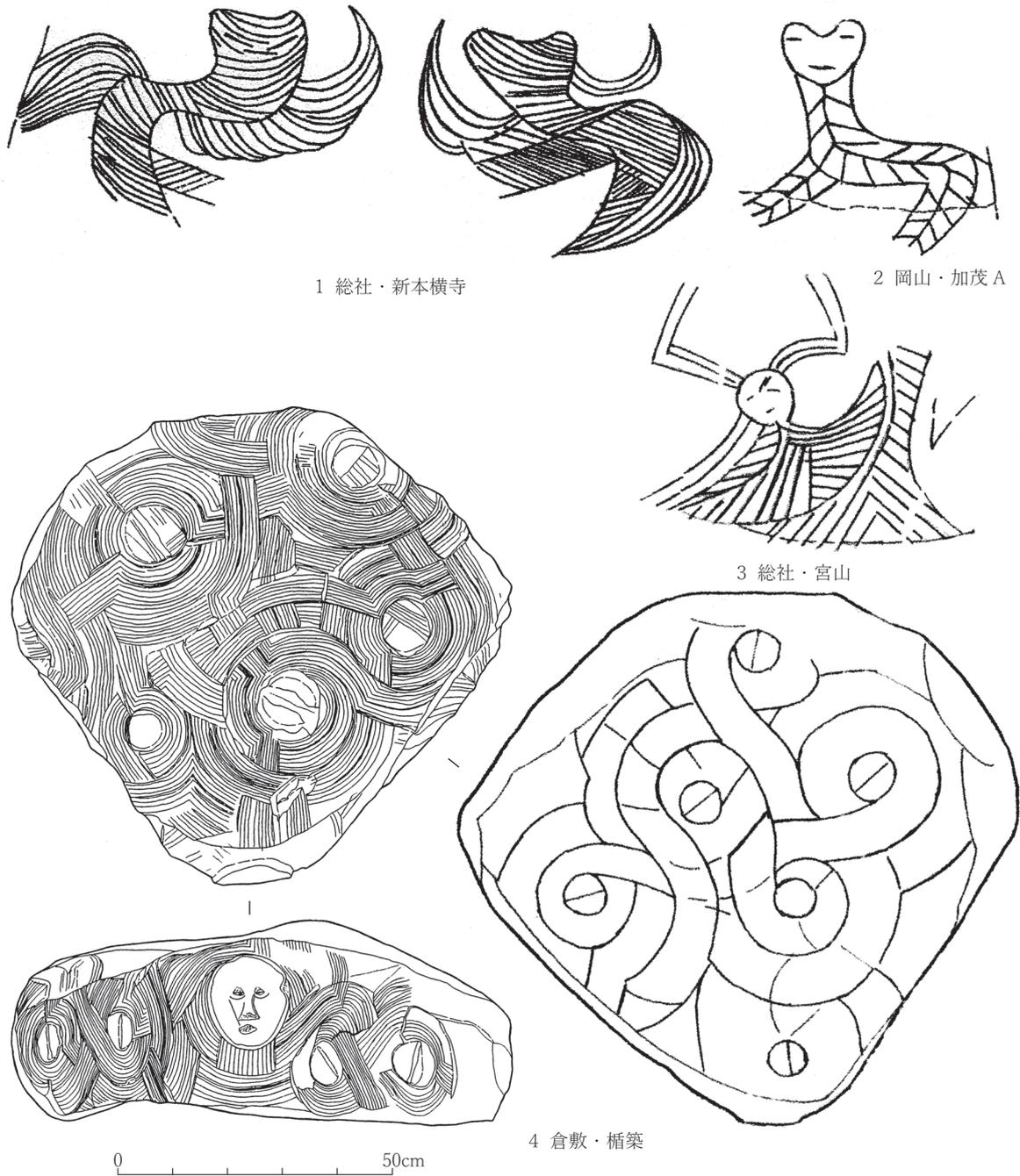


図14 岡山の人頭竜身の線刻画と弧帯石

かった鳥の足跡を調べた奈文研におられた松井章さんはコウノトリと鑑定し、弥生土器や銅鐸に描いてある鳥の絵もサギではなくコウノトリであると主張しました。私は最初はツル、のちにサギだと書いていましたから、それでいくと詐欺師になってしまいます。しかし、サギもコウノトリも神聖な鳥として彼らは大事にして、信仰の対象にしていたと考えてもよいのではないかと思います。コウノトリは今ではなかなか見ることができませんが、サギは今も水田に行くといっぱい見ることができま

す。真っ白な美しい身体は神々しさを感じさせます。水田にいるのは、カエルとかメダカを食べるためです。弥生人はサギやコウノトリを見て、水田の守り神だと信じ、稲の象徴とみていたのでしょう。

そして、高床倉庫は収穫した米を蓄える大事な倉です。弥生中期の人たちは、鹿とサギまたはコウノトリと高床倉庫を絵画の主要な題材にしているのは、深い意味があったことでした。ところが、弥生中期の土器や銅鐸には竜の絵がまったくありません。

竜に関する情報は弥生後期に初めて中国から日本列島に入ってきました。それは天候不順という自然環境の変化と結びついて、近畿の弥生人の間に普及したのだと思います。日照りがつついて水不足とか、大雨が降りつついて洪水とかはそれ以前にもあったはずですが、しかし、水を司る精霊は何か、わかっていなかったのでしょうか。稲妻を見ても落雷におびえても、何が雷を起しているか理解できなかった。ところが、中国の人が、雷雨の正体は竜であって、竜が水を支配している、水の精霊は竜だと教えてくれた。そこで、弥生人はそういうことだったかと納得したのでしょうか。日照りが続き、田んぼに水がなくなる、井戸の水が枯れる、これは死活問題です。そういうときには、水を司っている竜に、雨を降らせてくださいと、井戸の水をいっぱいにしてくださいと、祈りをお願いします。その時に供え物をいれる壺に竜の絵を描く。壺の中に入っているのは酒でしょうが、この酒を「竜様」に捧げますと宛先を描いているのです。宛先を描いておかないと、誰が飲むかわからない。竜の絵を描いておくと竜しか飲まない。現在の手紙も、宛先だけは書いておかないと相手に届かないのと同じことです。

## 8. 竜の絵を描いたのは男性

池上の竜は、頭部、角、四脚などを意識して描いてあり、きわめて論理的な図像です。作者は、竜の正確な情報を身につけて、おそらく2分もかけずに一気に描いています。ところが、この土器自体の出来は悪いものです。恩智の竜は、簡略化は相当に進んでいますがセンスの良さを感じさせます。しかし、この壺も大きさの割に重く、中軸線は少しずれています。なぜそういうことが生じるのか。弥生土器は、女性が作っていると考えられていますが、女性のすべてではなくやはり上手な人が作っているのでしょうか。男性は一般的に土器を作っていないと思います。

では、竜を土器に描いたのは、男性か女性か。竜の情報を誰からどのようにして手に入れたか。この時期の朝鮮半島の土器には竜の絵はありませんので、後漢代に中国の人から日本で竜についての知識を得たか、それとも弥生人が中国まで行って、竜の存在を知ったかどうかです。では、男性も女性も竜を知っていたかどうか。魏志倭人伝ほかによると、中国に行っている女性は生口・奴隷としてです。それ以外に女の人が行ったとは思えません。卑弥呼は倭国の女王ですが、中国に行ったことはないでしょう。中国の都まで行き、中国の最新情報を得

て帰る、あるいは何かを持ち帰ることができたのは男性ですから、男性だけが竜を知り、竜の図像も描くことができたはずですが。

池上の壺は、いつも土器を作っている女性が形を作ったあと、男性から教わった竜の絵を描いたのでしょうか。それとも、女性が土器の形を作ったあと、男性が竜の絵を描いたのでしょうか。それとも……、難しい問題です。この問題を解く鍵の一つは、この土器の作りが下手だという事実です。土器作りに手慣れた女性だったら、器壁を薄くし、口縁部などをシャープに作ります。しかし、この壺は厚ぼったくて重いし、口縁部の仕上げも甘く、土器作りに慣れていない人物が作ったものです。そこに整然とした竜の絵を描いてあるのは、この壺を作ったのは男性であり、この図像を描いたのも男性であるからだろう、というのが私の推定です。

竜の情報を弥生人に伝えたのは中国の男性、あるいは中国に行ったことのある弥生人の男性であるとする、その証拠がほしいところです。この時期に中国との交流があったことを示しているのは、当時の貨幣が弥生遺跡から見つかっていることです。岡山の高塚遺跡では貨泉が25枚出ていますし、大阪では瓜破遺跡で見つかっています。このことは、中国の人が日本に来ている間接的な証拠でしょう。弥生人が向こうで貨幣をもらって持ち帰ったこともあったかもしれませんが、やはり中国の人が持って来て、何かを買ったと考えてみてはどうでしょうか。もちろん貨幣経済ではありませんが、お金の価値は中国の人が決めたらよいので、日本ではお金がまったく通用しなかったと考えることもないと思います。

それから、紀元後1～2世紀は、近畿地方では突線鈕式銅鐸を作っている時代です。滋賀県野洲市大岩山から見つかった最新の銅鐸の場合は、高さ134cm、重さ45kgあります。使っている青銅は鉛の同位体比の分析などから中国北部産と推定されています。銅鐸の原料が大量に入ってきているわけですが。岡村秀典さんによると、紫金山古墳出土の竜の図像を描いた方格規矩鏡は、中国の王宮で使っていた鏡だとのこと。そのような特別な王莽鏡が日本列島のどこかにもたらされたあと伝世し、最後に古墳に副葬されている。そうであれば、この鏡が弥生人の手にわたる時にあれこれの情報も入っているはずで、その中には竜も含まれていたかもしれません。中国の人は近畿だけでなく他にも行ったと思いますが、それも一回だけでなく何回も来ているでしょう。そうすると、人によって言うことが違い、竜についての説明もいろいろあったでしょうから、日本列島の竜の図像にいく

つかの系列が生じるのは当然です。近畿の竜と、四国の竜が違う形をしている理由は、日本に入ってくるルートや、伝えた人が違うというようなことがあったのではないのでしょうか。弥生土器の多様な竜の図像が生まれた理由を私はこのように理解しています。

以上、大阪に竜を渡来させたのは男性であり、男性が壺に竜の絵を描いて、雨乞いあるいはその反対に雨に止んでほしいとの願いをこめて祭祀をおこなった、それがこの壺に描かれた竜の本質であろうと考えてみました。

池上の竜の絵に戻ります。これを描くのにどれだけの時間がかかるのか、ああでもないこうでもないと迷わずにしっかりしたイメージを頭の中にもっていると、1、2分もあれば描けます。池上の竜に2分間かけたとして、脚1本、ヒレだけの竜であれば1秒もかかりません。それくらい省力化が進んでいます。しかし、それほど弥生後期の人たちは、生活に追われていて1分1秒を大事にしていたとは考えられません。これは人間がしばしばおこなう手抜きでしかありません。

私たちの世界でもっとも難しいのは、最初に新しい考えなり、新しい絵や図像なり、形なりを創出することで、その時に人はもっとも頭を使います。研究のばあいも、まったく新しい分野やテーマを創造する作業がもっとも大変なことで、その時は知恵を絞って、何日も何年もかけて成果を出そうと努力します。ところが先例ができると、次からはそれを継承できます。何事においても最初に創造した人はすばらしい精神の持ち主であって、池上の竜には、その精神がたまっていることを私は感じます。

### 9. 久宝寺遺跡の竜

最後に、八尾市の久宝寺遺跡から出土した土器の興味深い図像を取りあげて終わることにします(図15)。

この壺は池上の壺と時期はそう変わらないくらいでしょう。報告書では、「弧帯文」で済ませっていますが、ひじょうに精緻な図像です。この図像を観察してみると、これもやはり竜です。左に上顎と下顎、舌を出しています。その右側に頭と胴を兼ねた体をくねらせています。胴の下側に前脚と後脚が出ています。胴の右から右上にかけて尾があります。古墳時代の金銅製鞍金具の竜の造形(図15下)とくらべてみても、久宝寺土器の弧帯文は、竜の図像を高度に抽象化した図像だというのが私の解釈です。この壺も出来は悪く、暗い赤褐色なので、図像はよく見えません。土器作りの上手な人だったら、器壁を薄くして軽くしますが、この土器はずっしりと重い。にも

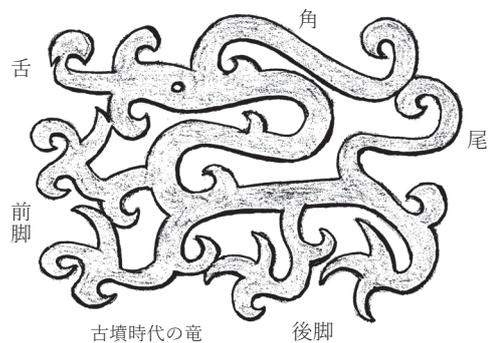
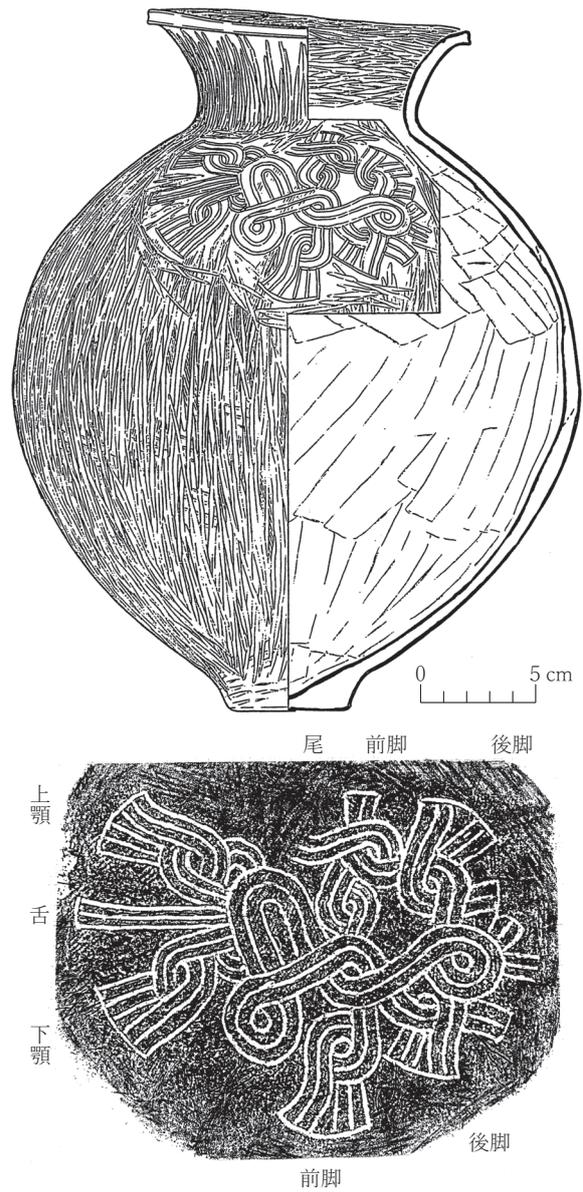


図15 久宝寺の竜

かかわらず、図像だけは極めて論理的で精緻です。この土器を作ったのは男性、図像を描いたのも男性の可能性が大きいと私は思います。

これが面白いのは、この図像は楯築墳丘墓の弧帯石の下面に描いてある図像(図14-4右下)とよく似ていることです。

楯築の例は、久宝寺の図像を、より抽象化しているように私にはみえます。そういう点から大阪と岡山との間には何か関係があるように思います。

竜の図像に起源をもつ弧帯文は器台、特殊器台に描かれ、特殊器台は円筒埴輪に継承されます。その特殊器台や円筒埴輪は奈良県桜井市箸墓古墳から出土しています。卑弥呼の墓とされる最古・最大の前方後円墳から弧帯文を施した吉備の地域象徴が出土している事実は、もっと真剣に考えてよいことだと思います。竜の話は、竜だけに終わらず、日本の古代王権の成立の問題にまでかかわる重要な研究課題であることを述べて私の講演を終わることにします。

\*この一文は2024年10月12日に大阪府立弥生文化博物館で開催された「発掘された日本列島2024」地域展開連講演をもとに文章化したものです。種々お世話になった高瀬裕太さんに深く感謝します。

補記

図10は2010年に作成したのですが、これに載っていない竜の図像を、すべてではありませんが、追加しておきます(図16)。

2の老岐市の例は、焼成後に器面をコツコツとつついて線刻したもので、同じ老岐の原の辻に似た図像があります。3の福岡市の例は、竜の親子でしょうか。4の松山市の例は、双頭の竜とも両目の表現とも取れます。5の高槻市の例は、右向きの竜で、近畿では少ない線条の表現です。6の神戸市の例は、U字形を連結し、その下に波状の線を2段重ねてい

【文献】

岡村秀典 2021「舶載された王莽宮廷鏡」『史林』101-5、史学研究会。  
井藤暁子ほか 1979『池上遺跡』第2分冊、土器編、大阪文化財センター。  
白川 静 2004『新編「字統」』平凡社。  
新村 出編 2018『広辞苑』第7版、岩波書店。  
春成秀爾 2011「龍の文化史」・「弥生時代の龍」『祭りと呪術の考古学』  
塙書房。  
林 巳奈夫 1995『龍の話』中公新書、中央公論社。  
春成秀爾 2023「四国の弥生絵画」『四国考古学の最前線』季刊考古学  
別冊41、雄山閣。  
大阪府立弥生文化博物館編 2009『倭人がみた龍』大阪府立弥生文化博  
物館図録40。  
第2阪和国道内遺跡調査会 1971『昭和45年度第2阪和国道内遺跡発  
掘調査報告書』3、第2阪和国道内遺跡調査会。

ます。7の横浜市の例は、右向きの竜の頭上に右向きの鹿を置き、激しい雷と雨も描いているようです。8の柏市の例は、左に頭、胴の途中は隠れて右に尾をあらわしています。

いずれも「これが竜か」というような、抽象的な表現であって、描いた人の竜のイメージがまちまちであったことをよく示しています。大陸に近い老岐や福岡の竜が、はなはだ抽象的な表現であることは意外です。竜の情報は、関東地方まで伝わっていたことが7と8からわかりました。

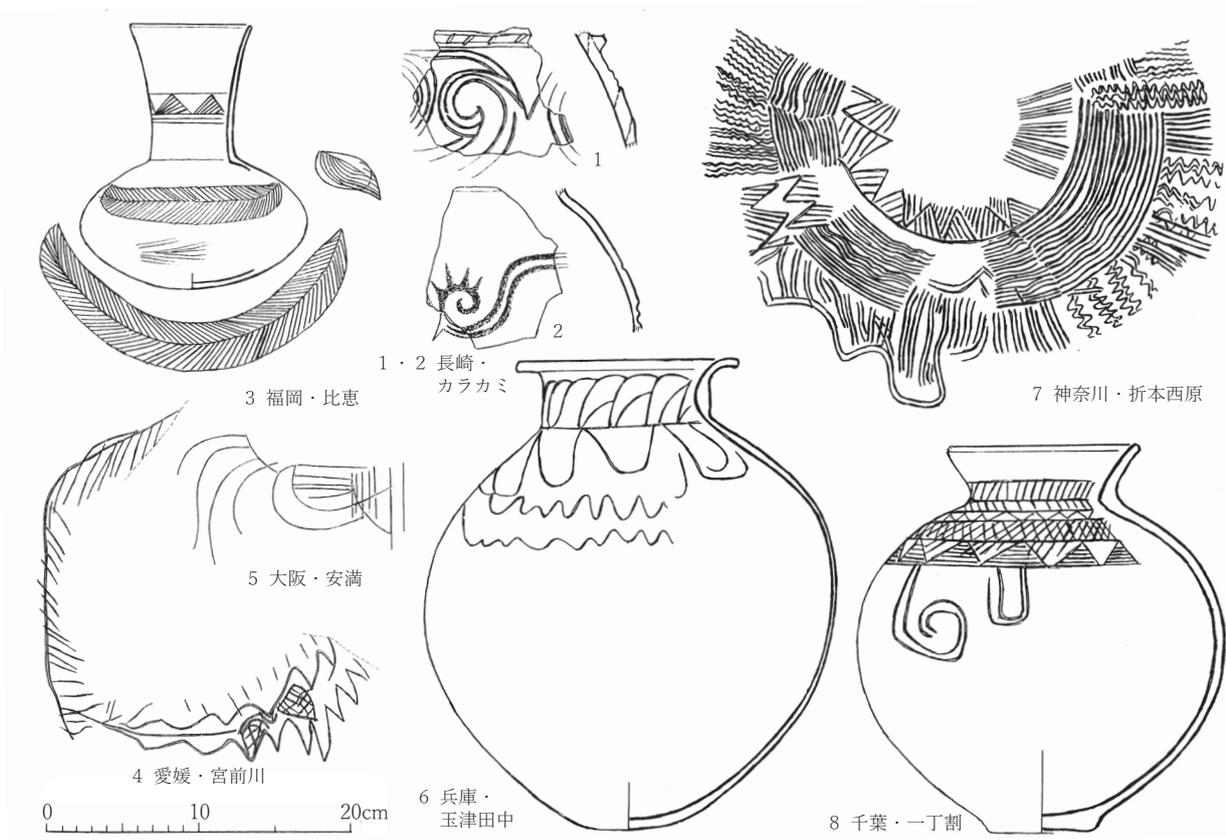


図16 九州から関東地方の竜

### 執筆者紹介（掲載順、敬称略）

塚本浩司	公益財団法人大阪府文化財センター 主査
三好 玄	大阪府立弥生文化博物館 学芸総括（大阪府教育庁）
高瀬裕太	大阪府立弥生文化博物館 学芸員
石束 礼	大阪府立弥生文化博物館 学芸員
春成秀爾	国立歴史民俗博物館 名誉教授

#### 【編集後記】

『弥生文化博物館研究報告』第9集をお届けいたします。

当館は令和5年度より、AKN 共同事業体が指定管理者として管理運営をおこなっております。第8集が刊行されたのは前指定管理者である公益財団法人大阪府文化財センターが管理運営をおこなっていた時期にあたり、本書は新体制として初めての発刊となります。

研究報告の刊行は、当初から取り組むべき課題となっておりますが、直接の契機となったのは令和6年度秋季特別展「発掘された日本列島 2024」の地域展「大阪に伝来した龍」の関連講演会でした。講師としてお招きした春成秀爾先生より、講演の後に「講演内容を何か形にできれば」というお声かけをいただいたことから準備が始まりました。

外部研究者として直近在籍していた学芸員 OB、OG に寄稿を呼びかけ、現在博物館にてともに管理運営にあっている大阪府教育庁および指定管理者所属学芸員の論考とともに本号を構成しました。

先輩学芸員の塚本氏からは、ご自身が担当された発掘調査事例などをもとにした論考を賜りました。ご自身の研究内容に加え、博物館離任後の業務の成果についても窺うことができる内容となっております。

在籍学芸員の論考については、展示および博物館所蔵資料にまつわる検討、あるいは自身の研究成果がベースとなっています。日常業務と並行して考えをまとめることはなかなか大変ではありますが、今後の館の活動のためにも重要なことと自分たちに言い聞かせながら形にした次第です。

そして春成先生には、文字起こしした原稿を「講演録」としてまとめるため、幾度もの推敲のお手間をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

試行錯誤のうえ、様々な業務をこなしながら、指定管理期間最終年次である本年、ようやく本号刊行に漕ぎ着けました。終わってみればあっという間の3年間でしたが、次年度以降も引き続き AKN 共同事業体が管理運営にあたることとなりましたので、今後も計画的・定期的に研究報告を刊行できるよう取り組んでいく所存です。

当館では、令和7年度に「館蔵資料等デジタルアーカイブ」を公開したほか、令和7度より展示パネル等の多言語化改修などを実施するなど、多くの新たな事業を進めています。業務は多忙ですが、本書序にて瀬田館長が述べておりますように、地域の方々に親しみをもっていただける取組と資料の価値を発信するための研究を両立させるべく、館員一同一層精進してまいります所存です。来館者・関係者の皆様におかれましては、今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

(T)

## 弥生文化博物館研究報告 第9集

---

制作日 2026年3月31日  
編集・制作 大阪府立弥生文化博物館  
(指定管理者：AKN 共同事業体)  
〒594-0083 大阪府和泉市池上町4-8-27  
電話 0725-46-2162  
FAX 0725-46-2165  
表紙デザイン 株式会社 アド・ポポロ

---



